

故原洋之介先生追悼文集

アジアと日本の発展に 心を寄せて

故原洋之介先生追悼企画発起人一同 編



ESCAP (国際連合アジア太平洋経済社会委員会) 勤務時期、タイでのフィールド調査 (右から二番目)



ESCAP 勤務時期、フィールド調査 (右端)



アジア人口・開発に関する国際会議
(1987年、バンコクにて ESCAP 開催。右端)





東京大学退任時。最終講義にて (2006 年)



2002 年ラオス調査時 (教え子の松島さん (右端) とビエンチャン近郊のネギ農家にて)



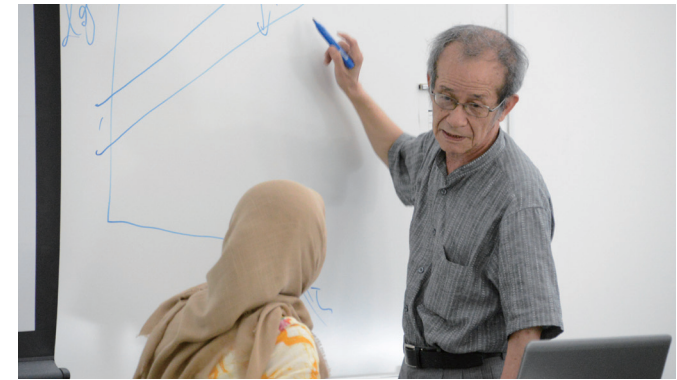
東京大学退任時。最終講義にて (2006 年)



ラオス国ジャール平原に佇む原先生



EPP プログラムの卒業式にて学生と記念撮影



GRIPSにて教鞭をとる原先生



EPP プログラム卒業式



GRIPS 農業政策短期特別研修で地方自治体の明日を担う農政担当者に熱弁をふるう原先生



2018年インドネシア訪問時にEPP卒業生に囲まれる原先生(前列左から4人目)



ディレクターを務めたEPPプログラムの卒業式

故原洋之介先生追悼文集
アジアと日本の発展に心を寄せて



インドネシア訪問時、車両にて
(酒とタバコを愛された)

はじめに

アジア経済や日本の農業経済の分野において長年にわたり活躍された、原洋之介先生が二〇二一年四月三日に逝去されました。先生は東京大学及び政策研究大学院大学において多くの学生を教育し、また、学界において多くの研究者に影響を与えられました。暖かい人柄、豪快な笑い声により多くの人から慕われた先生でした。

原先生への追悼と感謝の意により、政策研究大学院大学にて原先生が主催されていた「アジア研究」の研

究会関係者が発起人となり、原先生を悼み、先生の功績を振り返るべく追悼文集を作成することといたしました。

本文集では、原先生と長年にわたり親交のあった、絵所先生、斎藤先生、嶋田先生、末廣先生に原先生の研究、業績を総括いただきました。加えて、多くの関係者から追悼文の寄稿を頂きました。本文集により、原先生の遺されたものの大きさが改めて認識されるものと思います。

原先生は、アジア経済のみならず、日本の農政・農業経済にも精通され、非常に幅広いフィールドで研究されたため、執筆頂いた方以外にも多くの方との親交があったものと思います。今回、発起人が知りえた範囲で関係の方々に執筆を依頼しましたが、ご依頼できなかった方もいらつしやると思います。この点、発起人一同よりお詫び申し上げます。

本追悼文集が、アジアと日本の広大なフィールドにおいて一つの学問分野の枠に留まらないスケールの研究をなされた原先生の功績を振り返り、また、原先生と皆様との親交を思い起こすものになりますと幸いです。

故原洋之介先生追悼企画発起人一同
白石 隆（政策研究大学院大学名誉教授、政策研究院チーフ・エグゼクティブ・ディレクター）
後藤健太（関西大学 経済学部教授）
工藤年博（政策研究大学院大学 教授）
篠田邦彦（政策研究大学院大学 教授／政策研究院参与）

椎野幸平（拓殖大学国際学部准教授／政策研究大学院大学 政策研究院リサーチフェロー）
浅岡浩章（政策研究大学院大学 政策研究院参与）

目次

写真——
はじめに—— 3

1 原洋之介先生の研究・業績総括

絵所秀紀 「原洋之介氏の世界―『クリフォード・ギアツの経済学』から『エリア・エコノミックス』への旅路―」—— 9
斎藤 修 「開発経済論における地域・文化・歴史…原洋之介さんの学問」—— 15

嶋田晴行 「政策支援と原洋之介先生―ラオス経済政策支援を振り返る」—— 26

2 追悼文
——原洋之介のアジア経済論—— 34

浅岡浩章 「繋がる原先生とのご縁」—— 41
荒木光弥 「バンコクでの初めての出会い」—— 43
池本幸生 「原先生の思い出」—— 44

伊藤郁美 「Economics, Planning and Public Policy Program (EAPP) と原先生」——47

井上樹里 「故原先生への感謝を込めて」——50

浦田秀次郎 「原さんの思い出」——52

大辻義弘 「知と実践を自由に行き来した巨人」——55

大野泉 「原洋之介先生への感謝をこめて」——58

大野健一 「途上国とつきあい、ともに考えること」——61

大山達雄 「原洋之介先生の思い出」——63

尾高煌之助 「原洋之介執筆『日本農業経済学』の「旧くて新しい」課題」——66

鬼丸武士 「原先生との思い出」——63

株田文博 「農業経済学者としての原洋之介先生」——71

川勝平太 「追悼・原洋之介さん」——74

木南茉莉 「思い出と課題」——78

木村福成 「Original thinker 原洋之介さん」——82

工藤年博 「原先生との思い出」——84

後藤健太 「『地域研究者』としてアジアと向き合うと「いうこと」——87

近藤留美 「原先生との十数年を振り返って」——91

佐藤 仁 「道具を場所に引き戻す」——92

椎野幸平 「原洋之介先生のエリア・エコノミックスに思いを寄せて」——95

篠田邦彦 「原洋之介先生との思い出」——98

柴田暖子 「原洋之介先生と政策研究院——『アジア研究』に寄せて」——102

嶋田晴行 「原先生の国際協力」——104

下村恭民 「原洋之介先生追悼 アウンサンスーチー邸の伝説」——107

白石 隆 「原さんと出会った頃」——108

鈴木 董 「原さんの思い出」——110

ケオラ・スックニラン 「原先生に感謝を込めて」——112

高木佑輔 「知的冒険のために」——114

田中明彦 「原洋之介先生のこと」——117

田中耕司 「『それはゲームだよ』で始まったおひさまあ「い」——119

中西嘉宏 「原先生に言われたかった『バカ』」——122

濱下武志 「原洋之介さんを偲ぶ——一九八〇—九〇年代の東洋文化研究所」——125

早山隆邦 「リプロ研のこと」——129

平野統三 「原先生に触れて」——136

深尾京司 「原洋之介先生を偲んで」——138

藤田幸一 「原洋之介先生への追悼文」——147

藤原昌樹 「原洋之介先生との思い出」——145

松島陽子 「原先生の思い出—タイ、ラオス、そして沖繩」——149

三重野文晴 「原洋之介先生と出会って」——151

森地 茂 「原洋之介先生の思い出」——153

谷田部みき 「笑顔、笑い声から学ばせていただいた、人としての在り方」——155

渡辺 修 「原先生とGRIPSの『21世紀アジア研究』について」——156

Wahyu Prasetyawan “Guiding into Economics” Pandora Box”——158

3 略歴——160

4 業績リスト——163

5 御礼思い出(視線 これから)——195

原 昭子

1 原洋之介先生の研究・業績総括

原洋之介氏の世界

——『クリフォード・ギアツの経済学』から『エリア・エコノミックス』への旅路——

法政大学名誉教授

絵所秀紀

原氏の著作を紐解く時におぼえるわくわく感は、どこか小林秀雄や花田清輝の評論を読むときのそれによく似ている。

一九八五年か八六年の頃、用あつて京都大学の東南

アジア研究センターをはじめて訪問し、所長の石井米雄先生にお会いした。その時に石井先生から「原洋之介さんの『クリフォード・ギアツの経済学』、どう思う？」と聞かれた。それが、『クリフォード・ギアツ

の『経済学』（以下『ギアツの経済学』と略記する）との出会いであった。

一読して、驚いた。なにしろ「シュルツの文化学、ギアツの経済学」という、思いもしなかった逆説的な小見出しがついていたからである。卓抜な発想である。そして原氏の『ギアツの経済学』を解説する方法は、ギアツが用いた方法そのもの—すなわち「文化の解釈学」であるという点にも共感を覚えた。

『ギアツの経済学』で、原氏が探求したものは何か。氏の言葉によれば、「経済発展理論の構図」を描き出すこと、すなわち「東南アジア諸国の経済発展過程を観察し分析しようとする社会科学の理論を構想」すること、である。

シュルツとギアツの対立は、経済学者の「『経験的多様性への嫌悪』にもとづく『形式化』への志向」という知と、地域研究者の「『経験的多様性への愛着』にもとづく『個性』への執着」という知の対立である。原氏の心情は明らかに後者の知に引き付けられて

いるが、しかし理論化への愛着も強くもっており、結果的に「ああ、俺の胸には二つの霊が宿っている」ということになっている。しかしもしこの対立を克服することができるならば、「地域研究の経済学」、すなわち氏の言う「経済発展理論」あるいは「社会に埋め込まれた経済論」を描き出すことができる。

原氏は、ギアツのテキストを解説するという方法を用いて、自らに果たしたこの課題の解決に迫った。解説の対象となった主なテキストは『行商人と王子』（一九六三年刊）である。氏によると、ギアツが描き出したジャワ社会の経済は、バザール（市場）、デサ（村落）、企業型経済という三分法でとらえることができるという。バザールでの経済取引はつねに売り手と買い手の間での値引きを中心とした「騒々しい交渉」であるが、しかし同時に経済取引を長期にわたって持続させていくための工夫として、信用供与をてこととした「顧客関係」が形成されている。デサでは、農民たちは自らの世帯の個別的利益を求めて農業生産に従事し

ているが、農繁期になると知り合いの範囲内で労働交換をおこなう。この労働交換はスラムタン（農民たちの間での共食儀礼）によって維持されている「ルクンの顕在化である。ルクンは、農民相互の援助や協力を尊重する価値を指すが、その結果「貧困の共有」というジャワ農民の行動が再生産される。企業型経済には、二つの異なった担い手が見られる。ヒンドウー

的国家ヌガラの貴族・官僚層から出自したもの（王子）と、バザールの行商人出自のものである。前者は「伝統的農村型経済から企業型経済への移行」であり、後者は「バザール経済のなかでの企業型経済の形成」である。原氏は「それが生起する前提となる社会構造

のちがいによって、その具体的内容が非常に異なってくる」と説明している。ところで企業型経済を論じる中で、原氏はギアツの議論にはない新たな議論を盛り込んだ。それは「二者関係を社会構造形成の基本原理とするタイ」において、伝統的労働市場の構造は「二者間経済取引の連鎖の中にはめこまれた短期契約型労働

市場」になるといふ議論である。工業化の進展に伴って、タイでも企業型経済が形成されてきたが、それは「ヨコ型内部組織」と「個人給方式」によって特徴づけられるもので、伝統的二者間関係を反映したものになっていると論じている。

原氏はギアツの経済学をこのように整理したうえで、バザールもデサも企業型経済も「社会に埋め込まれている」ことを示しており、またこうした諸制度は経済が成長すればやがてなくなってしまう「前近代」あるいは「非効率的」な制度ではなく、「それなりの秩序をもった効率的な経済制度」だと論じている。

『ギアツの経済学』が出版された一四年後に、その「改訂版」である『エリア・エコノミックス』が出版された。そこでは、こう記されている。「経済学は、ある地域の個性を課題として取り扱える理論体系になっていない。・・・経済学の方法をその根本で見直し地域研究の視点を取り入れてそれを再構築する作業を

踏まえないと、それへの取り組みすら考えられなかった」と。「地域の個性」を描き出すことを課題とする「地域研究」を進めるためには「経済学の再構築」が不可欠だ、という認識である。

この度、『ギアツの経済学』と『エリア・エコノミックス』という二つの書物を何十年かぶりに手にとつて比較して、気づいた点が三つある。一点目は、この間に不完全情報の経済学が新古典派経済学に取って代わって、アメリカ経済学会の主流になったことである。『ギアツの経済学』でもすでにアカロフの「レモンの経済学」への言及があり、そこで強調されていた社会的慣習や非市場的制度の果たす役割が注目されていたが、『エリア・エコノミックス』では不完全情報の経済学に対してもますます高い評価が与えられ、氏が提唱する地域研究の経済学との橋渡しが期待されることである。氏によると、不完全情報の経済学は、「市場は常に不完全な経済制度であり、また市場の展開にとっては、情報の収集・提供に専門化する仲介機

関や中間組織が必要不可欠となってくる」ことを明らかにしたからである。すなわち、アメリカの経済学会で生じた「経済学の再構築」によって、地域研究との「生産的な対話」の可能性が高まってきたという認識である。そもそも地域研究者としての原氏の批判の矛先は、一貫して新古典派経済学あるいは新古典派派開発経済学に向けられ続けてきたのであって、ステイグリッツやノースが積極的に展開してきた不完全情報の経済学・経済史の主流化という現象は、氏にとつて十分共感を呼び起こすものであった。²⁾

二点目は、ヒックスの『経済史の理論』やブローデルの『物質文明・経済・資本主義』を読み込む中で、「市場取引の組織者としての商人」が発見されたことである。³⁾「経済発展の中心」は「市場取引の重層構成をもった複数ネットワークを、そこにみつげるる多様な差異をたくみに利用して結節させる経済活動」すなわち「商人の活動」にあり、また「市場とは個々の経済主体の取引行為が連鎖して形成されるネットワー

ク」である、という確信が高まったことである。ここに原氏の言う「地域研究の経済学」エリア・エコノミックス」の核が、誕生したといつてよい。「商業とは元来、モノを媒介とした人間のつきあいのひとつの様相」であり、「市場取引にはそれに先だつ社会関係が色濃くからんでいる」からである。新古典派経済学の核を形作っている「メカニズムとしての市場観」ではなく、ネットワークとしての市場（市場と呼ばれる経済制度）がどのようにして歴史的に形成されてきたのかを追求することを、エリア・エコノミックスの最重要テーマの一つとして設定したのである。「市場経済の効率性」ではなく「市場経済の発達」に、すなわち歴史的動学論としての市場論の構築の必要性を提唱した点に、原氏の最大の功績があった。

三点目はおまけであるが、二箇所及ぶ東畑精一からの引用部分が省略されたことである。というのも、かつて『ギアツの経済学』を読んだ時、無意識のうち小生の記憶の底に残ったものといえは、まず何より

も東畑の言葉であったためである。一つは、「酒なくしてなんのユイかな」という引用であり、もう一箇所はフィリピンのバナナ売りの話である。「一本買うなら1ペソだが、いっぺんに10本全部買うと12ペソだ」という話で、東畑の解釈によるとこれは「いっぺんに10本前部買ってしまつと、客に売る時にべちゃべちゃしゃべりながら楽しんでるバナナ売りのおばあさんの楽しみを奪ってしまうからだ」というエピソードである。東畑はこれを「生活体系の中にとけこんだ売買」として理解しており、こうした理解の仕方を紹介して、原は「社会のなかに埋め込まれた経済」を具体的に考える際の手がかりになると評価した。⁴⁾小生の好きな箇所であったので、それが削除されてしまったのはなんとも残念なことだと思つたが、この二箇所ともに『農』をどう捉えるか』(二〇〇六年刊)で「復活」⁵⁾して、ほつとした。

氏の著作には、詳細なデータが提出されているわけでもなく、また経済学の実証研究に必要とされるデー

タ処理の形跡も見当たらない⁽⁶⁾。その文体は、およそ経済学の専門ジャーナルに掲載される論文とは似ても似つかない。

原洋之介氏の世界は、すぐれて日本的な知の世界に属している。その知は「論文」として表現されるものでなく、むしろ（氏の故郷の先達である柳田國男や和辻哲郎が書き残したような）「随筆」あるいは「評論」として表現される類のものである。そこが氏の「作品」の魅力であり、氏の「個性」である。『ギアツの経済学』は、わが国の地域経済研究の進むべき道を示した名作として、これからも長く読み続けられていくことであろう。

注

(1) 原氏自身によると、「アジア社会に固有の制度や慣習を見直

せという主張をした」「ギアツの経済学」は「私にとつてかけがいのない作品」であり、『エリア・エコノミックス』はそれに「最小限の改定を加えた」ものである。そして『エリア・エコノミックス』は「私の経済学原論」であると記している。大きな変更点としては、『ギアツの経済学』にあった第V章「経済学シヨナリズム」は『エリア・エコノミックス』では「コラム二」に、そして第VI章にあった「ギアツの経済学の周辺で」と題する書評類は削除されている。一方『エリア・エコノミックス』では、『ギアツの経済学』にはなかった「プロローグ 経済学への懐疑」と「エピローグ 地域研究への招待」が新たに書き加えられている。

(2) 原氏が要約しているように、不完全情報の経済学は「個人は合理的であるが、彼らが直面している市場は、決して完全ではない」という想定の下で展開された経済学である。したがって、不完全情報のために生じる市場の失敗に対して様々な社会制度や政府やイデオロギーの果たす役割があることになる。しかし不完全情報の経済学以降、アメリカ経済学会で支配的になってきた行動経済学では、「個人もまた常に合理的であるとはいえない」という、一層現実的な想定や実験結果が報告されている。

(3) 『ギアツの経済学』（一九八五年刊）と『エリア・エコノミックス』（一九九九年刊）の間に公刊された『アジア・ダイナミズム』（一九九六年刊）で全面的に展開された議論である。「比較アジア経済論を求めて―農業経済学からアジア研究へ」の研究遍歴を振り返って（二〇一八）によると、『ギアツの経済学』は「ヒックスの市場発達論を下敷きにして書いたもの」

であったとされている。

(4) 『農』をどう捉えるか』の中で、原氏はこうした東畑の解釈を、東畑は「経済合理性」とは異なる「生活合理性」があることを認識していたのだ、と要約している。ところで、東畑のフィリピンのバナナ売りの価格付けに対する解釈は、インドの場合には異なっているように思われる。小生がインドで得た印象によると、バナナ1本だと1ペソだが10本だと12ペソになるという「非経済学的な」現象が生じる理由は、1本買う人は私（売る人）と同類（ナカマウチ）だが、いっぺんに12本も買う

人は私（売る人）とは異なる部類に属する「金持ち」（ヨソモノ）だから、プレミアムを払って当然だという考えがあるためだと思われる。いずれにせよ、「社会に埋め込まれた」価格付けであることには変わりはないが。

(5) 原氏も心から賛同してくれるものと確信しているが、「酒なくしてなんの研究会かな」、である。もう一度、酒席での原氏の豪快な笑いを耳にしたかった。

(6) 原氏も若い頃には、こうした試みをしていたようである。

開発経済論における地域・文化・歴史

――原洋之介さんの学問

一橋大学名誉教授

斎藤 修

出発点

原さんの学問を振り返るとき、古い友人なら誰しも思い浮かべるのが「新古典派開発経済学をこえる」と

いうメッセージであろう。専門の枠をこえた書き手として頭角を現すようになった一九九〇年前後の時代から亡くなる直前まで、原さんは数多くの著書を世に送

り出した。壮年期からは開発政策への関与を深めたので、開発・援助政策の最前線で活躍するひとというイメージをもたれた方も多いと思う（この面については、嶋田晴行氏の項に詳しい）。しかし、一九八〇年代、九〇年代の原さんは、地域研究と経済学が切り結ぶ地平で斬新な思考法をもって登場した若手の旗手であった。実際、一九九二年に出版された『アジア経済論の構図』のサブタイトルは「新古典派開発経済学をこえて」であった。

ただ、その主張の背景を知るためには、それに先立って書かれた『クリフォード・ギアツの経済学』（一九八五年刊）をみなければならぬ。この本は原さんを有名にしたが、それだけではなく、そこには彼のアカデミックな問題意識とアプローチの独自性がすでに明瞭なかたちとなって現れているからである。

この『ギアツの経済学』は私個人にとっても思い出深い本である。著者自身が「あとがき」で記しているように、それは「リプロ研究会」という、原さんと私

定外の問題や事実の提示が双方向的におこなわれていたからである。それによって、報告をする側も聴く側とともに新たなアイデアや問題の掘り起こしという恩恵に与ることができた。メンバー構成もよかった。それぞれ専門を別にし、出身も所属校もばらばら、自分の土俵に固執するひとはいなかった。学際的という言葉は当時すであつたかもしれないが、原さんも私も「学際」的な研究会を揃えたいと考えたわけではなかった。また、そうではなかったがゆえに、かえって学問領域間の風通しがよい研究会になったのだと思う。いずれにせよ、この研究会の土壌から『ギアツの経済学』は生まれたのである。

経済学

原さんの新古典派ないしは新自由主義経済思潮への批判のトーンがどのようなものだったのか、少し後の時代に『地域研究』の「リーディング・ガイド／私の選んだ五冊」という特集のために寄稿した一文から引

とリプロポート編集部の早山隆邦さんとで一九八〇年に立ち上げ、『アジア経済論の構図』が執筆された頃まで続いた、私的で、縛りのない自由闊達な研究会の産物だったからである。「あとがき」には、「このリプロ研究会の仲間のはげまし」によってこの本を書上げることができたと記されている。この通称リプロ研のことは本論集のために早山さんが書かれた一文をみていただきたいが、その記録を掘り起こしてみると、原さんは最初の三年間に「東南アジアの農家世帯の経済行動」「タイ農村社会の原理を求めて」「経済発展の考え方」「地域研究と経済理論——ポプキン、スコットをめぐって」という報告を立て続けにおこない、一九九三年末に「クリフォード・ギアツの経済学——東南アジア経済論の為の方法を考える」を発表していたことがわかる。原さんの構想が膨らんでゆくプロセスが目に見えようである。

ただ、「はげまし」という言葉の選択が適切だったかどうかはあやしい。研究会はいつも談論風発で、想

用しよう。

「経済学からだけの東南アジア経済論は、先進国からは遅れた「低開発国」ないしもう少し新しい概念でいうと「発展途上地域」という議論ではない。そのためであろう、前世紀末に東南アジア地域を突然襲った経済危機に際して、経済学はこれらの地域の経済政策・精度がグローバル・スタンダードから大きく外れていたから危機に見舞われたといった発言しか出てこなかったのである。経済に限定しても、東南アジア、そのなかの個別の国々には、その歴史や文化の個性に応じた地域的個性が存在している。この当たり前の事実をほとんど気にかけないのが、経済学いやもつと正確にいうと、現在アメリカの学会「界？」を軸として作られている「新古典派ないし新自由主義の経済学」なのである」（「東南アジア地域研究」『地域研究』第七巻一号、二〇〇五年、一四〇—一四一頁）。

これだけ読むと経済学そのもの、あるいは近代経済学への拒絶宣言のように聞こえる。私たち一九六〇年代に大学教育をうけた世代にとって、経済学はいわゆるマル経と近経が拮抗する分野であり、マルクス経済学、あるいはその発展図式に倚って立つところの近経批判は少なくなかった。一九八〇年代から九〇年代になると状況はすいぶん変わったけれども、また原さんは当時隆盛となった従属学派の著作や戦前日本における日本資本主義論争についてよく知ってはいたけれども、マルクス経済学自体への関心があつたようには思えないのである。

『ギアツの経済学』の「序」には、「アジア諸国の経済をできるかぎり経済理論に忠実に解明」(二三頁)するのが著者のアジア経済論だと記されている。しかも、そこで「経済理論」として考えられていたのは近代経済学のなかでもミクロ経済学だつたと思われる。経済主体の行動に焦点をあて財やサービスの価格と配分がどのように決定されるかを分析する、新古典派の

理論的基盤でもあるミクロ経済学だつたというのが私の見立てである。もちろん、原さんはケインズ以後に発展をとげたマクロ経済学も十分に吸収した。それだからこそ、戦後の開発経済学で影響力の大きかつたルイス・モデルへの関心も言及もあつたのであろうが、原さんには本来的に人びとの行動、そしてその行動の結果形成される社会的パターンへの関心があつたように思える。その関心の淵源は、彼が学部生・院生時代に学んだ東京大学農学部農業経済学科の教育にあつたらしい。そこで価格理論と統計学をしっかり学習、それを農業理解のために適用するという思考法を完全に吸収していたのではないであろうか。

しかし、原さんはそこに留まることをしなかつた。既存の経済理論によつて農業や産業などの解釈をするという、通常の経済学者がおこなう仕事に自己限定をしなかつたのである。まず、既存の、教科書的な理論以外の考え方やモデルをも積極的に取入れた。「後期ヒックス」と呼ばれる晩年のジョン・ヒックスが到達した市場観、ステイグリッツやアカロフの不完全情報の市場理論などを吸収し、分析の道具とした。それは東南アジアに存在する現実の市場に立ち向かう、原さんの道具箱を豊富にし、間違いなく『ギアツの経済学』や『アジア経済論の構図』の市場分析、さらには『アジア・ダイナミズム——資本主義のネットワークと発展の地域性』(一九九六年刊)の第Ⅱ部にまとめられた市場経済論に独自性を与えることとなつた。

『ギアツの経済学』の第Ⅱ章は「バザール」と題され、それを読むと、原さんの市場経済へのアプローチがどのようなものがよくわかる。バザールは通常、伝統的な市場とみなされ、近代的な商店街やデパートとは異なると考えられている。「騒々しく」、ときに「攻撃的」ともみえる交渉の場である。一見したところ、価格はいかようにでもなると思わせる市場である。しかし、そこには「その場かぎりではない」顧客がいて、結果的には「慣行的な価格水準」と大きくかけ離れることは少ないという。この顧客関係が「商品

の品質に関する不確実性が無視しえない状況の下で経済取引を成立させ持続させ」ているのである(同書、一二〇頁)。近代的なデパートのように生産者がマーケットアップによつて決めたところの「定価」があるわけではなく、またせり人がいる取引所とも違うけれども、ミクロ経済学がいうところの、均衡価格に落ち着く取引である。これは、低開発経済を市場の未発達によつて定義しようとする常識的な見方とはだいぶ様相を異にする。

ギアツは、バザール経済がジャワの社会に「おくれ」て入ってきた「外来」の商業だという。しかし、企業型の商店やデパートからみれば紛れもなく「前近代的」にみえる存在である。それにもかかわらず、「バザール経済は決して「前近代的な」ものではない」(同書、一二二頁)と言いつつ原さんのバザール経済論は、いまでも私にとって『ギアツの経済学』のなかでもっとも印象的な部分である。

地域と文化

もう一つ重要なのは、経済学以外の学問への敬意である。ギアツの社会人類学は経済学の形式主義への批判から出発をしていた。原さんはそれに敬意を払いつつも、ギアツに代表される文化人類学者の経済学批判の尻馬に乗るのではなく、彼の社会制度や慣習についての議論を活かすことによって、東南アジアにおける現実の市場の経済学を模索したのである。先の引用文に続けて、原さんは次のように記した。

「基本的には「金儲け」の仕組みを論じることになる経済の研究においてすら、研究対象に定められた地域の個性にちゃんと注意を払うことは不可欠のはずである。」

そして、原さんが数多くの著書のなかで実行したことはまさに、この「研究対象に定めた地域の個性にちゃんと注意を払う」ということだったといえよう。

バザール経済における顧客関係が例示していたよう

との間に農業地理の相違がみられる。農業が異なれば、農村における相互扶助や社会関係の結び方、ひいては政治文化にも違いが生ずるのである。

文化という言葉で括られる領域には、言語や宗教が含まれる。それらは地域の境をこえて拡がり、異なった社会慣習をもつ人びとを結びつける力をもつ。しかし、言語と宗教がもつ統合力がどこまでエコロジーの違いを凌駕できるかは時と場合によって異なるであろう。東南アジアは、中国文明のように歴史が古いところとは事情が異なるのである。

一九九〇年代の末に企画された岩波講座『開発と文化』において、原さんは環境と開発を主題とする巻の編集を担当した。その巻頭論文のなかで次のように論じた。東南アジアの生態系は多様である。熱帯多雨林と大河川デルタと疎林しかない平原を区別し、熱帯多雨林についてもさらに低地と山地とを分けて考えなければならぬ。それらの相違は伝統的な資源利用の方法に違いをもたらし、それに応じて農村社会のあり方

に、人びとの経済行動は、非経済的な利害関心にもとづく社会関係と両立する、あるいは両者は混然一体となっている。家族、親族関係、パトロン・クライアント関係等々に「注意を払うこと」が重要なゆえんである。これは国民性の重視につながる視点であり、それはそれで重要ではあるけれども、原さんにとっての「地域」は現在ある国家と完全に重なるわけではない。人びとの行動様式やその表現である家族や親族、結社や共同体の性格は、地域固有の土壌や水利・気象条件、すなわちエコロジーや農業地理に深く規定されているゆえ、同じ国のなかでも対照的なパターンがみられる場合があるからである。よく知られたギアツのインヴォリューション論は、インドネシアにおける生態系の違いに規定された、水田耕作（サワー）を主とする内インドネシアと焼畑耕作（スウィデン）を基調にした外インドネシアという二つの地域区分に立脚している。タイの場合でいえば、チャオプラヤー河流域のデルタと北部チェンマイ盆地と東北部のコーラート平原

を規定する。原さんはここでも、「経済学の枠組みの下では、たかだか市場経済活動の外部不経済効果といった形で、生態環境の悪化・破壊がとらえられている」けれども、東南アジアにおける「開発と環境の変化との間には、地域社会のあり様という媒介項が介在している」ことに私たちの注意を促したのである

〔序 開発と環境——東南アジアを中心に〕『地球の環境と開発』、岩波講座『開発と文化』第五巻、一九九八年、二五頁。

結局のところ、原さんのアジア経済論は文化人類学や農村社会学や生態学の知見を肯定的に取り込んだ、しかし根幹には、新古典派的とは肌合いを異にするが、まっとうなミクロ経済理論がある開発経済論だといつてよいように思う。

歴史

「バザール経済は決して「前近代的な」ものではない」という言明は、市場経済を、近代を前近代から区

別する基準の一つとする歴史観を意識していた。市場経済が効率よく作動できる条件が整っているのが近代化された現代の先進国、まだその状態に達していない、前近代的な制度を多く残しているのが途上国という二分法への批判を内に含んだものであった。同時にそれは、市場経済というのはいくつかの過去から普遍的に存在するのでなく、歴史的に生まれ出てきたものだという信念の表明でもあった。これまで、市場の外側にある制度や慣習は近代的な市場経済を歪めるものとして否定的にしか考えられてこなかった。その意味で、すべてではないにしても、ある種の伝統的制度や慣習の下でも価格メカニズムは作動するということを具体的に示したことは、原さんの開発経済学が伝統的な歴史観への挑戦を意味していたといえるように思う。

その挑戦は二つの方向への歴史に含意をもつ。一つは過去へ、もう一つは現代へと向かう歴史に対してである。ただ、前者について明示的に書かれたものは少ない。「低開発」という概念は近代の進歩主義史観に

よって「発明」されたものだという言明には歴史研究へ示唆を与えるものがあるし（『アジア・ダイナミズム』、二七―二八頁）、また価格メカニズムが働く市場とは「ヒトとヒトの結びつきとしてのネットワークが何層にも折りかさなったもの」という概念規定は（同書、一〇八頁）、伝統社会の制度や慣習がなぜ市場メカニズムにとって重要かを考える上で手がかりを与えてくれる。しかし、市場経済が効率よく作動できる条件はアジアにおいてどのように生成してきたのか、その端緒はどこまで遡れるのか、具体的な叙述はなかったように思う。

ように伸縮的ではなく固定的となっているという判断がある。この伸縮価格、固定価格の二分法は後期ヒックスに由来し、マーシャルの時代からケインズの時代へと、近代に入ってから歴史的移行を考えるモデルとなる。とくに製造業の場合、価格の固着化が顕著である。市場での取引は価格を変えるのではなく、在庫や増産・減産によって数量調節されるのが一般的となった。この背後には、近代の製造業における資本

の支配する「近代」部門は教科書的な市場経済では必ずしもなく、価格伸縮的な市場はむしろ「伝統」的な部門において見出されることがありうる、ということ

を暗に指摘していたように思うのである。

この複眼的とも呼ぶうる市場論は、一九九〇年代以降にいつそう深刻となった開発と環境の問題にも適用できる。原さんは『アジア経済論の構図』を上梓した段階においてその深刻化を予想し、「エピローグ」でそれに言及した。排出権取引とか課徴金制度が経済学的にみてもっとも有効な政策手段とみなされているけれども、その制度化のための取引費用はあまりにも大きい。環境問題においても市場メカニズムを使いこなすためには、そのメカニズムを作動させるための「前提を作成するための非市場的行動」に目を向け、「市場形成の非市場的基盤」を重視すべきと説いた。原さんの市場経済論の射程は近未来にまで及ぶのである。

準備率が著しく高度となったこと、そしてそれに人員を配置し、管理する企業の規模が大きくなり、官僚制化しているという事実がある（『アジア・ダイナミズム』、二二八―二九頁）。いいかえれば、「近代」の経済とは通常の意味における市場メカニズムとは少し違う要素が入り込んできたシステムだということである。『ギアツの経済学』以来、原さんはしばしばアジアにおける二重構造に言及をした。一見して常識的な話のようにみえながらも、その議論のなかで原さんは、開発の進展とともに導入される資本主義的な仕組

地域研究と比較史

最後に、原さんの開発経済論と私が取組んできた比較史との関連について一言して、締めくくりとした。地域研究と比較史には、発想の上でどこか似たところがあるからである。原さんはアジア諸国、とくに東南アジア諸国間の比較考察をしばしばおこなった。その比較に特別な方法論があったように思えないかもしれないが、原さんが英国やアメリカを雛型として、そこからの距離を計るというスタンスを取らなかつたということは指摘しておく価値があると思う。

リブロ研ではタイへ見学旅行をしたことがあった。一九八三年九月のことである。バンコク市内を見て回り、また丸一日かけて中部タイのアントング県オンカラック村を訪問した。今いかないと古いものはアツという間にみられなくなるよ、という原さんの言葉に押されての旅行であった。市内ではすでに変化の兆しが感じられた。水路が埋め立てられ、ビルの建設が進んでいた。コンクリート造りのショッピング・センター

の前を通ったとき、警官が店の前に露店を出していた人たちを追い立てているのに出くわし、原さんのいう伝統的な商いと企業型の商店とのバランスが崩れ始めていることを実感した。

私にとっていっそう興味深かったのは、オンカラック村の見学であった。リブロ研ではすでに、故石井米雄先生の工学的適応と農学的適応の議論や東南アジア研究センターの生態学的な仕事、さらには屋敷地共住集団論についての勉強をしており、灌漑農業が入る前の農村がどのようなものか、興味津々であった。この村は原さんが調査に入ったところで、バンコクからチャオプラヤー河に沿って北上、かつての浮稲栽培地域の末端に位置するデルタ農村である。訪問は原さんが頭を掻きかきタイ語で村長さんに挨拶するところから始まり、村を案内してもらった。屋敷地共住集団の具体的なレイアウトと浮稲の圃場をこの目でみることでできたのは、私にとってこの旅の最大の収穫であった。圃場といっても畔はなく、どこからが田なのか区

別のつかない幅の広い川のようなところであった。舟が繋がれているところもあり、これにはびっくりしたと同時に、生態環境とそれに適合した稲の品種の選択ということが米作社会における比較史にとって重要な参照軸となることを感覚的に理解することができたのである。

東京に帰ってから、原さんと早山さんとの間でリブロ研の論集を編もうという話が起こり、それが原さんを編者とする『東南アジアからの知的冒険』（一九八六年刊）となった。私はその論集のために「タイからみた日本の中世と近世」というサブタイトルをもつ「稲作と発展の比較史」を書いた。同書にはやはり工学的／農学的適応仮説に触発された宮島博史さんの「朝鮮史から見たタイ」も寄せられたので、西欧史に則した、あるいは抽象理論から導き出された典型的な発展図式を準拠枠としない、アジア米作社会の比較史という切り口の可能性を試したかたちとなった。

そのときはこの切り口に対して特段のコメントをも

らった記憶はない。しかしその約二〇年後、先に引用した原さんの文章が載ったのと同じ雑誌の同じ特集号に、私も「比較史という知的営みから見た地域研究」と題した小文を書いたとき、その結びでは「東西比較、あるいは西洋との関係における比較軸だけが問題なのではない。「東」のなかでの比較、非ヨーロッパ世界内での比較も同じような重要性をもってしかるべきであろう。事実、日本の地域研究ないしは歴史学界においてもそのような動きが始めている」と書くことができた（『地域研究』第七巻一号、二〇〇五年、一三九頁。「そのような動き」として例示したのは、二〇〇四年刊の三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』であった）。アジア史家のなかでも、開発経済学者原さんのスタンスに共感をもったであろう研究者は少なくなかったのではないかと思う。

政策支援と原洋之介先生

——ラオス経済政策支援を振り返る

立命館大学国際関係学部 教授

嶋田晴行

はじめに

本稿では、原洋之介先生が主査を務めた「ラオス経済政策支援」を中心に、かつて日本の公的支援の一つとして実施された「政策支援」とはどのようなもので、その成果とは何であったのかを原先生の発言を手がかりに跡付けていく。特に今回は公式の評価報告書の内容などからは離れ、一般向けの原先生の発言、そしてプロジェクトの担当として国内外で原先生と接する機会があった筆者の記憶をもとに記述していく。

本稿で参考とするのは、二〇〇三年秋にJICAで開催され筆者も同席した、ベトナム、ラオス、ミャンマー三カ国における政策支援でそれぞれ主査を務め

た、原先生のほか、石川滋一橋大学名誉教授、尾高煌之助一橋大学名誉教授という錚々たるメンバーによる座談会の記録、「政策支援の意義と課題」(JICA FRONTIER、平成一五年一二月号、通巻五三号、一二―一五頁)である。¹⁾

JICA内部向けに開催されたこの座談会は、一般の人々へオープンではなかったという点で参加者が比較的素直に考えを述べていると思われる。また内部向けとは言え、政策支援とは何?という人々への説明という目的もあり、主査それぞれの考えがわかりやすく語られている。もちろん、二時間に及んだ座談会を四頁足らずの紙面に落とし込んだため、すべてが凝縮さ

れている訳でもないことも確かである。

なお、この雑誌は内部資料ではなく、一般の人たちも目にする事ができたものである。ただ市販はされずに国際協力に関係する組織、個人に配布される目的で作られたものであり、それゆえ、目にしたことがある読者は限られると思われる。その意味でも、この機会を利用して改めて紹介する意義もあるであろう。

1 経済政策支援という援助―おそらくは「日本的な」支援

原先生が中心となって実施された「ラオス経済政策支援」(フェーズ一は二〇〇〇年四月―二〇〇二年三月、フェーズ二は二〇〇三年四月―二〇〇五年三月、筆者はフェーズ二を担当)のみならず、経済政策や法律制度整備を対象とした「政策支援」という名の政府開発援助(以下ODA)事業は、一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代半ばにかけて、日本政府・JICAによって複数実施された。そのような協力が開始された背

景には、冷戦後の国際情勢の変化、そして日本のODAが当時目指したODAのソフト化があると考えられる。

ソ連邦崩壊後の一九九〇年代はじめ、東欧、インドシナ地域、そして旧ソ連邦であった中央アジア諸国といった社会主義国家が次々と民主化を開始した。それと同時に各国が、その経済体制を社会主義計画経済から市場経済への移行を進め、その過程で欧米諸国や日本あるいは国際機関からの支援を新たに受け入れる、移行経済国として登場したことがある。それは、新たな援助の「市場」へ日本のODAが乗り出した時期とも言えるだろう。

他方、当時、日本は金額としては世界最大のODA供与国であった。しかし、詳しく見ればそうとも限らないのではあるが、インフラ建設といった「箱モノ」中心、あるいは成果が見えやすい「ハード」な支援に重点が置かれ、しかも完工後に維持補修がなされていない点などの問題点が指摘されていた。そのような批判に対し、相手国の経済政策や法制度への直接的なアプ

ローチを試みる、「ソフト」な支援あるいは「知的」支援を目指すことでODA批判へ応え、また一九九〇年代に盛んに議論された「日本の戦後の成功経験」を活かそうとする動機が政策支援にはあった。もちろん、日本の外交上あるいは経済利益といった観点から、対象国との関係を強化するといった思惑もあったはずである。

本稿が対象とする経済政策支援、具体的には「ラオス経済政策支援」(英文名: Macroeconomic Policy Support) 以下、当時略称として使われていたMAPSと表記) あるいはその先達である「ベトナム経済政策支援」そして「ミャンマー経済構造調整支援」は、インドシナ地域の移行経済国を対象としたという共通点がある。そのほかにも、それぞれの支援の主査として原先生はじめ石川滋氏、尾高煌之助氏といった著名な経済学者が全体の総括にあたり、そのもとで大学、研究所といった研究機関の学識経験者、関係省庁、そして民間のコンサルタントも加わったの支援チームが結成

2 MAPSの成果とは？—政策支援への評価

原先生とラオス

原先生がなぜMAPSの主査となったのか？筆者はフエーズ一開始前後の時期には海外勤務(ワシントンの世界銀行の片隅にいた)であったため、そのプロジェクトの初期の構想・企画の詳細は承知していない。ただ、MAPSは当時画期的とされた「ベトナム市場経済化支援」(以下、石川プロジェクト)を参考に、あるいは触発されて構想されたことは間違いない。その石川プロジェクトにおいて原先生は、主査の石川先生を補佐する役割を担っていた。その経緯と経験は、大きな要素であろう。そして、もちろん、原先生が東南アジアの経済社会発展を幅広い視野から研究し、多くの成果を残していたという点がその前提としてある。

原先生とラオスの接点がいつ、どのように始まったのか改めて聞いたことはない。ただ、先生がバンククのESCAP(国連アジア太平洋経済社会委員会)

され、その全体調整をJICAがおこなうという形式面での共通点があった。

筆者はその三案件すべてにJICAの担当職員として関わったが、それらのような小さくない規模のプロジェクトが学、官、民からの幅広い協力をえて実施できたことは、その当時もそして現在も、他の援助機関などでは例を見ない特徴だったと考える。

また一九九〇年代、世界銀行やIMFの市場メカニズムを重視した条件(コンディショナリティー)を付した貸付である構造調整プログラムに対し、政策支援が政府の役割を積極的に認め、何より相手国の実情と相手国政府と対話を重視したという点は、「自助努力」とのキーワードで語られてきた日本の公的援助の伝統の流れに位置付けられる、日本的な支援であったとも言える。

本部へ派遣されていた一九七五年、ラオスで王政が倒れ社会主義政権が誕生した。その際、先生はタイーラオス国境のタイ側からラオスを臨み、国境線となっているメコン河を挟んでお互いの軍が銃を構えて対峙し、ラオス側からタイへヒトが逃れることを警戒していたと、その緊張した状況をメコン河沿いの屋台でよく話されていた。あるいは、一九九〇年代の初期に、原先生の言葉によれば、「何も無かった」ラオスへ行かれた話もよくされていた。そして、その「何も無い」ゆえに、一九九〇年代にその国へ関わった人々は、かの地へ愛着を感じ「ラオス・シンパ」となっていた人が少なくなかったと記憶している。その一人として原先生もいた、と言えるであろうか。

MAPSの成果とは？—人材育成の必要性

内陸国であり、人口規模も小さく、当時はまだ超大国ではなかったが地域的には十分に圧倒的な存在であった中国に加え、タイ、ベトナムといった比較的大き

な国々に囲まれたラオスは、市場経済への移行の中で生き延びられるのか？それには何が必要か？といった問いが、原先生含めラオスに関わる者の「あたま」の中に常に存在していた。

原先生は、ラオスが決して逃れられない地理的あるいは人的資源の制約条件を認識した上で、MAPSにおける対応を以下のように語っている。「ラオスの経済は、日本のそれにと比べると五万人の町の規模です。人口の約八割が農業に従事し、その半分が焼き畑農耕で、ロケーションに応じて養蚕や機織りをしている。こうした経済をどうするかを考えるには経済学者だけでは無理なので、日本側委員会には、ラオスの社会や文化に詳しい人に参加してもらっています。」

多くの著作での主張や先生から直接聞いたお話しに基づく筆者の理解では、原先生は市場メカニズムの有効性も認めていた。それと同時に、それだけでは足りない部分を補うために、経済学のみならず様々な分野の研究者あるいは実務者へ声をかけ、その地域、国の

ければ前へ進めなかったという事情があるにしろ、人材育成に力が入れられていた。

補足すれば、上のようなラオス現地での協力に加え、フェーズ二ではNERIの若手職員五名ほどを短期間ながら日本へ招聘し、プロジェクト・メンバーが所属する大学などでの研修をおこなった。その後、彼ら彼女たちは別途日本政府の奨学金などをえて日本の大学院（GRIPSを含む）へ留学、学位を取得し後に帰国し、ラオスにおける経済政策立案の中核メンバーとして育っているものもいる。

政策支援をどう評価する？—ラオスの「弱さ」

座談会においては、当時も今もODA事業の重要な要素である「成果」あるいは「評価」についても触れられている。目に見えない政策支援のような事業の成果を測る困難さについての、「どのような観点から見れば政策支援は成果があったといえる？」との問いに原先生は、ラオスでの経験に基づいて次のように答

伝統や文化に根ざした視点でラオスとMAPSを動かそうとしていた。ラオス出張の度に、時間があれば地方部、時間が限られる際はビエンチャン近郊の村々を訪ねようとした姿勢はその反映であろう。

また、人口が少ないという点は、そのままラオスの人材の少なさに直結する問題であった。特に一九九〇年代初頭まで、社会主義経済体制下で政策立案・実施をしていたラオスの省庁、あるいは大学などの教育・研究機関には、急激に流れ込んだ西側や国際機関の思考や論理を咀嚼し受容する準備ができていなかった。

その点に関し、原先生は「カウンターパート（国立経済研究所—以下NERI）は能力面でも人数でも十分とはいえませんが、小回りの利く分、フィールド調査を積極的に行ったり、具体的な項目についてレクチャーしたりと人材育成ではうまくいっていると思っています」と述べている。政策支援というと政策策定のお手伝いとも想像しがちであるが、それをおこなわな

えている。

「JICAが独立行政法人になって（筆者注—二〇〇三年一〇月）、個々のプロジェクトごとに透明性の高い費用対効果を要求されるわけですよね？しかし、われわれのプロジェクトのような場合には、成果をどのように評価したらよいか難しい。ラオスの場合は、政策オプションを提示してもまだ決断できる状況にはなく、大きな政策の方向性を示し、それについて協議するような段階です」としている。⁸⁾

人材育成の途上であったラオスの事情に配慮すべきとの意見であろう。その点について注目すべきは、石川先生と尾高先生がこの場でそれぞれ語った、ベトナムの人材のレベルは高く、日本側は政策オプションを提示し選択はベトナム側に任せたこと、ミャンマーも人材のレベルは低く無かったが政府の意思決定過程の不透明さ、行政組織の強固な縦割りなどが問題となつたとの発言である。ベトナム、ミャンマーとは対照的なラオスの「弱さ」が浮き彫りとなっており、その点

を認識し、上に述べたような人材育成に注力がなされた、あるいはせざるをえなかったと言える。

原先生はさらに、「マクロ経済政策支援は提言したあと、それが実際にどのように実現されているのかを見続けなくてはならない。それを行う場合、人を意図的につくらないと経済政策支援は続きません。研究者が年に三回くらい行くのでは駄目」としている。政策提言を行う人材を育成することで、その人材がどのようにに経済政策の立案・実施に関わり、影響を与えたのかを中長期的視点で見ることの重要性を述べている。

おわりに

MAPSの当時のカウンターパート官庁であった計画投資省の大臣であり、原先生とも親交が深かったトンルン氏が、その後、外相、首相（二〇二一年三月から国家主席）になったという幸運（？）もあり、MAPSはその金額的な規模の割には、話題になることも多いプロジェクトであった。⁽⁹⁾ただ主として注目される

のが、日本あるいはラオスで何度もおこなわれた会談などトンルン氏と原先生との関係にあったという点も、それを日本―ラオス関係の象徴としようとした日本の外務省の狙いがありそれを原先生は理解し受け入れたこともあるが、確かなことである。⁽¹⁰⁾

しかし、本稿で述べたように、MAPSの成果はどのような表に出るものではなかった。地道で粘り強い日本側の働きかけ、それに対し時に前向きに、時に渋々付き合ってくれたラオス側のカウンターパートの協力と努力、その結果としてラオスの経済政策を担うような人材が、決して多くはないが育ってきたことは貴重な成果である。

何より、主査の原先生の各自の自由な発想と行動を許容する「大雑把さ」が無ければ、単なる「提言」を提出するだけのプロジェクトに終わっていたであろう。以上

注

(7) 本稿の中の「」部分の発言は、すべてこの座談会記録からの引用である。なお、同雑誌のこの号には他の政策支援の例も紹介されており、当時の状況を知ることができる。

(8) 評価に関し座談会で尾高先生は、「評価しようというニーズはよくわかります。しかし、政策支援の場合、一つの尺度で計るのは無理がある。いくつかの目的を設置し、それぞれについて、どのくらい達成されたかを基準にするほかに、いろいろな「が」とし、石川先生は政策支援のような協力は、相手国へ政策オプションを提示する際に、世界銀行といった国際援助コミュニティとの関係、つまり日本の方針と乖離がある場合は、日本とベトナム以外の調整も必要となる難しさが政策支援の成果を見ることを難しくしているという点への注意を喚起している。

(9) 公開されているJICAの評価報告書によれば、フェーズ二の支出額は計九、一四〇万円とされる。

(10) ラオス政府内の人事に関する駆け引きの中で、トンルン氏の不利が伝えられた時期があった。その時も原先生は「噂は承知している。ただ、俺はトンルンと一緒にやっていく」と話されていた。

新古典派経済理論と地域研究を超えて

——原洋之介のアジア経済論

東京大学名誉教授

末廣 昭

私と原洋之介さんの関係

原さんは学年で言えば私より八つ年上である。したがって、原先生と呼ぶのが適切かもしれないが、ここでは原さんと呼ばせていただきたい。

ひとつには、原さんからは大学の講義や大学院の演習でお世話になる機会がなかったからである。彼は東京大学農学部農業経済学科の出身だったので、私が所属した経済学部や経済学研究科ではお目にかかる機会がなかった。また、原さんが代表をつとめた科研費の共同研究などに参加する機会もほとんどなかった。京都大学東南アジア研究センターに拠点を置いた文科省の『重点領域研究・総合的地域研究』の分科会である

「地域発展の固有論理」（原さんが主査）と、国際協力機構（JICA）のラオス援助プロジェクト（原さんが座長）の二つに委員として参加したのが数少ない例であるが、残念なことに、原さんの海外調査にご一緒する機会は一度もなかった。

にもかかわらず、原さんの書いた本や論文は、私にとって常にとても身近で、同時に私のタイ研究に重要な指針を与えてくれる教材であった。そして、アジア研究の契機（ベトナム戦争）や問題提起の内容（地域発展の固有性など）は、私の目指していたものと重なっていた。僭越を承知であえて言えば、「独自のアジア経済論」の構築で悪戦苦闘していた原さんの姿は、

私にとって「先生」というより「同志」に近い存在であった。原先生ではなく、原さんと呼ばせていただきたい理由である。

原さんはとても議論好きで、同時に酒好きでもあった。酒好きの点では人後に落ちない私が、ある日、本郷のキャンパス内で、「お酒はつきり飲んでいて、いったいいつ勉強しているのですか？」と、不躰に尋ねたことがある。原さんはこの質問にいたく立腹し、「末廣君、君は知らないから言うけれど、市原（当時の原さんの自宅があった千葉県の街）と東京駅の間の電車の座席が（動く書斎）なんだよ」と言われた。確かに、原さんはものすごい読書家である。引用している本や論文の数は半端でないし、しかも、内容の紹介や引用は要点を外していない。政策研究大学院大学（GRIPS）の工藤年博さんの話によると、原さんは「読書のスピードが異常に早く、昔読んだ本の内容の記憶力もすごかった」という。彼の本は、ご自身の膨大な読書と数多い海外調査旅行がつむぎだした作品

であった。

原さんの「アジア経済論」の二つの視点

原さんは研究成果の生産性がきわめて高い研究者であった。単著は一五冊、共編著が一〇冊、論文は九九点である。「単著」の多さが原さんの特徴である。そして、これらの本は、常に読者に問題を問う挑戦的な本であった点の特徴である。一五冊の単著のうち、リポートから三冊、NTT出版から五冊、書籍工房早山から三冊を出している。これら一一冊はいずれも早山隆邦さんという同じ編集者のもとで生み出されたものである。原さんのしごとで、私にとって忘れがたい初期の二冊の本、つまり『クリフォード・ギアツの経済学』（一九八五年）と『アジア経済論の構図』（一九九二年）は、どちらも「リポート研究会」での自由闊達な議論から生まれたものであった。この研究会には斎藤修（一橋大学）、白石隆（コーネル大学、京都大学、政策研究大学院大学）、川勝平太（早稲田大学、

日本文化研究センター、静岡県知事)、関本照夫(東京大学、国立民族学博物館)、宮嶋博史(東京大学、韓国成均館大学校)など錚々たるメンバーが集まっており、原さんの「アジア経済論」のいろいろな構想を育む議論の場であった(この追悼集の早山隆邦さんの思い出も参照)。

原さんのアジア経済を見る視点は次の二つにあったように私は思う。一つ目は、新古典派経済学のエコノミスト(その特徴は論理的透明性への志向と経験的多様性への嫌悪)の議論でもなく、地域研究者(現地通の叙述と経験的多様性への愛着)の議論でもない、その両方の知の方向性をもった独自のアジア経済論を目指した点である。

新古典派経済学は、市場経済の外側にある制度や慣習は市場経済の自己調整機能を阻害するものとして、つねにネガティブに位置づける。これに対して原さんは、アジア各社会の固有の制度・慣習が、ときに経済発展においてポジティブな役割を果たすことを示そう

五年八月から一九七七年七月までの二年間、国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)の本部があったバンコクに専門家として滞在したことが、重要な契機となっている。私が初めての海外旅行でタイを訪れたのは一九七六年六月であった。バンコクのどこかであるいはすれ違っていたのかもしれない。

農業経済・二重構造的発展論から「不完全情報市場経済論」へ

それでは、原さんの「アジア経済論」のルーツはどこにあるのだろうか。この点を彼の『研究報告 比較アジア経済論を求めて——「農業経済学からアジア研究へ」の研究遍歴を振り返って』(二〇一八年二月、GRIPS)の叙述の中から探ってみよう。

まず指摘しておきたいのは、彼の最初の学問的訓練が、経済学部ではなく農学部農業経済学科だったことである。そして、そこで彼が熱心に読んでいた本は、農業経済を経済理論に拠ってみごとに分析したシユル

とした。そして、固有の制度・慣習を理解するために、アジア各地への訪問と現地での調査が不可欠となる。したがって、理論経済学者の目からみれば、原さんの書くものは「あまりに地域研究的」であつたらう。他方、地域研究者の目には、彼はアカロフやステイグリッツの理論を自在に引用する「生粋のエコノミスト」に映つたように思う。

二つ目の原さんの視点は、「発展の地域性」あるいは「地域発展の固有論理」である。これは東南アジア諸国のある国と別の国を比較することで、アジアの経済発展の多様性を浮き彫りにすることを目的とする。ちようど、一つ目の視点では、ワルラスの一般均衡理論が引照基準であつたのと同様に、二つ目の視点では、タイという国の経験が比較の際の引照基準となる。原さんは東南アジア諸国だけでなく、中国や韓国、インドなどにも調査旅行にいつている。そうした中で、タイが比較の際の引照基準となつたのは、東京大学東洋文化研究所助手になつたあと三年目、一九七

ツの『農業近代化の理論』であつた。ところが、農業経済学科の生みの親である東畑精一氏の言葉にあるように、「総じて他産業や金融等は世界に共通的な事象と論理とをもっているが、日本農業となると世界の先進国の農業との間に余りにも大きな形態的、構造的差異を持っている。そのため日本農業の解明には西洋の理論をそのまま適用しえない。独自の解明を必要とする。」東畑氏のこの問題提起は、原さんの理論経済学とアジア経済の実態をどう整合的に理解するかという問題提起にそのまま重なっている。

次に、原さんは彼の師のひとりであつた大川一司氏の「近代経済成長の理論」における「二重構造論」、つまり、日本の国民経済が資本制的近代産業と在来産業という、異質の部門から構成される「二重構造経済」であるという議論にも強い関心を抱いた。さらに、大学院に進学すると、東南アジア経済史に関する文献を読むようになり、植民地時代のビルマに関するファーニバルの「複合社会論」や、同じく蘭印に関する

るブーケの「二重経済論」と出会う。植民地宗主国が持ち込んだ外来の制度や技術と植民地地域における在来のそれが共存する「二重経済的構造」の問題がそれである。

そうした中で、原さんが大学院の博士課程に進学した年（一九六九年）に、恩師の逸見謙三氏がヒックスの『経済史の理論』（原典一九六九年、邦訳一九七〇年）を紹介した。この本は原さんにとって運命的な出会いとなり、以後ヒックスの議論は彼の大のお気に入りとなった。ヒックスは次のように述べる。「組織の一形態としての市場は商人の、そして引き続いては金融業者の創造物であり、商品市場と金融市場とは市場制度が本来あるべき場である」と。これに対して「土地市場と労働市場に市場制度が浸透していく場合、市場原理は適合しないか、適合できるとしても困難を伴う。そこに抗争が生じることになる。」このヒックスの議論が、「二重構造的発展論」から『クリフォード・ギアツの経済学』に、原さんの構想が発展してい

そのサブタイトル「アジア研究と経済理論の間で」が示すように、原さんがその後続けていくアジア諸国の現地調査（彼のことは「アジア紀行」と新古典派経済理論の再検討という「終わりのない知的冒険」の始まりでもあった。

「経済発展の収斂理論」と「地域発展の固有論理」

原さんは『アジア経済論の構図』（一九九二年）の「あとがき」で、テッサ・モーリス・スズキの『日本の経済思想』に触れながら、この本の主題は、（一）日本の経済システムは自由な市場の活力か国家計画の指導力か、（二）日本の経済システムは他の先進諸国と共通する普遍的なものか、それとも日本に特殊なものか、という二つの座標軸からなっていると述べている。ただし「市場か国家か」という第一の座標軸も、「普遍か特殊か」という第二の座標軸も、それぞれの項目は決して独立したのではなく、深いところで強く相互関連していると主張する。

く重要な架け橋となった。

クリフォード・ギアツは米国の文化人類学者で、一九五〇年代にジャワでおこなった現地調査をもとに、一九六三年に『商人と王子』と『農業インボリューション』という二つの本を刊行した。これらの本は私も読んだが、学問領域の違いを超えて知的刺激に非常に富んだ本である。原さんは大学院時代にこれらの本を読み、対象国の制度や慣行（バザール経済や村落経済など）を現地調査で学ぶ重要性を認識した。同時に、彼はこうしたフィールドワーカーの研究成果と並行して、新古典派的経済理論を根本から批判するアカロフの情報非対称性論（有名な「レモン財の市場」論——レモンは米国の俗語で質の悪い中古車を指す）や、ステイグリッツの不完全情報市場経済論にも注目していた。

以上の読書遍歴と一九七五年から二年間のタイでの現地経験が結合して、一九八五年に名著『クリフォード・ギアツの経済学』が誕生する。この本の刊行は、

例えば、第一の座標軸では、市場経済の発展には政府の役割が必要になってくるが、どういう介入が必要となるかは、当該国の社会構造のあり様によって決まってくる。一方、第二の座標軸においても、市場経済とは自由な競争という点では普遍的でありえるが、その根底に当該国の伝統が作用しているという意味で特殊である、と述べている。結局、原さんは理論経済学と地域研究という二つの知の方向性のときと同じように「二分法」はとらず、市場と国家、普遍と特殊の間を行ったり来たりしながら、アジア経済のダイナミズムを描きだそうとした。

さて、『アジア経済論の構図』では、第二章でタイとビルマが、第三章でタイとフィリピンが、それぞれ比較されている。タイとビルマは戦前期には同じコマ輸出で発展し、経済的にはビルマの方が繁栄していたにもかかわらず、一九六〇年代以降になるとタイのほうがビルマよりはるかに経済的成功を収めたのはなぜか、という問いを發する。原さんの回答は、両国の政

府の介入の仕方の違いであり、同じ経済開発政策をとっても、タイの市場システムを基本とする分権的経済運営のほうが（中央銀行の役割を含めて）、ビルマの国家指令を核とする中央集権的経済運営方式よりすぐれていたと結論づけた。つまり、「国家の介入の失敗」ではなく、国家の介入の仕方とこれに対する農民・商人の対応の違いが、両国の経済パフォーマンスの違いをもたらしたとみるのである。

他方、タイとフィリピンについては、両国とも外向きで民間主導の経済政策をとりながら、経済パフォーマンスに大きな差が生まれたのはなぜか、という問いを發する。これに対する回答は両国の社会構造の違い、とりわけ大土地所有制が進み、労働市場もフォーマルセクターとインフォーマルセクターに分節化しているフィリピンでは所得格差が大きく、タイはそれと比較して同質的であった、と述べる。そして、普通の階層の人びとが「機会の平等」を保証されていることが、市場経済システムの効率的な機能には

重要な条件である以上、タイの方がより高い経済パフォーマンスを実現することができたと述べた。

以上の紹介からも分かるように、原さんはある国や地域において経済発展の違いがなぜ生じるのか、つまり「発展の地域性」のメカニズムを明らかにしようとした。そこで、本稿の最後の問題は、こうした「発展の地域性」はいずれなくなつて、同質の経済体制に向かつていくのかという問いになる。世界経済の異質化ではなく同質化の議論、あるいは「収斂理論」がそれである。実際、原さん自身も、『クリフォード・ギアツの経済学』の中では、インドネシアのバザール経済における値引き交渉を前提とした「伸縮価格型市場」は、華人商店やデパートにみられる「固定価格型市場」に向かつていくとみていたし、タイの「短期契約型労働市場」は「組織型労働市場」に、村落内の農作業の労働交換（アウ・レーング）は賃金ベースの農業労働に移つていくことを、彼自身の観察を含めて認めていた。

デジタル経済化のもとで

とりわけ、二一世紀に入り、グローバル化、経済のサービシ化、情報社会化が進むと、国や地域の制度・慣習の違いを越えたところで経済圏が形成され、デジタル経済という共通の経済社会体制へと収斂する可能性が高くなる。とくに、従来のように、先発工業国、後発工業国、後々発工業国が時間差を伴いながら、重層的に追跡していく工業化ではなく、後々発工業国である新興国の方が、デジタル経済をテコにイノベーションを進めていくという、新しい状況が生まれた。

こうした状況を中国や新興国の事例をもとに活写したのが、高須正和ほか『プロトタイプシテイ——深圳と世界的イノベーション』（KADOKAWA、二〇二〇年）と、伊藤亜聖『デジタル化する新興国——先進国を超えるか、監視社会の到来か』（中公新書、二〇二〇年）であった。とりわけ、後者の伊藤亜聖氏の本に原さんは強い知的刺激を受け、GRIPSの「アジア研究会」に伊藤氏を講師として呼んで議論するこ

とを楽しみにしていたという。しかし、その計画は実現しないまま、原さんはこの世を去ってしまった。

仮にコロナ禍が収束し、デジタル経済化がいつそう進んでいった場合、「アジア経済論の構図」はどのように構想することができるのか、この点をぜひ尋ねてみたかった。でもそれはもはやかなわない。残された私たちに託された仕事であろう。「経験的多様性を嫌悪する」経済学者と「経験的多様性に固執する」地域研究者の間の溝が深まり、両者の間に生産的対話がなされていない今日、原さんの仕事の重要性に改めて思いが至る。

原さんの冥福を心からお祈りします。

2 追悼文

繋がる原先生とのご縁

政策研究大学院大学 政策研究院参与

浅岡浩章

原先生との最初の接点は大学三年の時に受講した開発経済学の授業でした。二五年以上経った今も強烈に印象に残っているのが、講義の時に掛けられていた眼鏡のフレームが何か大きな力で踏みつけられたように歪んでいたことです。先生は全く気に掛けられていな

い様子で淡々と講義をなされていました。研究者は没入する対象があると些末なことは気にしないのだなと捉え、得も言われぬ凄みを感じた記憶があります。当時、授業の一環で、原先生の著作「開発経済論」や「アジア・ダイナミズム」を読みましたが、書籍を多く出され、研究の第一線で精力的に活躍されていた原先生の講義を受けられたのは今思い返すと幸運でした。開発分野に関心があったため、躍動するアジアの状況、歴史学者ブローデルの視点や国・地域の固有性などを含んだアジア諸国の発展経緯について、興味深

く学んだことを覚えています。

大学卒業後、当時の国際協力事業団（JICA）に入団し、開発分野の業務に従事しました。JICAには、原先生より様々な形でご助言、ご協力を頂きましたが、特に「ヴェトナム市場経済化支援開発政策調査」、「ラオス経済政策支援」でのアカデミックな視点からの経済政策への助言、また、政策研究大学院大学においてJICAの有償資金協力を活かしたインドネシア留学生の人材育成にご尽力頂きました。私の海外赴任先はラオスでしたが、時期が重ならなかったので仕事で一緒にすることはなかったものの、原先生の教え子（本書に執筆頂いた松島さん）が営まれるコーヒール店に足繁く通うなど、原先生とのご縁を感じたものでした。なお、先生は、ラオスの国家主席となったトルン氏と直接意見を交わすような密な関係を築かれましたが、ラオスの発展への思いが伝わった結果でしょうか、何よりも先生の人柄によるものと思います。その後、月日が経ち、期せずして私は政策研究大学

院大学に出向し、「アジア研究」研究会で原先生と一緒することとなりました。いつもニコニコされ、時に口悪いことを言いつつも多くの人に慕われるご様子は、大学当時に感じた原先生の印象とお変わりなく、懐かしさとうれしさを感じた次第です。先生の研究室を訪ねると、「ヒックス、好きなんだよね」、「この本、面白いぞ」と楽しそうにお話しになり、その尽きない探求心、知見の深さを傍で感じる事が出来ました。原先生は、この研究会での議論を踏まえつつ五つの報告書を纏められました。「アジア・ダイナミズム再考」という視点から、二〇年前からの変化を捉えつつ、これからのアジアと日本の発展を考え、願われていたものと思います。先生は引き続き研究会を続け、ラオス、ミャンマー、インドネシアなどの国、また、デジタル経済など新たにテーマを設定して纏めていく構想をお持ちで、まだまだ精力的に活動されるお考えでした。この度、追悼企画を検討するにあたり、原先生と同時代に議論を交わされた先生方のみならず、現

在アジア諸国の研究をされている原先生に続く世代、若い世代の先生方にとっての原先生の存在、影響の大きさを再確認した次第です。先生は、経済学、歴史学、地域研究と時間的、空間的にも幅広い視座からアジアを見られました。今後このスケール感で研究をなされる方もなかなか出てこないのではと思う次第です。

私は原先生から直接研究の指導を頂いたわけではありませんが、学部生の身であった頃から今にいたるまで、原先生との不思議なご縁を感じます。政策研究大学院大学では近くにいらっしゃったので、いつでもお話しできると思っていました。「コロナが収まったら呑みに行くぞ」と笑いながらおっしゃっていました。が、それは叶わぬこととなりました。今となっては、先生からもっと貪欲に学ぶべきだったと後悔の念が尽きません。続く世代のものとして、先生が遺されたものからこれからも学び、活かしていくことを心に刻みたいと思います。

CAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）に一九七五年から二年間在籍していた。なお、大来先生は初代のESCAP日本代表であった。

その後、原先生とは霞が関のいろいろな政府委員会でおいする機会もあったが、特に二〇〇八年頃からは政策研究大学院大学でお会いする時間が多くなり、議論の中でも特に日本の現在のアジア研究とその他の方などをめぐって、時に酒を酌み交わしながら夜遅くまで談論風発することもあった。そうした議論も原先生の二〇一九年頃からの新たな「アジア研究」に役立ったのではないだろうかと思画自賛している。

最後に、私は先生の「一橋大学のアジア学―赤松要のアジア経済論を軸にして」（二〇一〇年七月六日）という講演を想い出す。赤松要先生の雁行形態論を中心軸にして語った二一世紀への含意は文明論にまで踏み込んだ包括的で開明的なものであり、非常に高い見識を提示する内容であった。その講演録は、今では私のかげがえのない宝物になっている。

日本とアジアの発展を常に気に掛けられていた先生の「ご冥福を心よりお祈り申し上げます」。

バンコクでの初めての出会い

国際開発ジャーナル社 編集主幹

荒木光弥

原先生との初めての出会いは、一九七六年頃だったと記憶している。その時は私の恩師である大来佐武郎先生（民間人として外務大臣にもなった国際人で、『国際開発ジャーナル』創刊の発起人）の紹介で、タイの首都バンコクでお会いしている。その頃、私はタイの学生による反日運動などを取材中だった。

当時、原先生は大来先生の推挙で、バンコクのES

原先生の思い出

東京大学東洋文化研究所 教授

池本幸生

原先生に初めてお会いしたのは、アジア経済研究所（以下、アジ研）に入所して間もなくのことだった。京都大学経済学部を卒業して、すぐにアジ研に研究者として入った私は、大学院教育を受けていなかったのに、原先生のゼミに参加することを部長から勧められたのだった。当時、原先生はアジ研の経済成長調査部の農業部会の研究会に参加されていた。ゼミでは確かハリー・ジョンソンの『国際貿易と経済成長』をテキストにしていたと記憶している。ゼミ生たちが解釈に苦勞している数式を、私が簡単に解いてみせたことが原先生の印象に残っていたらしく、その後もこのとき

のことは酒を飲むと時々出てきた。ゼミにはしばらく参加していたが、その後も原先生が参加している研究会に何回か参加させてもらった。

その後、私は京大の東南アジア研究センター（以下、センター）に移り、センターが地域研究を志向していたので、私はタイ経済史の研究や東北タイで農村工業のフィールド調査を始めていた。一九九三年からセンターで重点領域研究「総合的地域研究の手法確立―世界と地域の共存パラダイムを求めて」（一九九三―九六）が始まると、「地域発展の固有論理」班の代表者となった原先生とお会いする機会が増えた。新古典派経済学に批判的な原先生にとって、私の地域研究的な方向へのシフトを歓迎していたのだと思う。センターに移って経済学的なアプローチとは違う方向に進み、経済学者とは疎遠になっていったときだったので、私の研究を評価していただいたのはとてもありがたかった。その後、私は原先生のいた東洋文化研究所に移ることになる。ゴタゴタが続く東南アジア研究センター

で複雑な人間関係に苦勞していたことも、事情通の原先生はよくご存知だったろう。

東洋文化研究所に移った年、原先生は所長になられ、それから四年間はとても忙しくされていたが、それでも話す機会はたくさんあった。農学生命科学研究科のゼミ（汎アジア経済論）と一緒に担当し、毎週のように議論をする機会もあり、とても充実した時期だった。ゼミの後は本郷三丁目交差点近くの白糸に行くことが多かった。原先生の学生時代からのお気に入りだということだった。原先生はお酒を飲んでも食べるものは少なく、酔いが回るのが早かった。青りんごサワーをよく飲まれていた。

東文研に移ってすぐに原先生に言われたのがアマルティア・センの『不平等の再検討』の翻訳だった。学部時代に鈴木興太郎先生のゼミでセンの *Collective Choice and Social Welfare* を読み、アジ研に勤めていた時にセン教授にお会いして話をしたこともあり、セン教授とは不思議なつながりを感じる。

この翻訳が役に立ったのがベトナムにおける少数民族の貧困研究だった。原先生はJICAの「ヴィエトナム市場経済化支援開発調査」で日本側代表者の石川滋先生を補佐されていて、私はこのプロジェクトに貧困問題を担当するために途中から参加することになった。調査対象はベトナムの中部高原の山岳少数民族だった。少数民族の貧困問題を研究する場合、多数民族とは異なる配慮が必要となり、多様性に配慮した貧困政策が求められる。それは貧困問題を単に経済問題と捉えていたのでは見落とされてしまうものである。現地調査をしてみても、貧困対策と称して行われる政策が少数民族の人々を実際には苦しめているように思われた。そのことを分析するために、センのケイパビリティー・アプローチは有効だった。しかし、貧困を単に飢餓や低所得と捉える人々にはなかなか理解されなかった。原先生は私の言いたいことは理解してくれていなくとも、JICAのプロジェクトとしては期待はずれだったろう。

クリフォード・ギアーツの『インボリユーション―内に向かう発展』の翻訳も原先生に勧めによるものである。ギアーツの本はほとんど日本語に翻訳されているが、この本はまだ翻訳されていなかった。一九六三年に発表された古典であるが、四〇年近くたって日本語に翻訳すべきものと原先生はお考えだった。

アマルティア・センが東京大学の名誉博士号の第一号の候補となったとき、原先生から推薦理由書などの書類を書くように言われた。大変な仕事であったが、それはとても光栄なことだった。

原先生が所長を辞め、情報学環に移られてからは、お会いする機会は減り、農経のゼミも一緒にやることは少なくなっていた。農経の大学院生がトラブルを起こすようなことが増えたのも原因なのかもしれない。

原先生との楽しい思い出は、二〇〇〇年三月にゼミ生たちと一緒にタイに調査に出かけたときのことである。遅れて参加した原先生とナコンラチャシマのホテルで合流し、その後、コンケン、ピサヌロークでそれ

ぞれ一泊し、そこから南下してチャオプラヤダムとその周辺を見学した後、さらに南下し、友杉孝先生の調査地で原先生にとっても思い出の地であるアーントーン県のヤーンマニー村に立ち寄り、学生たちと一緒に村人にインタビュールをおこなった。バンコクに戻る時、一九七〇年代半ばに原先生がESCAPで勤めていたときに住んでいたアパートメントも見に行った。原先生の思い出を辿るゼミ旅行だった。

ゼミ旅行は翌年二〇〇一年三月にもいったが、このときは原先生はバンコクでのみ一緒に過ごただけだった。残念ながら、この後、原先生と一緒にゼミ旅行は国内だけで、結局、外国に行くことはなかった。原先生がGRIPSに移られてからは会う機会が減ったが、会えばいつか沖繩にみんなでないこうという話を別れて別れていた。それが叶わなくなったのは非常に残念に思う。原先生から受けた御恩に感謝しつつ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

Economics, Planning and Public Policy Program (EPP) と原先生

政策研究大学院大学 教育支援課

伊藤郁美

GRIPSに着任した当時はEPPの立ち上げ時期で、「リンケージ」という言葉を毎日のように耳にしました。第一期生の途中で、前任者から「とても複雑なプログラム。」と渡されたのがEPPでした。それからかれこれ一〇年コーディネーターをさせていただきました。

このEPP開始当初から、プログラムディレクターとして采配を振ってこられたのが原先生です。EPPは円借款によるインドネシア政府の大規模人材育成プロジェクトの一環で始まった、GRIPS唯一のダブ

ルディグリー（リンケージ）プログラムです。学生は一年目をインドネシアで、二年目をGRIPSで修学し、二つの学位を取得します。

二〇〇七年に第一期生を受け入れました。彼らの多くは地方公務員で、インドネシアの津々浦々からきていました。素朴で初々しく、学内ではいつも固まって行動をしていて、おとなしい印象でした。が、イベント時などに二〇数名がバティックを着て集まるととても華やかでした。

あれは広島だったか、フィールドトリップに行った時、夕日の差し込む貸し切りバスの車中、皆でブンガワンソロを合唱しました。同乗していた教員はきれいな唄声にすっかり気持ちよくなったようで、一〇回近く唄ったでしょうか。優しい学生たちだと思えました。

彼らは土地柄や民族、宗教など多種多様で、日本人に比べお互いに気を遣って生きているように見えました。

第一期生には、体調を崩し、修了後も日本に残って大手術を受けた者もいました。郊外の病院へ、先生と一緒に菓子折りをもってお見舞いに行きました。その学生は今では健康そのもので、同窓会では片道五時間をかけて顔を見せに来てくれます。

一年目の壁は、論文指導のインドネシア側大学との方向性の乖離でした。当初は一つの論文を日本とインドネシアの大学が共同で指導・審査し、学生は両大学から修士号を取る仕組みになっていました。

指導を開始してみると、日イで求める内容や形式が異なり、学生は板挟みとなりました。先生はこれにたいへん頭をかかえ、同プロジェクトに参画する日本の大学関係者を緊急に招集して意見交換をおこなったりしました。その後インドネシア側とも協議を重ね、日イそれぞれの大学が、それぞれ論文指導をして修士号を授与することにおちつきました。

EPPでは論文指導に特に力を入れていました。インドネシアへはプロモーションおよび面接試験と、年

二回出張をして、学生にプレゼンをさせ、論文アドバイスをします。日本では手に入らないので、とにかくデータを集めよ、と指導の半分がここで始まります。

先生は頭の中で、指導教員をイメージしながら、学生選考をされており、入学が決まってからは教員一人一人に自ら説明に赴き、指導を依頼されていました。また、毎年インドネシアからワヒユ先生、アリー先生を呼んで指導補助をお願いするなど、手厚く面倒を見てくれました。

先生のお気に入りの資料は、歴代のEPPの論文タイトル一覧です。タイトルは年々増え、二〇〇を超えていましたが、先生の頭の中にはすべての内容がインプットされています。

完成した論文には指導教員やプログラムディレクターのサインをつけ、製本をしてGRIPS図書館に收藏しています。このサインをするときの先生は、さすがに素晴らしい表情をされます。

ある時しみじみおっしゃっていました。「EPPで米やオーストラリア、NZなどへ留学し博士号を取るようになりました。

悲しい出来事もありました。第八期生のころ、先生のよき相棒であったEPPディレクター代理の大来洋一先生がなくなりました。先生は後々までこのことを、EPPで最もショックな出来事として語られています。

当初は混とんとしていたEPP。学生の英語能力が低い、お荷物と言われたこともありましたが、一〇年経った頃には最も安定的なプログラムとなっています。

その後も先生は精力的に指導を続けられ、原先生が修了させたEPP生は二七一名にのびります。

現在GRIPSの修了生で日本人に次いで最も多いのはインドネシア人です。

は学生がインドネシアじゅうの最新の問題を持つてくるでしょう、それがぼくは楽しくてしょうがない。」

第二期生から、インドネシア財務省もリベンジプログラムに参画しました。第二期生は、第一期生とは対照的に社交的な学生が多く、他の国の学生とも交流、院生会でも活躍しその存在感は他を凌駕していました。歌い、踊り、飲んで、たばこを吸う、先生と妙に馬の合うバッチでした。修了後も何かと駆け付け、会いに来てくれるのはこの第二期生だと思います。

彼らのうち、特に中央省庁からの学生は帰国後揃って出世をしました。その代にポストが埋まってしまい、次の代から出世しにくくなったという後日談もあるほどです。先生は「修了生が出世するのは、ぼくは単純にうれしい」と言っておられました。

第三期生以降は徐々に、GRIPSは授業や指導がきちんとしているという評判ができ、向上心の高い学生が集まるようになっていきました。帰国後博士課程に進学する者も少なくなく、GRIPSをはじめ、欧

故原先生への感謝を込めて

政策研究大学院大学 教育支援課

井上樹里

二〇一八年三月から約三年間、政策研究大学院大学のEPPプログラム・コーディネーターとして原先生にお世話になりました。

振り返ってみると、先生には本当にお世話になり、またたくさんの思い出があります。仕事以外での先生のお茶目なキャラクターは多くの関係者の皆さんがご存知の通りだと思いますので、プログラム・ディレクターとして私が尊敬していた先生の一面をここでは書かせていただきます。

普段は豪快で冗談ばかりの先生でしたが、先生は常にプログラムのこと、学生のことを考えていないよう

に周りには見せつつも、とても良く考えていらっしやいました。特に昨今のコロナ禍では常に学生一人一人の健康状態や安全に気遣っておられました。

私が着任した頃の頃、私自身と学生の年齢が近いこともあり、視点が学生によりがちで、先生にはかなり無謀な提案をしてお叱りを受けたこともありました。今思えば先生はプログラムを教育の場であると真剣にお考えになられていて、学生の成長を軸にプログラムを統制されていたように思います。また、プログラムだけではなく、大学全体、関係者のことも常にお考えになられ、誰一人、不公平・迷惑にならないようなご判断をされていました。時にそれは、厳しく言わなくてはならないこともあり、優しい先生はとても悩まれたと思います。しかしながら、甘やかすことなく叱ってくださいました先生には本当に感謝しております。

先生がお亡くなりになる二日前まで、約二か月間、先生の冬学期の講義が開講されておりました。毎週二日間、大学にお越しになられ、講義室からオンライン

で教鞭をとっておられました。この年は約四〇人も履修した学生がおり、先生も大変喜ばれていました。その間、私も先生のお手伝いをさせていただいていたのですが、毎回「そろそろ飲みに行こう」とおっしゃられていました。先生がお亡くなりになられた前日は、先生と一緒に外出していたのに、一人で先生をお誘いする勇気がなくて、お誘いできなかったのがとても心残りです。

先生はいつも校内を早歩きで歩いていました。いまだに先生をよくお見かけした場所を私のオフィスフロアから見上げる度に、先生をお探ししてしまう時があります。三年間という短い間でしたが、先生のプログラムに携わることができ、とても楽しかったです。また学生だけではなく、私にも成長するきっかけを与えてくださったことにとても感謝しております。

原さんの思い出

早稲田大学名誉教授

浦田秀次郎

私が初めて原洋之介さんにお会いしたのは一九八六年、国際開発センターでおこなわれていた大川一司先生が主査を務められていた「経済発展」研究会であった。同研究会の幹事役であった小浜裕久（静岡県立大学名誉教授）さんが、私の大学時代のゼミの先輩であったことから、米国から帰国したばかりで日本の研究会事情を知らない私を誘ってくださいました。同研究会では大川先生が研究されていた日本の経済発展を段階（フェーズ）別に捉えて、各フェーズにおける経済構造などの特徴を明らかにする分析を中心に議論が進められていた。同研究会での原さんの印象は経済だけで

はなく、歴史や社会など学際的な視点から鋭いコメントをされる声の大きな研究者というものであった。

原さんと親しくお付き合いさせて頂ききっかけは上述した研究会活動の一環としておこなわれたインドへの現地調査で一緒にさせて頂いたことであった。この現地調査へは原さん、渡辺利夫（拓殖大学顧問）さん、私の三人でいった。その時は、原さんや渡辺さんのことをほとんど知らなかったのであるが、後になって、お二人が日本を代表する開発経済学研究者だということを知り、経済開発・経済発展について教えて頂ける機会をまったく活用しなかったことを後悔した。

私にとって日本の研究者との初めての海外出張であったということもあり、興味深い経験をし、また、多くのことを学んだ。研究以外のことから話を始めることをお許し頂きたいが、お二人とも実によくビールやウィスキーなどアルコールを飲まれたという印象が強い。当時、インドへの直行便がなく、バンコクに一泊したのであるが、ホテルへのチェックインを済ませる

と、原さんはバンコクにいらしていたことがあるので、いいところがあるので飲みにいこうということになり、かなり夜遅くまで飲んでいたように記憶している。私は日本への帰国前は世界銀行で研究をおこなっており、出張ではホテルへのチェックイン後は出張の目的や予定の確認などをおこなって、次の日からの活動にそなえて早く就寝した。私は原さんと渡辺さんとの出張では呑み会の時間がかかり多いように思ったが、飲みニケーションは出張同行者との親睦を深めるだけではなく、研究・仕事に関する情報交換の場として重要な役割を果たしていることも実感した。

インドへの出張では、研究・調査でも様々な経験をした。デリーでは、渡辺さんは日本からもってきた原稿の執筆でホテルに籠っており、原さんと私はデリー大学やインド国際経済協議会等へ訪問し、インド経済の発展過程や現状などについて研究者と面談したり、本屋へ行って資料を大量に購入したりした。インド出張での一つのハイライトは、後にマンモハン・シン首

については全身全霊で取り掛かることで、優れた研究成果を挙げられているということを認識させられた。大川研究会終了後は、国際会議などで一緒にすることは度々あったが、共同研究という形での接点はあまりなかった。そのような状況の中で、原さんが執筆された東アジア経済、特にその中でも東アジア経済統合に関する論文や書籍から、多くのことを学んだ。私は、東アジアにおける自由貿易協定（FTA）を枠組として用いる形での経済統合の東アジア経済への影響について、一般均衡（CGE）モデルやグラビティ・モデルなどを用いて定量分析をおこなってきた。そのような分析では、東アジアの歴史や社会といった定量化が難しい要素は考慮しない。一方、原さんは経済統合、特に日本の東アジアにおける経済統合・経済連携戦略を分析・構築する上で、歴史、社会、文化などが決定的に重要であることを説いていた。原さんの議論は、東アジアの歴史、社会、文化などについての深い知識に基づいて展開されていたことから、説得的であ

相の右腕となって経済改革を進めたモンテック・アルワリア氏夫妻との夕食であった。アルワリア夫妻とは私の世銀時代より親交があったが、我々が訪問した時にはアルワリア氏はインド政府の要職に就いており、インドでも大変に注目される存在になっていた。夕食での話題はインド経済の現状からインドの歴史や社会にまで及んだ。経済の話には私も加わることができたが、歴史や社会などについては原さんとアルワリア夫妻との間で話が弾み、私の出る幕はなく、原さんの博学ぶりに感心させられた。

この出張では、もう一つ驚かされたことがある。出張から帰国して数日後に出張報告のための研究会が開催された。私は面談記録を中心に出張中の活動を簡潔にまとめ、報告をおこなったのであるが、原さんと渡辺さんは、そのまま報告書として使えるような原稿を提出された。お二人とも、ほぼ徹夜に近い形で原稿をまとめたと仰っていた。お二人は、出張中は多くの時間を呑むことに費やされていたが、肝心な研究・仕事

のただけではなく、限られた知識しか有していない私にとっては非常に新鮮かつ刺激的であった。近年、定量的な分析においても歴史、社会、文化、制度など非経済的要素を質的変数として考察に含めるようになってきており、私も原さんの主張されていたような要素を分析に取り入れられないかと考えている。このような新たな試みについて、原さんのご意見を伺うことができなくなってしまったことは大変に残念である。

追悼文を終える前に、原さんとの数あるエピソードの中で、かなり時間が経った今でも強く記憶に残っているものを記しておきたい。一九八七年にハワイ大学の東西センターで日本と韓国の経済発展の比較研究に関する国際会議が開催され、原さんは日本の農業発展について発表された。発表の中で日本の発展がドイツと似ているという内容を説明する際に、ジャパン・アシンド・ドイツと言われたので、発表の後の休憩時間に、「原さん、ドイツではなくて、英語ではジャーマニーじゃないの」と言ったら、「いけねえ。そうだが

「ヤーマニーだ。」と照れたように仰った。休憩時間が終わり、質疑応答の中で日本とドイツの点についての質問が出た。その質問への回答の際に、原さんは、また「ドイツ」と言われたので、原さんの方をみたら、目が合い、間違いに気づかれた原さんは、「いけねえ、またやってしまった」という感じで舌を出されていたことを今でも鮮明に覚えている。私にとつての原さんは博識な優れた研究者であるだけでなく、大声、高笑い、長い舌を持ち茶目っ気のある非常に魅力的な人物であった。今でも、原さんのことを思うと、「浦田君、CGEモデルでは投資関数はどうなっているの」と大きな声が聞こえてきそうである。

ご冥福をお祈りいたします。

知と実践を自由に行き来した巨人

政策研究大学院大学 客員教授

国際経済研究所副理事長

大辻義弘

原先生に初めてお会いしたのは、通貨危機の後、当時在籍していたJETROの香港駐在から帰ってきてすぐの一九九八年だったと思います。アジア通貨危機の本質が何かなどわからないことがいっぱいありました。困っていたところ、人の紹介でお話を伺うことになりました。当時の役人の常、約束していた時間には伺えず、少し遅れて料理屋に行き、平身低頭で部屋に入ったところ、完全に気持ちよく酔って熟睡しておられ反応は皆無でタクシーを呼んでお送りしました。これがちよつと変わった出会いでした。

その後、先生の御説を勉強していると当時一世を風靡したクルーグマンと同じで生産性の低さが経済危機を引き起こすという予言が著作にあり、途轍もない方だと思ひ研究会などで議論させていただきました。

ここで大学に関連した三つの印象深い事柄に絞って先生の素晴らしさを振り返ってみたいと思います。役人を退職した後アジアとの接点としての役目をしていきたいと思っていたところ、当時GRIPS学長だった白石先生からアセアンとの関係強化を手伝うように言われ、原先生との濃密な付き合いが再び始まりました。

第一の記憶は学生との深いつながりです。二〇一八年にジャカルタでGRIPSインドネシア同窓会が初めて開催されました。学生一人一人が思い出を誇らしげに語り原先生とのツーショット写真を撮っていました。楽しい集いが夜遅くまで続きました。また、ジャカルタへ来られない学生のためにジョグジャのガジャマダ大学にも行きましたが、そこでの夜の同窓会は遠

くから来た学生や家族を連れてきた人などもいて、私が海外で経験した最も暖かい時間でした。敬虔なイスラムの学生が父上に買ってきてもらったと原先生のためにビンタンビールを運んできてくれました。また、ミャンマーのネピドーのJICAの会議に一緒に行つたときには、中央銀行や財務省の若手官僚の人達が「もしかして原先生ですか」と近寄り、「そうだ」と答えると呼びかけあつて大勢の女性が原先生を取り囲んで抱き合っていました。私は小学生の頃に「二十四の瞳」に感動しましたが、よもやその海外版をミャンマーで自分で見るとは想像していませんでした。この濃密な人間関係はGRIPSの大きなレガシーといえると思います。

第二は、第一と関連しますが、原先生が優れた学者であるというだけでなく授業が留学生のニーズに本當にこたえていたということです。アセアンとの関係強化を手伝っているうちに、学生とのつながりにも興味がわき、原先生に授業を一緒にできないかと提案しま

した。私一人では体系的に学問的な授業をする自信がありませんでした。原先生は予想以上に積極的でした。その後気が付いたのは、先生の中には開発に関する政策の狙い、実行、結果と経済理論の関係をもう一度きっちり振り返ってみようというお気持ちが強くあったようです。最初の年は、お互いが理論と発展の現実を交互に講義するだけでしたが、徐々に先生が私の授業に割り込みはじめ、授業の三分の一は討論会のようになりました。さらに少したってから先生は授業中に理論を紹介され、アジアのある国の状況はこの理論を使うと将来こうなると予想されると意見を述べるなど、結構丁々発止の掛け合いになりました。おかげで授業は毎年幅広いコースや国から大勢参加してくれるようになりました。先生は毎年講義の内容を改良され、一方、アジアの経済状況も刻々変化するので毎年講義の細部の打ち合わせに結構時間を使うことになり、また、授業の間も厳しい指摘が続くので私にとつて冬はつらく、しかし終わったときにはホットすると

とうれしそうに締めくくられました。論文作成に苦闘した二年ばかりの間、厳しい指摘に身を縮めるだけでなく、「はよ、次書いて来いよ。」といいながら続きを知らうとされていた好奇心満々の人懐っこい顔が思い出されます。先生に論文を指導していただいたおかげで、学生がいつまでも原先生を学問的に尊敬するとともに慕う気持ちがよくわかりましたし、理論と実践を極めようとする規律を持った姿勢がよく理解できました。

長々と思ひ出を書いてしまいました。今年の二月、三月とオンラインながらもいつものように授業を一緒に実施し、三一日に「大変やったけど、ちゃんとやれたな。来年も頼むよ。」といわれ手を振って別れた後、二日後に亡くなられたと連絡を受けました。半年たった今でも、巨人がいなくなった喪失感は大きいままです。関西弁の掛け合いの日々が忘れがたいままです。残されたものを皆で分担し引き継いでいくには時間と協力がまだまだ必要なようです。合掌

ともに、自分のアジア観が皮むけた高揚感に包まれました。

第三は私事にわたり恐縮ですが私の論文作成についてです。授業をしているうちに原先生から、日本のアジア政策について体系的にまとめることを勧められました。慣れないので難航しましたが、トンネルから脱出できたのはミャンマー出張の時でした。ヤンゴンから初めてネピドーに行くとき、ニヤッと笑いながら、「大辻君。飛行機危ないな。君どうする」といわれました。すぐに車を手配し、八時間の道中が始まりました。途中から原野の片側四車線をひたすらまっすぐ走るだけになり、居眠り運転になると怖いので大声でしゃべり始めました。通貨危機後のタイで実施された中小企業診断士の育成、自動車裾野産業の育成、一村一品事業への協力、日本留学生OB会との連携について政策、タイ側の反応、結果を順番に述べました。機関銃のような質問を浴びへとへとなったところにネピドーに着きましたが、「大辻君、これや。これで行け。」

原洋之介先生への感謝をこめて

政策研究大学院大学教授

大野 泉

原洋之介先生の突然のご逝去は、本当に悲しく信じられません。高らかな笑い声とともにやや速足で闊歩する原先生の姿が浮かび、今でも大学でお目にかかれる気がしてなりません。

原洋之介先生の著作に初めて触れたのは、私がまだ米国の世界銀行で働いていた一九九〇年代初めでした。当時の世銀は構造調整融資の最盛期で、累積債務に苦しむアフリカや中南米諸国、市場経済移行に取り組む旧ソ連・東欧諸国にビッグバン方式で経済改革を推奨していました。世銀のオペレーションに携わりながら、発展段階や市場経済の経験が異なる国々に、共

通の改革案（いわゆる「ワシントン・コンセンサス」）を条件として資金支援をするアプローチに何となく違和感を覚えていました。その時に、原先生をはじめとする日本発の開発経済学者の思想に触れ、目が開かれた思いでした。これが契機となり、既に日本で教鞭をとっていた大野健一と共編著で、日本の開発経済学者の代表的な著作を英訳し発信する書籍『Japanese Views on Economic Development: Diverse Paths to the Market』（Routledge, 1998）の構想が生まれました。原先生の『アジア経済論の構図―新古典派開発経済学をこえて』（一九九二年、リブレポート）の一部を紹介させていただきました。

その後、私は世銀を退職し、日本の海外経済協力基金（OECF）で設置まもない開発援助研究所（RIDA）にて一九九三～九五年に働く機会をえました。最初に取り組んだ研究テーマが「政府の役割と民間のレスポンス」でタイと韓国に焦点をあて、原洋之介先生（当時は東大東洋文化研究所）にご指導を仰ぎまし

す。晴らしいご縁に心の中で歓喜したことを覚えています。

原先生は、開発経済学の理論にとどまらず、アジアをはじめとする途上国への開発政策支援にも深くかわられました。石川滋先生が主査を務めた、ベトナムの市場経済化に向けた大型の知的支援（通称「石川プロジェクト」、一九九五～二〇〇一年）の中核メンバーで、原先生自らもJICAと連携してラオスの経済政策支援（二〇〇〇～二〇〇五年）の主査として、ラオスの社会文脈をふまえた開発の方向性について、同国の研究者との共同研究や政策リーダーと対話を通じて提言されました。原先生とお話すると、ラオスへの愛情をいつも感じました。また、インドネシアへの経済政策支援にも深くかわられました。原先生は、経済発展研究において、開発経済学と地域研究が二分されがちな傾向を問題視し、歴史的パースペクティブや各国・社会固有の事情を大切にしながら、市場経済化を考える重要性を理論と実践（知的支援）で一貫して

た。タイ現地調査にご一緒いただき、ラオス国境に近い北部農村まで足を伸ばしてヒアリング調査をしたのは楽しい思い出です。RIDAでは、日本政府の提案で世銀が刊行した『東アジアの奇跡』報告書（一九九三年）をめぐる様々な論争の集約やセミナー等の開催も担当しました。

ワシントンDCにいったん戻ったものの、日本を拠点に仕事をしたいとの思いが募り、一九九八年よりOECF、そして統合後の国際協力銀行（JBIC）に就職しました。日本発の視点に惹かれたのは、ひとえに原先生との出会いがあったからです。世銀での経験をもとに『世界銀行―開発援助戦略の変革』（NIT出版、二〇〇〇年）を刊行する機会に恵まれた時、原先生は快く序文を執筆してくださいました。実務と研究をつなぎたいという私の想いを親身に激励ください、いかに有難かったことか。私は二〇〇二年から政策研究大学院大学（GRIPS）に参りましたが、数年後に原先生がGRIPSにお越しになった時は、素

示してられました。

私は、GRIPS（開発フォーラム）で大野健一とともに、JICA支援のもと、二〇〇九年よりエチオピア産業政策対話に取り組んでいます。これも原先生に多くを触発されたことです。それゆえ、二〇〇八年～二〇〇年にJICA研究所（現在のJICA緒方研究所）所長を務めGRIPSチームから一時的に離れた時、おこがましいと思いつつも、原先生に産業政策対話のメンバーへの参加と助言をお願いいたしました。ご快諾くださった時は、感謝の思いで頭が下がりました。二〇一九年五月にエチオピアを訪問くださり、アジアの開発経験に根差した提言をいただきました。私は現在も、研究所時代からの取組で、途上国の産業政策や開発政策支援のあり方をテーマに研究を続けていますが、原先生に進捗を報告しご指導を仰ぎたいと思っていた矢先にご訃報に接し、本当に残念でなりません。

原先生が政策研究院でまとめられたアジア研究報告

シリーズⅠ～Ⅴは「21世紀のアジア経済をどう捉えるかーアジア・ダイナミズム再考」をはじめ、グローバル・バリエーション、デジタル化、産業政策の大転換、世界の政治経済環境の変化の中で、今後のアジアの発展と日本の関わりを考えていくうえでバイブルともいえる知的資産だと思います。歴史的視座、地域研究の視点、国際経済・開発経済学の理論すべてにおいて原先生の豊かな知識と洞察力に圧倒されるとともに、躍動感ある文章を読みながら、先生の知の結集をどのように深め、研究・実践面で発展させていくかが、途上国の開発や経済発展に取り組む者に課せられたきわめて重要な宿題であることを、強く心に刻みました。

原先生、言葉に尽くせないほどお世話になりました。先生にいただいた数々のご恩に報いることは、おそらく一生できないように思います。それでも先生のご遺志をうけとめ、少しでも近づけるよう精進していきたいと思います。天国でどうか見守ってください。

りすぎる。開発にもがく国々と、もつと知的でエキサイティングな仕事はできないものか。結局私はワシントン・コンセンサスになじめずに、一九九〇年代初めに退職して帰国することにした。

日本の大学に奉職した私は、わが国では途上国開発についていったいどういう議論がされているのかをまづ知りたいと思った。手当たり次第に読んだ。そこでめぐりあったのが、石川滋の「開発経済学の基本問題」と原洋之介の「クリフォード・ギアツの経済学」である。市場メカニズムはどんな社会にものっかる中立的な機構ではなく、各社会の強烈な個性がその導入と展開の可否を左右する。労働市場や土地市場はとりわけ市場メカニズムに乗りにくい。なるほどそうか、と思った。これは著者の先生方にぜひお会いせねばならぬと考えた。原先生とのアポをとり、東大の東洋文化研に出かけて行った。先生は何か直前まで忙しかつたらしく、バタバタとやってこられた。初対面なのにいつもの調子で大笑いしながら研究室にいられてくれ

途上国とつきあい、ともに考えること

政策研究大学院大学 教授

大野健一

大学院を出たあと、私の最初の就職は米国ワシントンDCにある国際機関だった。そこは途上国政府を相手に、財政や国際収支やパルクラブのリスクを交渉するところだった。私は債務危機に陥ったエジプトとの交渉チームの一番下に加えられ、カイロでは財務大臣や中銀総裁とのずいぶん滑稽な談判を見学した。本部では毎月送られてくる膨大な銀行データをロータス一二三の表に入力する仕事をやらされた。だが一年もすると、この種の作業に不満が生じてきた。眼前に展開する途上国の人々のダイナミックな営みと、この機関が打ち出す無機質で紋切り型の勧告にはギャップがあ

た。だが本があらゆるところに山積みになっており、整理整頓どころではない。ようやく二人座る場所を確保したが、本の多さに驚いて、あのととき原先生と何の話をしたか覚えていない。

石川先生と原先生は、その後ベトナムとの政策研究プロジェクトに着手された。JICAの大型知的協力案件である。ある日私の研究室の電話が鳴った。原先生だった。実はこういうプロジェクトを石川先生が始めるから、君も参加しないかとの誘いだった。それから六年ほど、両先生と何度もハノイを訪れた。お二人の理論に加え、両先生が途上国政府の最高指導者や経済閣僚と実際にどのような議論や説得をされるのかを目の当たりにした。ワシントンのやり方とはだいぶ違った。ベトナムのみならず、石川先生は中国と、原先生はラオス政府と、同様の知的協力をなされた。私はこれらには参加していない。

私には、お二人の途上国政府との交渉術やJICAの動かし方にはいくらか問題があると思われたが、裏

表のない真摯で率直な見解や金銭的・名譽的見返りを全く求めない無私な態度には脱帽せざるをえなかった。欧米の開発協力は原則やコンデイションナリティーで詰めてくるが、日本は開発目的と現場経験の共有を前提として根気よく協力することになっている。それを地でいく政策研究であった。母国のために命を捧げる国家指導者にとって、こうした外国人学者の存在は稀有であり、実にありがたいことだったろう。途上国の高官のなかには裏での政治的画策や自己利益追求にたけた人もいるが、そういう人でさえ、両先生に接すれば襟を正して聞かざるをえなかった。

私のなかでは、石川先生と原先生はいつもセットである。私の途上国の産業政策研究も、私がベトナムを主たる定点観測地に定めたのも両先生のおかげである。これが本当の学問伝授のしかたではないかとも思う。両先生にはゼミでお世話になったわけでもないし、講座制の弟子だったわけでもない。彼らの学問的関心や方法論を私が継承したわけでもない。けれど

なられた前の晩に仲間、友人たちとも全く普通どおりのお付き合い、生活をしておられて、突然、翌朝に亡くなられたということの後で伺い、ある意味、いかにも原先生らしい最期なのかな、という気になったというのも、また私の正直な印象だった。

私が原先生との直接のお付き合いをさせていただいたのは二〇〇六年、原先生が本学政策研究大学院大学（GRIPS）にいられてからである。小生は原洋之介先生のお名前はもちろん農業経済学の泰斗として存じ上げていた。小生とは専門分野もかなり離れていたもので、学会その他でお会いする機会は全くなかったのであるが、なぜか、もう四〇年位前のことになるが、小生が米国コーネル大学に留学していた頃に農業経済学が専門の友人がいたこともあって（彼らはこの分野を「アギエコノミクス」と称していたが、小生は一人でたぶん Agriculture economics の略称なのだろうと思ってた）、その分野の事を頻繁に聞かされていた。彼らはこの分野はコーネル大学は強いんだと自慢していた

も、二冊の書物が三〇年前の私の知的空白をうめてくれた。それは、私自身の研究方向を定めるうえで唯一ではないが非常に重要な出会いとなった。両先生とも、お亡くなりになる直前まで公私にわたりお付き合いをさせていただいたことは、私にとってこの上もない幸せだった。

原洋之介先生の思い出

政策研究大学院大学 教授

大山達雄

「原先生が昨日亡くなりました」の一報を聞いたときは、耳を疑った。というより、てっきり冗談か何かの間違いだらうというのが正直な印象だった。亡く

のもよく覚えている。そんな話をしているうちに、小生にとっては原先生とわが国農業経済学のパイオニアとも言うべき、かの有名な東畑精一先生とがペアになつて頭に残るようになった。農林省農業総合研究所長、アジア経済研究所長などを歴任された東畑先生は一八九九（明治三二）年生まれで一九八三（昭和五八）年に亡くなっておられるので、原先生との関係はある程度というか、もしかしたらかなりあったのではと思われる。しかしながら、小生が原先生とは何回も「飲み会」を繰り返した中で、原先生と東畑先生との関係、お付き合いについてじっくりと話を聞いておけなかったのは、かえすがえすも残念に思えてならない。小生が原先生に最初にお会いして話した時も、真っ先に東畑先生を思い浮かべて、原先生とセットで小生はお名前を存じ上げていましたと話しかけたのを覚えている。そのとき何を話したかは具体的にはほとんど記憶がないが、あの原先生にしては、とてもご自身を謙遜しておられたというおぼろげな記憶だけが残っ

ている。

GRIPSでの原先生とのお付き合いは、ほとんどすべて、教職員同士、学生を含めての「飲み会」が主であった。教員、職員を問わず、学生、教員を問わず、日本人、外国人を問わず、どんなメンバー構成でも、こちらから声をかけると必ず積極的に参加してもらえるのが原先生だった。どんな集まりでもあのタバコスパスバ、お酒ガブガブ、そして機関銃のような語りぶりの原スタイルは常にいつも同じだった。

私が特に印象に残っている、というよりいつも楽しませてもらった会話は、小生が自分の知っている範囲での国内外の学界、政界、官界、実業界の“big name”（小生の知っている範囲での“Big name”だから、さほど“Big”ではないかもしれないが）を持ち出して、原先生の次の言葉は、「ああ、彼は（彼女は）僕はよく知っているよ。彼は（彼女は）僕の友人だよ。」だった。あのざつくばらんで気さくな性格、早口でなかなか止まらない語り口、まさに原スタイルの

行動力、そしてエネルギーな活動ぶり、誰とでも友達になる積極性を駆使してご自身の交流関係、友人関係を築いて来られたことを間近に見られたのがとても懐かしく思えるのである。

きつと天国でもタバコスパスバ、お酒ガブガブで多くの友人を作って楽しく談笑しておられるはずです。ご冥福をお祈りします。楽しい飲み会のお付き合い、本当にありがとうございました。

原洋之介執筆

「日本農業経済学の「旧くて新しい」課題」^①

一橋大学・法政大学名誉教授

一橋大学経済研究所非常勤研究員

尾高煌之助

お互いの研究成果の意味を、永い時間軸に沿って咀嚼し、再考し、確かめあう試みは珍しい。だが、多大

な知的エネルギーを投じて調査研究が営まれるからには、時には立ち止まって、仮にやや場当たりの的であっても、過去の事跡を振り返って研究の軌跡を確かめるのは好いことだし、推奨されてよい。この、地味でさりげない、おそらくはあまり人目につかないだろう論稿は、この意味でも意義のある作品である。

原さんの議論は、農業の日米差を指摘することから始まる。日本では、米国とは異なり、農業の生産効率が非農業のそれにはるかに劣るだけでなく、両者の格差は拡大したまま二〇世紀末に至ったという。両国でのこの違いのルーツは、——論稿の末尾で指摘されているように——わが国の土地が絶対的にも相対的にも過少であって、小農経営が農業の主流を占めてきた歴史的事情に求められている。

原さんによれば、この歴史的事情は今後も変わらない。農家の大多数は、兼業農家になったり離農したりしても、農地所有への執着を捨てないだろうという。

土地は、彼らにとって数少ない「確かなもの」だからだ。この意味では、日本経済におけるいわゆる「土地神話」は消滅しておらず、今後も簡単にはなくならないのではないか。もしそうなら、日本農業の将来像はこの歴史的遺産を前提にして描かれねばならない。

たぶん同種の事情は、他のアジア地域の多く——とくに韓国、中国、インドネシアなど——にも、軽重の差はあってもあてはまるだろう。歴史的に土地・人口比率が例外的に高位にあつたのはタイ（と南ヴェトナム？）くらいのものである。そうだとすれば、欧米流の農業経済学は、その全部をストレートにはアジアに応用できないことになる。

この原さんの論稿でいまひとつ見逃せないのは、大川一司先生の農業における過剰就業論に触れている点だ。原さんによれば、下層農家の所得は、生存水準（SL, standard of living）あるいはそれに近いところに決まった。この水準は、たぶん農村内の平均農業付加価値生産性で近似されただろう。その一方、上層農

家に雇われる「年雇」は、——原さんによると——上層農業の限界生産力にみあう報酬を受け取っていたはずなのに、実際にはその額は「競争的に」SLレヴェルに等しかったのは不思議だ、という。

この現象は、次のように理解できるのではないか。自営小農が大多数を占める農村で年間を通しての雇用契約を結ぶ際には、労働供給側からみた労働の機会費用がSLを基準に測られるのは自然である。ところが、支払い側の上層農家は、収益極大の計算から、年雇の——賄、住宅費など込みの——報酬をその限界労働生産性にはほみあうところに決めようとしたに違いない。それは、支払い側からすれば限界労働生産性の値だが、実は、たぶん当該農村の平均労働生産性（＝SL）に等しかった（近かった）のであろう。すなわち、農村内の限界生産性には格差があったが、同時に以下の均等関係も満たされていた。

上層の平均生産性 \vee 上層の限界生産性

＝ 下層の平均生産性 \equiv SL \vee 下層の限界生産性。

つまり、年雇の報酬水準は、村の労働対価の相場に従うと同時に、上層農家の収益極大の必要条件をも満たしていたのではないか。

もちろん、農村内に耕作面積の大小に対応してリカードの生産性格差があったことが、この議論の前提である。ちなみに大川先生は、——論稿の注二（p34）で指摘されているように——この前提の根拠を検証されなかった。だがこれは、土地市場が十分に競争的ではなく、しかも資本市場も競争的といえなかったという事情のためではないか。土地市場の固定性——非競争性——は、原さんがいうように農地改革後にむしろ強まったと解されるとすれば、小農生産的特質は、敗戦後はむしろ強化されたとも言える。

ところで、農村の労働市場は——年雇の雇用・被雇用関係も含めて——競争的だったといつてよいらし

(3) 以上の解釈にたつき、原さんの論稿と同じ書物に収められた新谷正彦氏の論稿は、原論稿に対して考察の空間的拡大を迫るところがある。新谷論稿は、いわゆる発展の「転換点」の確認とその国際比較とをめぐって新しい知見を提供しているからだ。

い。日雇労働の賃金は、データ的に検証するのは困難だとしても、それぞれの作業の限界労働生産性に等しく決まったはずだという梅村又次先生の指摘が注三（p34）に引用されているのはおおいに心強い。相対取引で労働契約が結ばれる場合には、資本制社会以前であっても限界原理が成立していたはずだと筆者も思うからである。

本稿の論点を含む限らない学恩に対して深い感謝を捧げるとともに、原洋之介さんのご冥福を祈る。

原先生との想い出

九州大学大学院比較社会文化研究院 教授

鬼丸武士

原先生と最初にお会いしたのは、一九九八年か九九年に東京で開かれたさるパーティーの会場から、二次会へと移動する地下鉄の車中であった。この時は、先生に簡単にご挨拶させていただき、二言三言、言葉を交わしただけで、ゆっくりとお話しさせていただくこ

注

(1) 泉田洋一（編著）『近代経済学的農業・農村分析の五〇年』（農林統計協会、二〇〇五年）、第二章、一五―三七頁、所収。
(2) さきの日米間の違いにちなんでいえば、米国の場合には、土地（または資本）市場の不完全性がない（少ない）ところが、二国の農業の歴史的違いを生む重要な根源だといつてよいのだらう。

とはできなかった。

次に先生にお会いしたのは、二〇〇二年か三年、バンコクでのことだった。この時、私は当時バンコクに留学していた友人の水谷康弘君の下宿に転がり込んでおり、水谷君に誘われてバンコクにいらしていた原先生を囲む懇親会に参加することになった。会場は水谷君の下宿があったバンランプーから歩いてほど近い鴨料理の店で、原先生のお気に入りとのことだった。我々が会場に着いた時には原先生はすでにビールを召し上がっておられ、かなりご機嫌で、遅れてきた我々にこの鴨料理は絶品であること、とにかく早く座ってビールを飲むことなどを矢継ぎ早に話された。先生が絶賛するだけのことはあり、その店の鴨料理はおいしく、料理をつつき、ビールを飲みながら、タイをはじめとした東南アジアのことだけではなく、日本の政治経済状況、東南アジア研究者の人物評など、様々な話題が原先生を中心に飛び交い、非常に楽しい会であった。

中から、目的の本をあまり迷うことなく見つけ出すことであった。また、研究会やその他の用務でお願いに上がると、いつも「わかった」の一言で快く引き受けてくださった。

関西出身で阪神タイガースのファンでもあった先生と、GRIPSから歩いて行ける神宮球場や東京ドームで、タイガースの試合を一緒に観戦させていたことがあった。球場でも、先生はビールや日本酒を欠かすことなく、飲み終わったらすぐに売店に行き補充して帰ってこられた。試合の勝率はあまり良くなかったと記憶しているが、阪神が勝ったときは先生は本当您機嫌で、二次会でまたおいしそうにビールを召し上がっておられたことを記憶している。

そのような日々の中、先生と再びバンコクにご一緒する機会があったのは二〇一三年二月のことであった。この時、先生は現在のバンコクと一九七〇年代に滞在されていた時の姿を重ね合わせながら、どこに行っても「こんなものはなかった、こんな建物は知ら

宴もたけなわになり、それぞれがビールでかなり酔っぱらってきたころ、原先生が近くにあるお粥の店に行き、お粥を食べて「よう」と言い出された。そのお粥の店はバンランプー運河にほど近い所であり、水谷君の下宿と鴨料理屋のちょうど中間地点ぐらいに位置していた。お粥屋に着き、さて注文となった時、先生の口から出たのは「ビール！」の一言だった。もう少し飲んでからお粥を食べるのだろうと思っていたのだが、ビールの注文が繰り返されるばかりで、一向にお粥を注文される気配がない。結局、その店では閉店までビールだけを飲み、相当酔っぱらわれた先生をタクシーに乗せてお送りした後、水谷君と二人でその近所の屋台でお粥を食べたのであった。

その後、原先生がGRIPSに着任され、職場でもご一緒することとなった。先生の研究室は本が増えるにしたがってどんどんエントロピーが増大していき、部外者が見ると完全に混沌とした状態であったが、先生がすごいのはそのような乱雑に積まれた本の山々の「ん」と四〇年の時を隔てたバンコクの発展と変化を体感されているようだった。それでもヤワラーやバンランプーなどの開発が進んでいない下町のエリアを歩いていると、「この辺はちっとも変わらん」と言いながら、当時の思い出などを我々に聞かせてくれた。

このバンコク滞在の一日、かつての思い出の鴨料理の店を訪ねることになった。タクシーで店の近所までいったものの、店は改装中のため休業しており、あの味をもう一度、原先生と楽しむことはできなかった。また次回、バンコクに一緒に来た時にこの店で宴会をしようとその時は話していたが、その機会が訪れることがなかったことが非常に残念である。

もう一つ、心残りなことは先生を九州にお招きできなかったことだ。GRIPSで最後にお会いした時、九大で講演会をしていただけなにかとお尋ねしたところ、いつものように「わかった」と快諾いただいた。ところが昨年来の新型コロナウイルスのパンデミックのため、ご高齢の先生を福岡にお招きすることを躊躇し、

実現できないまま今日に至ってしまった。先生と福岡のうまい魚をアテにお酒を飲みながら、研究のことや今年調子のよい阪神ことなどあれこれとお話しさせていただくのを楽しみにしていたが、これもまた叶うことのない夢となってしまった。

思い出してみると原先生にはいろいろなお話を聞かせていただいた。特に印象に残っているのは先生の人物評である。時として辛口の評価を口にされることもあったが、その時にはいつも最後に笑って舌をペロツと出された。その何とも言えない表情が今も強く印象に残っている。あのお顔がもう見られないということがいまだに信じられない。

農業経済学者としての原洋之介先生

中村学園大学栄養科学部フード・マネジメント学科 教授

株田文博

私の原先生との出会いは一九九〇年頃の学生時代に遡る。当時、東洋文化研究所教授だった原先生に、農業経済学科の「比較農業」の講義のためわざわざ弥生キャンパスまでお越し頂いていた。講義内容を十分に咀嚼できず記憶も曖昧ではあるが、農業は自然社会経済条件によって大きく異なる多様性を有しており、だからこそ農業内部だけで議論することなく現場に即しつつ外部環境との繋がりを意識して分析する必要がすることは心に刻んだ。またある授業で added value の重要性を強調され、何度もチョークを折りながら渾身の力で板書されている原先生の姿を鮮明に記憶してい

る。ややもすると農政が生産量、生産額で農業を捉えがちだった点を、経済学者として警鐘を鳴らされていたのであろう。この二点はその後も行政官・研究者として常に意識し、私自身の国際的な視野での食と農に関する産業連関分析や付加価値連鎖分析などへと繋がった。

学部卒業後長らくご無沙汰していたが、行政官から研究者に転向し農林水産政策研究所勤務となった二〇一〇年から、研究所の機関評価委員会委員や研究評価委員会として、再び学恩に浴することになった。農学部が（農業）生物学、（農芸）化学、（農業）経済学・経営学、（農村）社会学、（農業）工学、（獣）医学など多様な分野から構成されミニ・ユニバーズと言われるように、農林水産政策に関する研究の幅もかなり広い。研究評価会の座長が博識で知的好奇心旺盛な原先生でないとは評価者は収まらなかつたであろうという場面をよく目にした。まさに余人をもって代えがたい国泰斗であった。またこの頃、先生が担当されていた国

際食料農業論の一コマを受け持つ機会を与えて頂いたのが、私のGRIPSとの関わりの端緒となった。学科の後輩であり、農水省での国際関係業務、国連食糧農業機関・世界食糧計画を担当する在イタリア大使館での勤務、国際機関アジア生産性機構での勤務の経験などを背景に、分不相応ながら先生と徐々に親しくさせて頂くようになっていった。

二〇一五年一〇月から三年半、GRIPSに奉職した際にさらにごく身近でまさに密に先生からご指導頂く機会をえた。研究室によくお立ち寄りになり、近年の食料・農業・農村についてもさることながら、むしろ明治期・昭和期の頃の農業経済学、農政について、東畑精一、大川一司、柳田國男、東畑四郎、小倉武一などの研究者と役人がどのように現状分析・事実認識し政策を構想していたかが話題の中心であった。拝聴しながら、古典とは、古いものではなく、後世の人間が長く時代を超えて規範とすべき価値あるものであることを再認識させられた。

原先生は、長らく著書の著者紹介として専攻分野は「経済発展論、アジア経済論」とされてきたが、農業経済に関する名著三部作を著した農業経済学者としての顔もある。二〇〇六年に刊行された第一作『『農』をどう捉えるか』のあとがきに、「もともと専攻した農業経済に関するものはまったく書いてこなかったしまたその勇気もなかった。しかしあとほんの少いで東大を去る以上農業経済学科への卒業論文を書くことが自分の義務でもあろうと思ひ、…書くことを決意した」と記されているが、そのアンビバレントな感情の一端を時折ご教示頂くこともあった。

原先生は、二〇一四年三月に開催された日本農業経済学会大会において、学会創立九〇周年記念講演として「比較農業論のすすめーグローバル化時代の日本農業経済学会に課せられた課題ー」をテーマに檄を飛ばされた。先生がよく引用された言葉に、柳田國男の「今日の時節に必要なのは西洋の農業経済学の普及ではなく、日本の農業経済学の開発である」や、東畑精

一の「農業以外の産業を研究する経済学者は、日本が外国と共通ではないという意識が乏しい。ところが農業は、西洋の農業論で日本の問題を解こうとしても、てんで初めから受け付けない」がある。今思い返せば学会へのある種の「遺言」として、この講演を通じて、過去の農業経済研究が「欧米とはかなり異なった経路で発展してきた自国の経験を前提として展開」してきたことをよく噛みしめるよう、特に私たち中堅・若手世代の学会研究者に向けて、鋭い警鐘を鳴らしていたのである。この学問姿勢は、原先生がアジア研究の中で貫いてこられたものである。

二〇二一年三月、原先生のいつもの元気なお声での「福岡からオンラインでいいから、後学期の国際食料農業論の一コマをまた頼む」という電話越しのやり取りが最後の会話になってしまった。突然永眠される数週間前のことだった。「株田くん、この政策はなんでこないになったんや、知っとるか？」と政策企画者の真意・背景をよくたずねられたが、最近の政策になれ

ばなるほど説明が難しくなってきたと感じていた。かつて政策企画と政策研究に身を置きながら、先生への「卒業論文」を提出することなく私事都合のため他分野へ転向することになったが、感染状況が少し落ち着いたらまた四方山話に花を咲かせたいと願っていた。なぜだろうか、高齢で人一倍煙草もお酒も嗜まれる原先生だったが不死身のような気がして、私の「後見人」としてこれからもまだまだ人生相談にもって頂けるものと思ひ込んでいた。先生の温かいご指導を賜った北海道から沖縄までGRIPS農業政策コース修士課程と農業政策短期特別研修の多数の修了生、関係教職員とともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

追悼・原洋之介さん

静岡県知事

川勝平太

一九八〇年代、原洋之介さんがリーダーの「リプロ研究会」があった。だれもが若く快活であった。世話人は出版社リプロポートの名編集者の早山隆邦氏。早山さんと斎藤修氏は慶応義塾普通部の同級生。原さんは斎藤さんと研究会で意気投合。原・斎藤・早山の三氏はリプロ研の輝ける黄金のトリオであった。

トリオの輪は四方に広がり、私は同じ稲門で兄事していた清水元氏に誘われた。当時、四年間の英国Oxford留学で博士論文の草稿を書き終え、新しい（と思つた）歴史像を国際交流基金の創立一〇周年記念の懸賞論文に応募する形で公表し二席に選ばれた。「そ

の内容を紹介せよ」と清水さんがリプロ研の輪の中に入れてくださったのである。

当時の私の研究は野生のワタの栽培史と木綿の経済史・生活史にわたっていたが、野生のコメやムギの栽培化（農耕革命）とヒツジやウマなどの家畜化（牧畜革命）に強い関心があった。コメについて、今西グループが稲作の起源は雲南・アッサムの照葉樹林地帯だという「照葉樹林文化論」を唱えていた。雲南・アッサムは、麦作の起源地・西アジアの「肥沃の三日月地帯」と対比され、「東亜半月孤」と呼ばれていた。稲作文化は東亜半月弧から幾筋もの河川を下り、紅河・メコン・チャオプラヤ・イラワジに沿って東南アジアへ、プラマプトラ・ガンジスに沿ってインドへ、長江（揚子江）に沿って中国へと伝播し、複数のルートを経て日本に伝わったとみなされていた。

原さんは東南アジアの現実に明るく、たとえば、タイの話では、内陸（とみなされていた）アユタヤが実はチャオプラヤの港市でアユタヤ王朝は海に開かれた

たというのでチェンマイを歩き回ってレンガを（ひそかに）持ち帰ったりした。タイの屋台での食事と談論は思い出すと楽しい。その中心にはいつも原さんがいらした。

帰国後、隊長から「隊員はすべからず東南アジアについて一文を草すべし」との達しが下った。その後、私は英国への海外研究を命じられ、渡英準備と博士論文の清書・提出・口頭試問等に追われ、名著『東南アジアからの知的冒険』（リプロポート）への寄稿がかなわなかった。自責の念の深まりに比例して、コメへの関心は増し、アユタヤ王朝商人国家論への関心も持続した。その後、京大の東南アジア研究センターが中心になって総合的な地域研究の手法をめぐる大がかりな共同研究が立ち上がり、私は研究評価を依頼され、東南アジア全体への関心は深くなった。

稲作の起源については、環境考古学の安田喜憲氏に長江流域の城東山遺跡などに案内してもらい、自らも良渚遺跡を訪れ、認識を新たにした。考古学の知見に

商人国家であった、という石井米雄説の紹介や、デルタでは水嵩が増すにつれて稲の茎がグイグイ伸びる「浮き稲」がある、といったもので実に印象的だった。

原さんの知的刺激を受けたリプロ研にタイへの憧れが生じた。早山さんがタイ視察を企画してくださり、隊長は原さん、隊員は斎藤さん、清水さん、大西健夫氏、早山さん、そして私。私の関心はタイ米で、渡部忠世『稲の道』のほか坪井洋文『イモと日本人』などの知見を確認したかった。イモを主食とする地域に、イモに似たモチモチ感のある陸稲の赤米（モチ米）栽培が広がって人口が増え、タイ人はチャオプラヤに沿ってデルタに出た。その過程で陸稲の赤米が水稲の白米（ウルチ米）に変化したという説の検証だ。

「デルタの浮き稲も上流の赤米（モチ米）も見よう」ということになり、バンコクからアユタヤを経て上流のチェンマイを訪れる行程となった。チェンマイではチマキ風に竹の葉でくるまれたモチ米の赤米を食した。渡部さんによればコメ穀殻がレンガ造りに使われ

よれば、稲作の起源は長江の中・下流域であり、その稲作遺跡群は、雲南・アッサムよりも数千年以上も古く、「長江文明」と呼ばれる。長江文明は黄河文明よりも古い。

稲の品種については、佐藤洋一郎氏の遺伝子分析『イネの文明』PHP新書、『米の日本史』中公新書等）が決定的で、長江文明の稲はすべてジャポニカで、稲作農民が北方民族の南下で雲南・アッサムや東南アジアに追われ、移住先の野生種とジャポニカが交配してインディカとなった。日本に伝来したのは当初からジャポニカで、水田に炭水化物の稲とタンパク源の淡水魚を共存させる「水田稲漁撈」が弥生文化の原初形態であった。

稲の栽培法については、世界の稲作の大半が直播である。タイ米研究者の宮田敏之氏によれば、タイでは二〇一八年で田植八一％、直播八二％（宮田「農業技術の発展」『社会経済史学事典』丸善、所収）。浮き稲などの直播は「遅れ」ではない。田植えの方が例外

的である。田植えの起源について、中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』に依って佐藤さんはイモの株分けの栽培法が苗の植え替えに転じたと論じている。

商人国家アユタヤ王朝論については、A・リードの一六世紀東南アジアは商業の時代というテーゼに発展し、提唱者の石井さんは論稿「港市国家としてのアユタヤ——中世東南アジア交易国家論」を『タイ近世史研究序説』（岩波書店）に収め、自説を関連論文で補強された。私は『文明の海洋史観』（中公文庫）の「起之章」に日本の鎖国と西洋の近代世界システムの母胎は海洋アジアだと論じた先述の懸賞論文を収め、昨年（二〇二〇年）増補された『海から見た歴史』（藤原書店）に新稿「海洋アジアと近代世界システム」を草して、東南アジア海域が近代経済文明の揺りかごだというテーゼに発展させた。

静岡県はアユタヤで活躍した山田長政の故郷である。静岡県知事としてタイほか東南アジアと地域外交を推進している。原さんには「経済共同体形成を目指す

す東南アジア諸国と日本」と題した講演を県の幹部にしていたのだ。その素晴らしい講演を拝聴したが、原さんとの最後の出会いになった。

原さんは、理論に明るかったが、真骨頂は東南アジア各国の現状分析に基づく政策立案・提言であった。その政策志向を一步進め、私は知行合一を旨とし、静岡県を実践的学問Ⅱ実学のフィールドとして、地域の総合的・学際的分析に基づく公益増進の政策を実践している。原さんは、社会科学は政策科学だという信念をお持ちであった。その信念を継承することで恩返しをしてまいりたい。原洋之介さん、御冥福を祈ります——合掌

思い出と課題

新潟大学農学部 教授 木南莉莉

原先生との出会い

私は三重大学での修士論文を書きながら進路について悩んでいる時に、『クリフォード・ギアツの経済学——アジア研究と経済理論の間で』（原洋之介著、一九八五年）と出会い、東京大学の博士課程へ進むことを決め、原先生の指導を仰ぐことになりました。原ゼミでは石川滋先生の『開発経済学の基本問題』（岩波書店、一九九〇年）を教科書として輪読し、ゼミ生以外の社会人（藤田氏、寺尾氏、池上氏など）も交えてみんなが先生の膨大な読書量と豊富な現地調査の経験及び鋭い切り口に圧倒され、必死に食らいつこうとする良質な学習時間を過ごすことができたと思います。そ

して、この大切な時間は私のその後の研究・教育に大きな影響を与えたと思います。

コーネル大学での再会

一九九五年に客員研究員として生まれた一ヶ月の息子を連れて夫と一緒にコーネル大学で一年間の滞在機会を得ました。大学の本屋で夫が原先生（同年にコーネル大学での短期滞在）を見つけ、我が家に夕食を招きました。私は嬉しさあまりに茅台酒を先生に振る舞い、三〇分位で先生は酔い初めました。我が子はとても可愛い」と「白石先生の上司に宛てた教授昇進の英文推薦書を清書してほしい」とだけははっきり聞き取れました。原先生を宿泊先へ送った後、急いで渡された手書きの文章をタイプし、次の日に清書した英文推薦書を先生にお渡しと同時に、夫と共著した産業内貿易と直接投資に関する研究の草稿¹を読んでいただくようお願いしました。早速に先生から「とても面白い研究ですが、雁行型発展論に固執しないほうが良

い」との的確なコメントをいただきました。

リーダーシップアカデミ(FASID)

一九九八年に私はFASIDのリーダーシップアカデミを受講し、六ヶ月間の週末を使って国際開発に関する世界中の優れた講師陣の集中的な講義を受けながら、自身が決めたテーマについて論文をまとめました^②。三歳の子供を抱えながら、京都と東京の往復通勤に週末の集中講義と海外への調査を加え、心身ともにポロポロな状態になりました。しかし、その優れた講師陣の中から原先生の講義を受けることができ、研究の相談にも乗っていただきました。

TEA五〇周年記念シンポジウム

二〇〇二年に私は勤務先の龍谷大学での昇進人事に不満を抱き、新潟大学へ勤務先を移しました。その年に、日本農業経済学会TEA五〇周年記念シンポジウムのアウトサイダー側のコメンテーターとして依頼さ

とのある首里城を私と私の息子に丁寧に説明して下さって、我々親子にとっては忘れられない思い出となりました。

新潟大学での特別昇進人事

二〇〇八年に新潟大学自然科学系は組織改革の一環として特別昇進人事制度を作りました。研究業績、教育実績、運営管理能力、社会貢献のそれぞれの側面において学系が定められた教授の基準を満たし、かつ「余人もって変え難い」と認定されれば、公募せず内部から昇進でき、私はその第一号となりました。早速、そのことを原先生にご報告し、予想以上に喜んでいただき、その責務の重大さも感じました。「もう誰にも相談しなくていいよ、自分のやりたいことを責任もってやってね」。そのお言葉は今でも心に刻んでいます。

れ、同じシンポジウムで基調講演を行う原先生から「コメントの内容をちゃんと準備したか?」と聞かれ、「はい。でも内容がダメでも、破門しないでいただきたい」と答えました。先生からは「ちゃんと準備したのであれば、破門しないよ」とのお言葉をいただきました。しかし、私の発言内容は当時?の日本農業経済学会にとっては「前衛的」すぎたようであり、研究対象や研究方法及び研究組織の多様性が低いという指摘は、原先生以外の多くの方には全く理解されませんでした(原先生はシンポジウムの席で「彼女はアウトサイダーではない」とはっきり述べられました)。

首里城を訪ねる

二〇〇七年の日本農業経済学会は沖縄国際大学で開かれ、学会発表の合間を縫って原先生の教え子の数名と一緒に先生と食事を共にすることができました。その席で、原先生は是非とも私と私の息子に首里城を案内したいとおっしゃいました。先生は何度も訪ねたこ

政策研究大学院大学(GRIPS)の特別講師

二〇一四年に原先生の依頼で政策研究大学院大学の特別講師として中国農業について年に一コマの講義を受け持つことになりました。先生は私の緊張をほぐすために、講義前は大学の近くにある素敵な中華料理屋で昼食をご馳走してくれました。その後、私は新潟大学農学部副学部長(二年)、自然科学研究科副研究科長(三年)を連任することになり、先生は私が雑務に追われて研究に割く時間がないのではと大変心配してくださって、お会いする度に「研究する時間が取れている?」と聞かれました。

与えられた課題

二〇一九年六月一八日私は例年通り、GRIPSの講義の前に原先生と少しだけ会話ができる機会を楽しみにしていました。しかし、その日に原先生から政策研究院の「アジア研究」会での報告書(緑色の表紙にした簡易製本)『比較アジア経済論を求めてー農業

『経済学からアジア研究へ』の研究遍歴を振り返って』

が渡され、「これ、君へのプレゼントだ。時間がある時に読んでね」。講義後、新潟行きの新幹線の中で報告書を開き、まず目に止まったのが以下の言葉です。

「この報告を書いていて、はつきりと確認できたことがある。それは、東洋文化研究所に勤めて以後、アジア各地の歴史や社会・文化の研究者たちと出会えたことで、長い歴史的パースペクティブと比較の視点から、アジア地域の経済を分析しなければならぬことを確信するようになったことである。」

私は原先生から課せられたこの難しい課題に向き合わなければならぬと思いました。特に日本の稲作と米産業について、これまでの政策がなぜ効果的ではないかを究明し、イノベーション政策に関する消費者の認知・行動を含めた視点の実証分析をおこないました⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。また、中国における近年の食料消費行動の変化についても現地調査とインターネット調査を踏まえて明らかにしました⁽⁶⁾。

ながら、次の世代へ伝えたいと思っています。どうか、原洋之介先生、我々を見守っていただけられるようお願いいたします。そして、安らかに眠りください。

注

- (1) Kiminami, Lily Y. and Kiminami, Akira "Intra-Asia Trade and Foreign Direct Investment", *Papers in Regional Science*, Vol.78.3, pp.229-242, 1999.7.
- (2) 「中国の貧困問題に関する基礎的研究」 FASID, 1998.
- (3) Lily Kiminami, Shinichi Furuzawa and Akira Kiminami "Transformation of Japan's Rice Policy Toward Innovation Creation for A Sustainable Development" *Asia-Pacific Journal of Regional Science*, 2021, <https://doi.org/10.1007/s41685-020-00175-3>.
- (4) Lily Kiminami, Shinichi Furuzawa and Akira Kiminami "Rice Policies for Long Tail Market-Creating Innovation: Empirical study on consumers' cognition and behavior in Japan" *Asia-Pacific Journal of Regional Science*, <https://doi.org/10.1007/s41685-021-00209-4>.
- (5) 木南莉莉・古澤慎一・木南章・日本の米産業におけるイノ

二〇二〇年度のGRIPSでの講義は新型コロナウイルスの蔓延で実施することができず、先生にお会いすることもできませんでした。今年の四月に突然の訃報を受けまして、あまりのショックでその現実を受け入れられなかった。先生から渡された宿題を取り組み始めれば、つまりだったなのに、それを見ていただくことができなくなりました。

原先生の研究報告の最後に「現在日本が直面している難問を克服する政策体系とそれを支える政策理念の確立こそが、我が孫たち世代に対して、我々世代が背負っている責務であるはずです。それは日本の将来世代だけではなく、アジア諸国にとっても、重要な教訓を与えるものとならなければなりません」と書かれました。また、先生はコロナ感染が早く終息し、講義が再開されることを楽しみにしていたことを大口先生から聞きました。私は二〇二一年度のGRIPSでの講義(オンライン)を引き受けることにしました。そして、これからも先生から与えられた宿題を地道に取り組み

ベーション政策に関する実証的研究―消費者の米に対する認知・行動を焦点に」『地域学研究』Vol.51, No.2, 2021, pp.209-231.
(6) 木南莉莉・古澤慎一・木南章「中国における近年の食料消費行動の変化―米小売市場を焦点に―」『地域学研究』第50巻第2号、pp.345-369, 2021.2. Vol.51, No.2, 2021, pp.209-231.

「Original thinker 原洋之介さん」

慶應義塾大学経済学部教授

東アジア・アセアンの経済研究センターチーフエコノミスト

木村福成

私の原洋之介さんとの最初の出会いは『著書』『フード・ギアツの経済学：アジア研究と経済理論の問』(リポート一九八五年)を通じてのものであった。私が学部を出て(財)国際開発センター(I

DCJ)で政府開発援助(ODA)関係の調査・研究に携わり、そろそろ米国の大学院で経済学を学ぼうとしていた時だった。当時の若輩者の理解は浅薄なものであったに違いないが、この本は衝撃的だった。単線的進歩史観をもってそこからはみ出たものを全て非合理・未発達と決めつけるアプローチでは開発途上経済の本質が見えてこない、それぞれの経済社会はそれなりの合理性を有している、文明は時にインヴェンションに陥る、複数の異なる経済社会が共存しているなどのご主張は、強く印象に残った。それらのメッセージは、その直後からメカニカルな経済学のコースワークを開始した私に経済学の方法論を相対化・客観視する視座を与えてくれた。その後、私が経済学を、唯一無二の真理の追求のためというよりは、Practicalな道具として有効に用いることに専念できたのは、この本によるところが大きい。お陰様で、魂を売り渡すこともなく、また逆に大きく失望することもなく、経済学を使って来られた。大きな学恩に感謝している。

的パースペクティブの下に」(二〇二二年一月)と題する論文を読んだ。書いてある、書いてある、相変わらず元氣な「原節」である。ブローデル、ヒックスに始まり、赤松雁行論やらデジタル・エコノミーやら、いろいろ語っている。プランテーション経済と一脈通じる低賃金・低生産性の罫、工業化社会からデジタル社会への移行、バザールからデジタル・プラットフォームへのジャンプなどなど。原さんの頭の中を覗いている気分になる。

原さんは生涯を通じてoriginal thinkerであった。人の書いたものを読まないわけではない。よく読むのだが、自身は吟味して取捨選択し、役に立つ部分を切り取って自分独自の思考体系の中にはめ込んでいく。常に自分の頭で考え、わかっていることとわかっていることを区別し、はっきりと意見をおっしゃる。誰の話にもしっかりと耳を傾ける。だから議論していて楽しいし、得るものも大きい。まだ議論したいことがたくさんあった。それがかなわないのが残念である。

米国での八年間を終えて日本に戻り、原さんもよく顔を出されていたIDCJ研修部門のコースをいくつか担当するようになって、原さんとの接点もぐっと増えた。原さんはいつも大きな声で談笑されていた。遠くにも廊下を通じて彼の大笑いが聞こえてくるので、ああ、今日は原さんが来ているのだ、とすぐにわかった。当時は世界銀行の『東アジアの奇跡』(一九九三年)をようやく消化し終え、国際的生産ネットワークの存在に気づき始め、アジア通貨危機を迎えつつある頃だった。研究者や研修生との議論が白熱していると、「おい、木村、ちょっと新古典派のことを言ってみる」と挑発してくる。パラダイム、アプローチの違いによってどんな異なる解釈が生まれてくるのか、毎回爽快感を感じるディスカッションであった。その後、なかなかゆくりお話しする機会がなかったが、今回、この短文を書くにあたって、原さんの「政策研究院アジア研究報告I 21世紀のアジア経済をどう捉えるか」アジア・ダイナミズム再考―長い歴史

ご冥福をお祈り申し上げます。

原先生との思い出

政策研究大学院大学 教授

工藤年博

原先生と最初にお会いしたのは三〇年ほど前になる。アジア経済研究所(アジ研)が開講していた開発スクール(IDEAS)に原先生が講師としていられたときである。当時、私は事務局で教務担当をしていたが、原先生の授業を聞きたくて教室の隅に潜り込んだ。原先生はすでに高名で、開発経済学やアジア経済論を学ぶならば、先生の本はまず読まなければならぬという文献となっていた。正直、その授業で先生がな

語られたのかはよく覚えていない（原先生、ごめんなさい）。しかし、エネルギーシユに話をする姿に、強烈な印象を受けたことは記憶している。

二回目にお会いしたのは、アジ研が諮問機関として設置した調査研究懇談会においてである。当時、私はこの懇談会の事務を担当しており、原先生にも委員をお願いしていた。アジ研は千葉県の幕張にあったが、多くの委員の先生方の職場が東京にあったので、その日は都心の会議室を借りていた。開始時間の直前になって、幕張のアジ研の受付から私の携帯に電話があった。「原先生が（こちらに）到着されました」と。すぐにタクシーに乗っていただき、都心の会場までお越しいただいた。原先生は三〇―四〇分ほど遅れたが、ニコニコして会議室に入って来られた。「がははは」と先生の笑いが響いた。ところが、原先生は遅れて参加されたにもかかわらず、会議の流れを（なぜか）完全に把握されており、懇談会のテーマであったアジ研が果たすべき役割と将来の方向性について、じつに

的確で暖かいアドバイスをいただいた。当時は組織改革の真ただ中で、アジ研も新たな役割を模索している時期であった。原先生の言葉は道しるべとなった。

その後、お会いする機会は減ってしまっていた。原先生と再会したのは、私が五年ほど前にGRIPSに赴任してからである。大学のコモンスームで久しぶりに先生にお会いした。原先生はコモンスームがお気に入り、よくここで新聞を読んだり、書籍のコピーをされたり、受付の人と雑談をしたりしていた。先生は私を見つけると、いつもの屈託のない笑顔で話しかけてくれた。しばらくお会いしていなかったブランクは、まったくなかった。

GRIPS赴任当時、私は主に研修事業を担当していたが、原先生は自身がディレクターを務めているEconomics, Planning, and Public Policy (EPP) プログラムに参加するよう私を誘ってくれた。このプログラムは白石前学長が主導し、原先生が長年情熱を傾けてこられたものである。インドネシアの若手官僚を対

象としたこのプログラムに参加できることになったのは、私にとってまことに幸運なことであった。EPPの詳細については、立ち上げ当初から原先生と一緒に仕事をされてきた伊藤郁美さんの文章をお読みいただきたい。

EPPプログラムに参加してのち、私は毎年インドネシアにプログラムの説明と学生さんのリクルートのために、原先生と一緒に出張する機会を得た。毎年出張は私にとって、貴重な原先生の集中講義の時間となった。インドネシアでは各地のパートナー大学を訪問するために、自動車や列車での移動が多かった。そこでの原先生との会話は、私にとっては二〇年ぶりの「授業」であり、じつに多くの学びを得た。

二〇一九年十一月、私は原先生と一緒にミャンマーを訪問する機会を得た。原先生はしばらくミャンマーに入れない時期があった。一九八八年の民主化運動の際に、当時の独裁者であったネーウインを批判する民主派リーダーの手紙が出回ったが、そのなかで原先生

のミャンマー農業に関する見解が政府の農業政策を批判する根拠として引用されたのである。原先生の見解はアカデミック的を射たものであったが、それをみた軍政が原先生の入国を拒むようになったのである。その後、だいぶ経ってから入国はできるようにはなったが、このような経緯もあり私が原先生と一緒にミャンマーに出張する機会はそれまでなかったのである。二〇一九年の出張では、私もかつて所属していたヤンゴン経済大学のTin Win学長にお会いして、原先生が主査をされていた政策研究院の「アジア研究会」における共同研究をお願いした。原先生はTin Win学長と馬が合い、とても楽しそうに議論し、夕食ではミャンマー・ビールをたらふく飲んでた。

原先生はミャンマー現代史にも大変関心を寄せていた。そして、二〇一一年以降のミャンマーにおける大変革をみて、「ミャンマーの民主化は世界史的な出来事である」と語っていた。そのミャンマーでは二〇二一年二月に国軍によるクーデターが発生し、一〇年間

の「民主化」の時代は終わってしまった。私は何度か原先生に見立てをお聞きしようとしたが、「今度会ってゆっくり話そう」と言われたまま、お答えを聞くことはできなくなってしまった。自分で考えたと宿題を出された気がしている。

原先生のパソコンを整理するなかで、多くの読書メモが出てきた。原先生は息をするように読み、話し、書き、煙草を吸い、お酒を飲み、笑った。この読書メモをみて、原先生は亡くなる直前まで勉強を続けていたことを知った。傍からみれば、ある意味、猛烈なワーカホリックであるが、原先生にとって学問は生きることにそのものだったように思える。知の巨人であった。私は原先生の最後の五年間、一緒に働くことができた。先日、原先生の最後の学生一九名が立派な成績で卒業した。原先生が遺したものは大きい。少しでもその遺志を継ぎたいと考えている。原先生、ありがとうございました。ご冥福を心よりお祈りいたします。

対する議論が大いに湧き起こっていた。

当時はまだインターネットで得られるコンテンツが今ほど充実していなかったこともあり、ウランバートルに赴く前にとりあえずモンゴルとアジア経済に関する日本語の資料や書籍を持つていこうと、専門書も置いてある大型書店へ出かけた。そこで、『アジア・ダイナミズム―資本主義のネットワークと発展の地域性』（一九九六年、NTT出版）を（あまり深い考えもなく、ほぼランダムに）購入したのが、原先生との最初の出会いである。

UNDPでの主な仕事は、①国有企業改革支援と②汚職防止の二つのプロジェクトの運営だった。①に関しては、冷戦終結を機に社会主義国だったモンゴルでも民主化・市場経済化の波が押し寄せ、経済移行が重要課題とされていた。また「良いガバナンス」が開発の世界で俄かに注目され始め、この文脈において民主化・市場経済化に整合的な仕組みづくりが②で模索された。しかし実際に現地で仕事を始めると、すぐに現

「地域研究者」として アジアと向き合うということ

関西大学経済学部教授 後藤健太

原洋之介先生のご著書を初めて手にしたのは、アメリカでの留学を終え、国連開発計画（UNDP）モンゴル事務所へ赴任する前に一時帰国した一九九八年の夏だった。アメリカではいわゆる「主流派」の経済学を学び、開発に関わる分野ではダニ・ロドリックやジェフリー・サックスといった人たちがその辺にいるような環境だった。この頃は、アジアが世界から注目を集めていた時期でもあった。タイに端を発するアジア通貨危機がその前年に起こっていたのである。アジアといえば、それまでは「奇跡」的な経済発展が語られてきたが、この急転回を巡ってその開発経験の評価に

実が大学院で教わった形に理路整然としていないことを思い知る。問題はあらゆるレベルで複雑に絡み合っていたし、その背景には「モンゴル固有の事情」が深いところまで根を張っているようだった。

国有企業の改革にせよ、汚職防止のシステム作りにもせよ、当時の国連機関のプロジェクトは海外の好事例をモデルにするとところからスタートすることが多かった。例えば汚職防止については、香港の強力な汚職取り締まり機関であるICACC（Independent Commission Against Corruption）の（中国返還前）組織的特徴や関連諸制度を分析し、これをベースにモンゴルの仕組みづくりを検討した。香港のICACCモデルから浮かび上がる、汚職防止に必要ないくつかの「普遍的キーポイント」を、モンゴルの行政システムに効果的に取り込んで運用する制度の設計がプロジェクトの焦点となった。ここで問題は二つあった。第一にICACCモデルから導き出される「キーポイント」が、本当に汚職防止に「普遍的」な要素なのかどうか。そし

て第二にそれをモンゴルに応用しようとした場合、その政治と経済、そしてより広い社会・文化的な構造や特質とどのように「整合的」なものにするのか（あるいはそれが可能なのか）が必ずしも明確ではない、という点である。

私が担当した仕事の多くは、事実上モンゴル人の同僚や現地ステークホルダーとの協働なしに進めることはできなかった。こうしたモンゴル人の、自国の政治や行政機構、さらには社会・経済制度とそれらに通底する文化的背景に関する知識は、（当然のことながら）私よりも正確で深く、これが様々な場面で重要となった。開発の現場では、やはり対象とする地域の理解（それが感覚的なものであったとしても）が大事なのである。しかし、それが意味のある形に形式化されるためには、なんらかの理論的枠組み（例えば経済学）に引き付けて地域の特性を相対化させるといふ知的作業、つまりある種の「対話」が必要でもある。当時、この「対話」の部分の重要性を暗黙的に実感すること

が多かったが、今にしてみればこれが「地域研究」の一つの大きな役割なのではないかと思う。

『アジア・ダイナミズム』を読んだのは、こうした点をめぐって漠然と悩んでいたころである。同書では市場メカニズムに全面的に依拠し、画一的になりがちな「ワシントン・コンセンサス」の施策に対してかなり懐疑的な見方をしており、歴史も含めた地域の固有性を考慮する必要性が書かれてあった。その後、先生の他の著作も日本から取り寄せて読んだ。いずれもアジア経済の理解には、それが埋め込まれた地域の歴史・社会・文化的なコンテキストを包括的に捉えてアプローチする必要性が説かれてあった。そこにはアジアに対する深い敬意があったし、上記の意味で地域研究的でもあった。大いに刺激を受けた。

その後、幸いなことにご縁があり、原先生には何度かお会いする機会もあった。そのいずれもが印象深い（リアルな原先生はいつも優しくユーモアにあふれ、実に印象深かった）が、特に覚えているのが二つあ

る。まずは関西大学の私の研究室まで足を運んでくださった二〇一三年の十一月。当時政策研究大学院大学（GRIPS）にいた鬼丸武士氏（現九州大学）が精力的に組織していた勉強会の一環として、原先生がその頃にお考えだったご研究関心について、私が所属する関大でご報告いただいて皆で議論する、という贅沢な企画だった。他のメンバーが集まる少し前に私の研究室で先生と何名かのメンバーで雑談をしていたのだが、その時に「後藤君にも読んでほしい」と先生の近著を二冊（『北の大地・南の列島の「農」』（二〇〇七）と『アジアの「農」・日本の「農」』（二〇一三）、わざわざ持参してくださった）を渡した。

二つ目は、私がお世話になっている大阪のアジア太平洋研究所まで、「会いたい」とわざわざ来てくださった時である。二〇一九年の五月だった。政策研究院での研究報告の依頼だった。きっかけは二〇一八年に有斐閣から上梓した『現代アジア経済論』（遠藤環・伊藤亜聖・大泉啓一郎との共編著）だった。それまで

一般的だった国別のアプローチを放棄して、「接続性」と「圧縮型発展」を前面に押し出し、アジアの地域横断的なイシューをベースに編集・執筆した。これをお読みになり「触発された。後藤君たちのような世代のアジア研究者が考えていることを聞きたい」とおっしゃっていたのである。そして翌月に政策研究院で報告をしたのが、先生にお会いする最後の機会となつてしまった。

この追悼文を書くにあたり、二〇年以上前にモンゴルで読んだ原先生の本の頁を再度めぐってみた。時代は変わり、アジアが直面する課題も様変わりした。しかし先生が常に意識されていた、地域の固有性を包括的にとらえる必要性、その文脈を大事にしながらアジアとの対話が続ける重要性は、今も変わらない。地域研究者として、今後とも肝に銘じておきたい。

原先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

原先生との十数年を振り返って

政策研究大学院大学 教育支援課教育プログラム室長

近藤留美

原先生との出会いは、十数年前に当時所属していた特定非営利活動法人アジアシードのプロジェクトになります。著名な東京大学教授ということで、緊張の初めにお会いした時は、小柄な体から発せられる膨大なエネルギー量に圧倒され、勝手に想像していた「東大教授」のイメージとはかけ離れているようについて、いやこの強烈な個性は研究者以外ではあり得ない、と思ったことを覚えています。

アジアシードでは、原先生と一緒に東南アジアの様々なプロジェクトに携わりました。日本と東南アジアの政治家が、毎年夏休みに絡めて集まり交流すると

いう事業では、東南アジアの政治経済にかかる多岐に

わたる諸問題につき、有識者として現役政治家と熱心に議論を交わす一方で、会議が終わると同行されていたご夫人と仲睦まじく過ごされ、嬉しそうにお子さんの仕事のお話しをされていたのが印象に残っております。またベトナムに出張に行ったときには、船のレストランでイカフライと一緒に食べたことを鮮明に覚えていきます。なぜ覚えているかといえますと、先生がイカをリクエストされたにも関わらず一口しか召し上げられず、あとはビールをずっと飲まれていたため、私が残りのイカフライを大量に食べる羽目になったからです。その後も何度か食事をご一緒しましたが、ほとんど食べ物を取取されているところをみたことがなく、活動量に見合わない燃料の量に、先生のお体は一体何をエネルギー源としているのだろうと、よく不思議に思っていました（タバコだな、と結論付けるところまでがセットです）。

その後転職した政策研究大学院大学でも、原先生は

インドネシアの教育プログラムのディレクターとして活躍されており、思いがけず長いお付き合いとなりました。インドネシアの教育プログラムでは、学生からは「日本の父」のように慕われていたようです。そういえば、最後となつてしまった科目の授業アンケートで“Professor Hara is very good and cute.”と回答していた学生がいましたが、原先生の感想をお聞きすることが出来なかったのが悔やまれます。

大学の運営事務局では、誰も一度も見なかったことのない幻の教員も多くなりますが、そのような中で原先生は頻繁に事務局まで足を運んでくださる、フットワークの軽い気さくでマメな先生でもありました。周りがつられて笑ってしまうような大きな笑い声と温かいお人柄で、学生だけでなく、事務職員からも慕われていました。あまりにも急なお別れとなつてしまい残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

道具を場所に引き戻す

東京大学東洋文化研究所 教授

佐藤 仁

一九九二年の秋だった。当時大学四年生だった私はかつて原洋之介先生の職場であった東京大学東洋文化研究所七階に位置する汎アジア部門室で、開発経済論の授業を受けるべく、担当教員の原先生の登場を待っていた。この授業をとろうと思ったのは、原先生の『クリフォード・ギアツの経済学』（リプロポート、一九八五年）を愛読していたからである。大学院に進学して開発問題を勉強したいと思っていた私は、「スコット・ポプキン論争」と呼ばれた東南アジア農民の合理性をめぐる原先生の鮮やかな整理に刺激され、西欧近代の「普遍性」を発展途上国の「個別事例」から問

い直す方法を模索していた。

定刻より少し遅れて原先生が現れる。手には、鉄瓶のようにずしりとした灰皿をぶら下げ、ゼミのテキストで翻訳出版されたばかりのヤーノシユ・コルナイ著『資本主義の大転換』（日本経済新聞社、一九九二年）を脇に挟んでの登場である。経済理論そのものよりも、それが生み出される文脈、それが適用される対象の特殊性に注意を払うのが原先生のエコノミクスである。コルナイの著書はアジアに関するものではなく、計画経済がいかにして市場経済に移行するか、という東欧の研究である。しかし、歴史と文化という固有の初期条件を重んじる点で、コルナイと原先生の考え方は共鳴していた。

講義に熱が入ってくると、原先生は持参した灰皿を体の近くに引き寄せ、おもむろにタバコに火をつけて、おいしそうに一服する。私が学生だった一九八〇年代後半から九〇年代前半は、教室でタバコをくゆらせながら授業する先生は珍しくなかった。教室に煙を

吐き出す先生の所作には、現場と学問を架橋している人にしか出せないと感じさせるほどの独特のカッコよさがあった。

原先生と初めて出会った大学四年の時期の私は進路に悩んでいた。そして、しっかりとしたフィールド体験と現地語の習得が開発のキャリアに不可欠であると自分なりに結論し、大学院への進学を決意した。原先生はかつてバンコクの国際機関に向向されており、タイの大学に知古が多かったのは私にとって幸いした。大学三年次の夏休みをタイの農村で過ごした私は、長期でフィールドワークをするならタイと決めていたからである。原先生には、バンコクにあるカセサート大学にビザを出してもらうための推薦状を執筆していただいた。そして、その後二年近くに及ぶタイ留学の成果を博士論文としてまとめた私は、迷うことなく副査の一人に原先生をお願いした。

タイ中西部奥地の人々がどのように森に依存しているのかをテーマにした私の研究で、原先生に特に関心先生の編著に収められることで追い風を受け、その後の私のキャリアを切り開く糸口になった。

をもっていただいたのは理論や主張ではなく、データの集め方であった。私は村人が森に依存する度合いを測る方法として、彼らの食べるものに注目し、何人かの村人に食事の記録をつけてもらった。その際、読み書きのできない村人にも調査を手伝ってもらえるように「森のおかず」をイラストにしてみたのだった。原先生はイラストの中でも特に「トカゲ」を気に入ってくださり、「トカゲが立ちあがっているのが面白いね」と審査会の場で冗談交じりのコメントを返し、緊張した場の雰囲気や和ませてくれた。

博士論文提出後まもなく、その成果の一部を原先生が編集委員を務めていた「開発と文化」シリーズの第五巻『地球の環境と開発』（岩波書店、一九九八年）に収めていただく光栄にあずかった。ちなみに、この本のもう一人の編者である川田順造先生も駆け出しの大学院生だった私を励まし、かわいがってくださった恩人である。ともかく、「豊かな森と貧しい人々」と題して世に送り出された私の初めての公刊論文は、原

例えば、一九九八年にジェームズ・スコット教授を慕って一年間、イェール大学に赴いたのも、原先生の著書を通じてスコットの仕事に触れていたからである。専門分野を決めきれなかった私が経済学に傾きかけたときは、ケンブリッジ大学のパーサー・ダズグプタ教授の下で学んではどうかとお勧めいただいたこともあった。結局、経済学の道を進まなかった自分が、まさか二〇年後に原先生の後任として、東洋文化研究所に着任する日がこようとは。こうして自分の過去三〇年の歩みを振り返れば、原先生の手のひらから飛び出すどころか、見事その中に納まった経歴を歩んできたことがはっきりわかる。

東洋文化研究所に着任して一〇年が経過し、東文研がすっかりホームに感じられるようになっていた二〇二一年三月、私は学生とおこなっているオンライン読書会でコルナイの自叙伝 *By Force of Thought*（邦訳

『コルナイ・ヤーノシユ自伝―思索する力を得て』日本評論社、二〇〇六年）を紹介しようと思いい立った。奇しくも原先生がお亡くなりになる前月である。母国ハンガリーに深い根をもちながら、米国でも活躍したコルナイの半生を描いた本書は、大学における優秀な研究人材のリクルート方法から、外国人として英語で論文を書く意味に至るまで、目から鱗の自叙伝である。このタイミングでなぜこの本を想起したのかは自分でも分からない。しかし、はつきりしているのは、あの時に原先生の授業をとっていなければ、コルナイの名前すら知ることにはなかったということだ。コルナイも原先生も、経済学の主流にいたわけではなく、むしろ進んで傍流にあらうとした研究者である。原先生には支配的な考え方と距離をとり、自分なりに考えることの大切さを教わった。いや、それを教わったのだと悟ったのは、この文章を書いているときであった。

改装前の山上会館大会議室で行われた原先生の東京大学最終講義は個性的だった。これまでご自身が書か

れた著作の「あとがき」を順に紹介しながら、それにコメントをつけるのである。原先生の「あとがき」には、自分がその本を書くこうと思った素直な心の働きが表現されている。そこに一貫しているのは、「普遍」を強調する新古典派経済学の伝統にアジアの現場から疑問を呈し、普遍と特殊の対話を試みる姿勢である。日本とアジアという自分の立っている場所に、自分の使う分析道具（＝経済学）を引き戻す努力を最後まで続けた人であった。

原洋之介先生の エリア・エコノミックスに思いを寄せて

拓殖大学国際学部 准教授

椎野幸平

原洋之介先生のご講義は、いつも熱気に包まれていました。原先生との出会いは、国際開発センターの開発エコノミストコースでご講義を受けたことがはじまりです。当時、日本貿易振興機構（ジェトロ）に勤務していた私は、一年間勉強する機会を与えられ、様々な出身母体の一〇名の同級生とともに、原先生をはじめめとする多くの先生方のご講義を受講させて頂いていました。時代はアジア興隆の一九九六年、経済学、そしてアジアを勉強する日々でした。

原先生のご講義は、学生との議論を通じながら、経

済学、アジアの世界観を広げていくというスタイルです。深い経済学への知見に基づくとともに、多様なアジアの世界を独自の視点で語られるその内容に強く惹きつけられたことを鮮明に覚えています。そして、アジア経済における政府の役割、多様な経済発展経路にも触れ、新古典派批判を存分に展開されていました。

原先生の世界観は、複雑で容易に語ることはできませんが、経済学と地域研究の融合にその中心があったと理解しています。一九九九年に出版された『エリア・エコノミックス アジア経済のトポロジー』の冒頭で、原先生は「経済学とは、地域研究と最も縁遠い社会科学である。こうアジア研究者は断言している。（中略）地域研究 Area Studies と親近性を持つ経済学も存在しているのだ。それをエリア・エコノミックス Area Economics と名（けい）つ」と提唱されています。深い経済学への造詣とともに、地域の歴史・固有性に原先生の関心が強く照射され、独自の世界観を生み出されていました。

また、開発エコノミストコースの修了論文(三名による共同論文)で、原先生にご指導を受ける機会に恵まれたことは、私にとり大きな経験でありました。論文のテーマに悩み、指導教官であった原先生に相談をさせて頂く中、どうもタイ経済の様子がおかしいというところで、タイ経済を金融自由化とマクロ経済の安定という視点から分析する方向に導いて頂きました。いわゆる国際金融のトリレンマをタイに当てはめて分析したものです。

その後、調べれば調べる程、タイ経済がトリレンマのマグマを貯めていることを理解し、没頭して調べていったことを思い出します。原先生のご指導のもと、タイにおける通貨危機リスクや途上国における金融自由化の是非を論じた論文を提出し、同コースを修了できたことは、貴重な学びでありました。原先生は、なぜタイが国際的な資本移動を自由化する一方、実質的な固定相場制をそこまで維持しようとしたのか、その要因として政治的影響力の強い商業銀行の存在とともに

に、輸入財に依存する軍の存在など、タイが抱える要因にも議論を展開されていきます。その後、タイで通貨危機が発生し、若干の驚きとともに、経済学を用いて分析を行うこと、政策を論じることの意義を実感させて頂きました。原先生の深いご指導のもとで書いたこの論文を通じて、アジアをフィールドとする調査・研究の世界へと導いて頂いたと感じています。

また、タイのリスクは指摘する一方、インドネシアはマクロ経済が安定していたため、通貨危機リスクは低いと認識していたのですが、アジア全体で逆流する資本流出とともにスハルト政権崩壊によって通貨危機が増幅され、経済とともに政治を理解することの重要性を実感したことも学びでありました。

開発エコノミストコースには海外研修もあり、原先生とベトナムにご一緒させて頂きました。訪問中はベトナム政府、企業訪問などをしましたが、原先生がいらっしゃると不思議に場が和み、自由な議論ができる雰囲気になったことを思い出します。

そして、原先生との思い出は、「課外」でも多くあります。授業後に、国際開発センターのあった門前仲町や本郷三丁目で、ご一緒させて頂いたことは良き思い出です。その後、原先生は東京大学東洋文化研究所所長にご就任され、またご著書の執筆で、多忙を極めるようになられたのですが、その前に多くの時間を一緒に過ごさせて頂いたことは何よりの思い出です。同コース修了後も、原先生を囲む会を開きながら、二五年の月日が経っていました。

原先生には、二〇一七年に私自身が大学に移り、新たな場で戸惑う中、ご相談を申し上げ、温かいアドバイスを頂いていました。二〇一九年から原先生のご研究のお手伝いをさせて頂く機会を頂戴したことも本当に感謝の思いでいます。原先生からは、「椎野君、大学にいったら、あまり細かいことは気にしないことだ」と、自分の進むべき道を大事にきなさいと言われる思いでいます。

原先生には、まだまだご指導頂きたいことが沢山あ

りました。突然のご逝去に呆然とする思い出でしたが、原先生のご指導をこれからも大切にしながら、歩んでいきたいと思えます。多くの方から愛された原先生之介先生の心からのご冥福をお祈りするとともに、これまでのお導きに尽くせぬ感謝の思いを込めて。

原洋之介先生との思い出

政策研究大学院大学

篠田邦彦

「沖縄の泡盛の作り手がラオスで技術指導したら美味しい焼酎ができる。これは、ラオスへのいい経済支援策になると思わないか、ハハハ・・・」これが二〇〇〇年代前半に初めてタイのバンコクでお会いして夕

食をともした時に記憶に残っている原洋之介先生のお言葉です。今から思い返すと、農業経済学を出発点にアジア研究の道を極められ、新興国でのフィールドワークや政策支援を重視し、プライベートでお酒や友人との交流をこよなく愛した原先生らしいアイデアであったと思います。

当時、私自身は経済産業省から海外貿易開発協会（JODC）バンコク事務所に出向して日ASEAN協力の仕事に携わっており、大辻義弘JERTROバンコク所長（現政策研究大学院大学客員教授）から原先生を紹介していただきました。原先生は、JICAが進めるラオスへの経済政策支援プロジェクトを率いておられた関係でバンコクを訪問されていたと記憶しております。

夕食会席で原先生は、人懐っこい笑顔をたたえながらラオスでの経済政策支援やアジアでのフィールドワークの現場での苦労話をされるとともに、当時私が関わっていた日本とASEANの産業協力や経済連携協

定の現場の話についても熱心に質問をされていました。お酒が進むほどに、気持ちよく酔い、呵々大笑される原先生のお姿がとても印象的でした。このバンコクでの出会いが、原先生との交流が始まるきっかけとなりました。

その後、大辻所長から教えていただき、原先生の「アジア・ダイナミズム／資本主義のネットワークと発展の地域性」、 「グローバルイズムの終宴／アジア危機と再生を読み解く三つの時間軸」といった著作を読みました。また、自分自身、二〇〇五年に日本に帰国してFTA/EPAやAPECの仕事を担当するようになってから、原先生がお書きになられた「東アジア経済戦略／文明の中の経済という視点から」で勉強させていただきました。

原先生は、自らの著作の中でアジア経済の課題や展望を論じる際に、単に経済だけでなく社会や文化など様々な切り口から分析をされ、また、ラオス、タイ、インドネシアなどそれぞれの国に固有の経済・社会構

造の違いに目を向けられ、さらには、各国の経済発展プロセスを長期の歴史的視点から俯瞰されています。行政官としてアジア関係の政策現場で、ASEANとの国際会議での成果づくりのため、日々「切った張った」の仕事をしていた自分にとって大きな刺激となり、また、政策的な示唆を与えていただきました。

さらに、一〇年以上の時が流れ、二〇一九年に政策研究大学院大学に出向する機会を得ました。大学では、特にアジア経済やインド太平洋協力に関する研究や教育を担当することとなりましたが、原先生の主宰するアジア研究に参加させていただいたことは、自分自身にとって、アジア経済に関する研究を深めていく大きなきっかけとなりました。

原先生は、一年以上にわたる研究会の活動において、四〇代から五〇代で我が国のアジア経済研究の中心を担う研究者の方々の多岐にわたる分野での報告をもとに、ご自身でアジア研究の成果を「21世紀のアジア経済をどう捉えるか」、「日本経済の150年」、「東

南アジア経済の50年」、「中国経済の50年」、「インド経済の70年」という論文にとりまとめられ、今後、政策研究院では今後その書籍化を進めていく予定です。その最初の論文の冒頭で、原先生ご自身が、一九九六年に「アジア・ダイナミズム」を書かれた時点で、工業化メカニズムの変貌により、日本の雁行形態論的工業化モデルのアジア経済分析への妥当性に問いを投げかけるとともに、コンピュータ技術の飛躍的な技術革新によるアジア経済の情報化の急速な進展について指摘されていました。

原先生が二〇世紀末に二〇年後のアジア経済の未来を見通されていたことに触発され、今後のアジア研究では、原先生が活躍を期待している四〇代から五〇代のアジア研究者の方々とともに、米中対立などの国際秩序の変化、パンデミック・気候変動などの地球規模課題、デジタル経済・社会の拡大、分配・格差問題の顕在化などを考慮に入れたアジア経済の将来の展望や政策提言をまとめていくことができたいと思います。

また、原先生と政策研究大学院大学の教育の現場で、ほんの少しでしたが、ご一緒することができたことも貴重な機会となりました。原先生は政策研究大学院大学で Economics, Planning and Public Policy Program (EPP) というインドネシア中央政府・地方自治体の行政官向けの教育プログラムのディレクターを務められていたほか、アジアを中心とする留学生向けの講義を担当されていました。特にEPPプログラムでは過去一五年近くの間にも三〇〇名近くの留学生を受け入れ、アジアの経済や産業の発展プロセスについて、歴史的な視点を交えながら講義を行うとともに、留学生の研究論文の指導をされていました。

原先生がよくおしゃっていたのは、これだけ長い期間にわたり、インドネシアの中央・地方政府の様々な機関から派遣されてきた留学生の研究論文を読み進めると、インドネシアが二〇世紀後半から二一世紀にかけて、その時々でどのような経済・社会面での課題に直面し、行政官が国造りのためにどう悩んでいるのか

よくわかり、原先生がアジア研究を進める上でも大きな刺激になったということです。また、留学生との個人的な交流もとても大事にされ、多くの留学生からの相談にも親身になって答え、外国に出張に行くとき原先生を慕う昔の教え子たちが寄ってくるという話もよく伺いました。

自分自身、原先生がお亡くなりになる直前に原先生・大辻先生の講義に参加して、東アジア経済統合の歴史や展望について説明する機会をいただきました。また、その後、EPPプログラムを継続実施するため、原先生や工藤年博先生とともにインドネシアとの人材育成円借款の次期フェーズへの移行についてJICAにも相談に参りました。こうした経緯もあり、政策研究大学院大学でのアジアからの留学プログラムの継続的な実施に向けて、今後も微力ながらお手伝いをしていただければと思います。

このように原先生とのタイでの出会い、また、政策研究大学院大学で受けた御指導は、自分がアジアに関

する研究や教育を進めていく上で大きな道標となりました。原先生から受けた御恩に感謝するとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

原洋之介先生と政策研究院

——「アジア研究」に寄せて

政策研究院 事務局

柴田暖子

二〇二〇年初めから急激に世界各地へ広がる新型コロナウイルス感染症は、現在も勢いが衰えることなく、人びとの生命や生活を脅かし続けている。政策研究大学院大学（GRIPS）は二〇二〇年四月から六月初めまで閉鎖され、授業や会議はオンラインでおこ

なわれるようになった。六月の再開を迎えてからも、事務職員は職場に密集しないように交代で出勤するようになり、出勤しない日はテレワークとなった。それと並行して、わたしが所属する政策研究院（GRIPS Alliance）も、毎月定例でおこなわれている参議会を三月から五月にかけて開催を見送った。政策研究院の創設準備室時代から数えて九年間の歴史において、これは異例の事態であった。現在も政策研究院の会議や研究会は原則としてオンラインでおこなっているという状況である。

原先生の訃報が入ったのは、オンライン会議やテレワークなどの導入から一年が経過し、いわゆる「新しい生活様式」に少しばかり慣れた頃の、ちょうど新年度が始まる四月最初の土曜夜のことだった。同僚から「篠田先生から研究院の皆さん宛てにメールが入っているのをたまたま見たのですが、急いでご連絡する先があるかと思いましたので、転送します」と、わたしの携帯電話のメールに着信があり、訃報を知ったのである。

俄かには信じ難いことだった。三月一六日に「アジア研究」の研究会を開催し、年度末までに報告書を完成させるために奔走されていて、三月三〇日には政策研究院所属の参与やシニア・フェローが集う会議「参与会」にもオンラインで出席されていた。オンライン上で拝見する限り、いつもどおりの原先生であった。三月三一日に出勤簿の確認でメールを差し上げて、そのお返事を翌四月一日の金曜日いただいた。それが原先生との最後のやりとりとなった。

原先生がGRIPSに着任されたのは、「Economics, Planning and Public Policy Program (EPP)」通称「インドネシア・プログラム」が本格的にスタートしたときだったが、わたしが原先生とよくやりとりをさせていたかどうかになったのは、先生が政策研究院の所属となった二〇一七年からのことである。GRIPSを定年退職されてからも教育と研究にご熱心で、政策研究院の会議や研究会では、研究者のほか、現役とOBの行政官や民間企業の要職にある方がたに

心を大きく集めてきた一方で、研究者ではない方に向けて原先生ご自身が目指したいものをどう説明し納得していただくか、ご苦労されている様子がたびたび感じられた。

原先生には同じく政策研究院でおこなわれた「国立大学問題」や「学術政策」に関する研究会にもぜひぶんご協力をいただいた。あまり知られていない歴史的な背景や東京大学にご勤務されていた時代のご経験に立脚して鋭いコメントを発するご様子を拝見し、「学者とはかくあるべし」と言わしめる知識の幅と深さに驚嘆したものである。しかし、そのような原先生が各会議で「アジア研究」についてご説明されている際の（わたしにみえてくる）ご苦労は、二〇〇〇年以降に顕著になってきた国立大学や学者・研究者が多方面にわたって直面している困難な状況と折り重なってみえた。原先生は研究者として地道に真摯に東南アジアというフィールドを通してえたご知見がゆるぎない土台となっているからこそ、「アジア研究」もぶれること

混じり、研究者として長年フィールドワークの対象地域とされている東南アジアで得られたご知見や、東京大学東洋文化研究所の運営と東京大学総長補佐などのご経験をともに、はっとするようなご意見をおっしゃっていた印象が強い。原先生のお子さんぐらいの年齢にすぎない一事務職員の立場でこのようなことを申し上げるのは大変失礼ではあるが、原先生は気さくで親しみやすい風貌で、少々早口だが、おっしゃるご意見やコメントは重みを感じさせるものだった。GRIPS創設者で名誉学長の吉村融先生は「原さんはすごい」とよく言われていたが、「でも、あの外見としゃべり方で損をしている」ともおっしゃっていた。そのことは、ある日の会議で「アジア研究」の進捗状況について原先生がご報告される際、会議直前に開始時間をわたしに確認されて「ほく、気が弱いから！ハハハ！」と言われて会場に入られ、早口になりながら懸命に説明をされていたご様子からも伺えた。「アジア研究」が政策研究院の他のメンバーや会議出席者の関

なく原先生なりの方法で、地道に進めてこられたのではないかと思う。それが二〇二一年三月末にまとめられた『アジア研究会報告書』である。この報告書が本として世に出されることを心からお慶び申し上げる。本書によって原先生は東南アジアに関心をもつ方がただでなく、幅広い層に今後も影響を与えていくのだろう。原先生のご冥福をお祈り申し上げる。

原先生の国際協力

立命館大学国際関係学部 教授

嶋田晴行

原先生とODA事業

周知のように原先生は多くの論文、書籍を執筆さ

れ、筆者もまた学生時代からそれらを読んでアジアや開発経済学について学んできた。その原先生は一九九〇年代半ばから、日本政府が実施する開発途上国への支援事業（政府開発援助（ODA）事業）にも関わってこられた。ODA事業といえば、一般の人々が頭に浮かべるのは道路、港湾、空港といったインフラ建設あるいは海外協力隊派遣といったヒトを派遣する支援かもしれない。もちろん原先生が関わって来られたのは、そのような分野ではない。開発途上国が経済社会発展を目指す上での政策や計画造りを支援する、あるいはそのようなことができるようになる人材を育てるといった「ソフト」な支援事業である。

ラオスへの協力

筆者は一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代はじめにかけて、JICA（国際協力機構）の職員として、当時、社会主義経済から市場経済への移行の只中にあつたベトナム、ラオスの経済政策支援を担当し、原先生

と何度も現地を訪問する機会があつた。特に、ラオス政府向けに実施された支援では、その中心にあつた先生と二〜三ヶ月に一度は現地へ行く機会をえた。

原先生が中心のプロジェクトは、そのまとも方も原先生らしいものであつた。もちろんプロジェクトの大枠は原先生も交えた日本側とラオス側とが合意し、その計画に則って協力はおこなわれた。ただ、原先生の人選による研究者十名以上から構成される日本側チームは、よく言えば「自由に」、言葉を選ばなければ「野放し」で各研究者の関心に沿って活動していた（参加した研究者はもつと自由に動きたかつたかもしれない）。

それは先生がたまに口にしていた、「組織を動かす場合、最初の人事が肝心。そこを決めたら後は各自に任せるものだ」という言葉どおりのものであつた。モニタリング、評価といったチェックが今ほど厳しい時代では無かつたこともあるが、多少でも組織を動かす身になれば理解できるように、それはなかなかできる

ことではない。

そんな原先生自身の現地での行動は、公式な協議は必要最低限にし（実務は事務方が処理していたのだが）、大臣レベルからそこら辺にいる若手スタッフとの対話（側で見ている限りはまったくの雑談）、あるいは現地に長く滞在する日本人との会話に時間が割かれていた。また、機会があれば首都近郊や地方にまで足を伸ばし、ラオスをさまざまな角度から見ようと、感じようとされていた。

成果が「目に見えにくい」支援は、関係者以外どころか関係者でも何をやっているのかわかりにくい。そんな中、原先生は、結局は緩やかな信頼関係と相手の置かれた状況を互いに理解せずにはその「目に見えない」協力はうまくいかないと考えられていたのだろうと思う。もちろん、あの人懐っこい笑顔と豪快な笑いが、さらに相手を引きつけ引き込むことにもなつていたのである。

ミャンマーへ

その当時、筆者はミャンマーも担当し、折に触れてミャンマーの状況も原先生へお話ししていた。そもそも原先生はミャンマー（当時ビルマ）へも大きな関心を持たれていたが、一九八〇年代に政権を批判する文章を日本の出版物（どんなものか一度見ただけなので筆者は正確には覚えていないが、それほど厳しい批判でもなかつたと記憶している）へ寄稿したことで入国ビザ発給を拒否された。それ以来、研究対象としても訪問先としてもミャンマーと距離を置かれていた（向こうから「来るな」と言われていただけだが）という。

「ビルマへもう一度へ行つてみたい」と、ことあるごとに言われることが私の中に残り、ダメ元で現地での講演会を企画しビザを申請したところ、思いがけずOKが出た。先生は大変に喜ばれていた。ヤンゴンでの講演会は、興奮のあまりか素面にもかかわらず話が支離滅裂だった記憶があるが、とにかくヤンゴン滞

在中は昔を懐かしみ、ずっと喜んでおられた。その後のミャンマーの変化、そして昨今の混乱を原先生はどのように見るのだろうか？

ここで述べたようなプロジェクトも活動も、今ではなかなかできないことかもしれない。ただ、あまり成果、評価とあくせくせず、腰を落ち着けて相手と向き合うような協力があっても悪くはないと思う。そうでなければできないことはたくさんある。でも、原先生のような存在無しでは、それはなかなか難しいことなのかもしれない。

原洋之介先生追悼 アウンサンスーチー邸の伝説

法政大学名誉教授

下村恭民

「知らん。ワツハツハツハ」

信じられないことですが、原先生のあの豪快な笑い声を、もう聞くことはできないのです。

長くお付き合いをいただきましたが、今でも記憶に残るのは、一九九〇年代半ばのベトナム北部の農村地帯の一日です。紅河の高い堤防を遠く眺めながら、こぼこ道を年代物の車で走り回りました。あちこちで、きわめて素朴で古典的な農作業を目にしました。特に原先生を興奮させたのは、木組みの矢倉で足漕ぎして水を水田に取り入れる光景で（疎開していた山形

県の農村でも見た記憶がありますが）、これが如何に古い歴史をもつ貴重な「農の知」であるかを、熱をこめて教えていただきました。

ただ、目的の農村にたどり着く前に、党の地区委員会への表敬が必要でした。質素なオフィスに一点豪華な螺鈿の椅子に座った書記の、長い演説（われわれに分かるのは「ハッチェン（発展）」だけ）を拝聴するうちに、原先生が深い眠りに入ってしまった、はらはらしたことを思い出します。

それより少し前のことですが、ある敏腕の編集者のSさんと雑談していたら、「スーチーさんの宮澤密書の話を知ってるでしょう」と言われました。『フォー・イースタン・エコノミック・レビュー』誌の小さな記事を見た記憶がありました。自宅軟禁されていたアウンサンスーチー女史の邸宅を、夜陰に紛れてミャンマー人に変装した二名の「日本政府の密使」が訪れた話です。誰もいないと思われた暗闇から躍り出た秘密警察にたちまち拘束され、翌朝一番の便でバンコ

クに追放されたのですが、密使が林義郎蔵相の密書を携行していたと報じられました。その後、話が大きくなって宮澤首相の密使になったのだと想像します。

「あれは原洋之介だよ」とSさんはこともなげに言いました。驚くとともに、原先生のロンジー姿はお似合いだなと感じました。真偽を確かめたいと思いつながら機会がないままでしたが、聞かなくとも答えは分かっているのです。

「知らん。ワツハツハツハ」

原さんと出会った頃

政策研究院チーフ・エグゼクティブ・ディレクター

白石 隆

私をはじめて原洋之介さんに会ったのは一九七五年の連休明けだったと記憶している。私はこの年の四月に東京大学東洋文化研究所の助手になったが、ある日突然、「きみが白石君か」と言っていて、原さんが研究室に入ってきた。原さんはそのあとバンコクに本部のあるESCAP（国際連合アジア太平洋経済社会委員会）に出向し、私もコーネルの大学院に行った。そのため原さんと親しくなったのは帰国したあと、一九七八年のことだったと思う。

そのとき原さんは東洋文化研究所の助教授になっていたと思う。私はまだ助手だったが、翌年、駒場の教

養学科国際関係論分科の助教授になった。東洋文化研究所ではその頃、毎週だったか、隔週だったか、木曜に教授会と研究会があり、木曜には「教官」が全員集合した。私は助手だから教授会にはもちろん出席しなかった。研究会にもほとんど出席しなかった。それでもいったのは、五時以降、近くの雀荘で麻雀会があったためである。駒場に移ったあと、一九八二年にコーネル大学に行くまで、日本にいる限り、毎週、いった。メンバーの中に几帳面な人がいて、一年に涉って成績をつけ、忘年会の頃に、今年も雀荘が一番勝ったな、と総括するのが常だった。原さんは毎年、かなりマイナスに沈んでいた。すぐ降りるという印象だった。

原さんの人柄は麻雀で知った。一方、原さんの知的関心を理解するようになったのは、斎藤修さんと原さんが中心になって池袋にあったリプロボートのオフイスで月一回開催された「リプロ研」に誘われたのがきっかけだった。リプロボートには早山隆邦さんが編集

者でいて、原さん、早山さん、斎藤さんの誘いで、大西健夫さん、川勝平太さん、濱下武志さんなども常連メンバーとなった。

この研究会は楽しかった。上に名前を挙げた人たちの業績を思い出せば明らかであるが、斎藤さん、大西さん、川勝さんは経済史の専門で、欧州と日本の比較史に関心をもっていた。濱下さんは「朝貢貿易システム」の提唱者で、ニューヨーク大学ビンガムトン校を拠点とするウォラースタイン、アリギ、セルダンなど、世界システム論の人たちと親しかった。東南アジアの政治・政治史を専門としたのは私だけだった。したがって、本来、私にはあまり居心地の良くない研究会になっても不思議ないのだが、実際には、毎月土曜の研究会とそのあとの飲み会は楽しみだった。研究会での報告をベースにまとめた論文も少なくない。

いま、あらためて振り返ってみると、これは早山さんの人柄と本作りのうまさ、比較経済史についての斎藤さんの広さと深さ、原さんの守備範囲の広さによる

ところが大きかったと思う。原さんは経済学をベースに、経済史から地域研究まで、広く本を読んでいた。経済学者の○○はこういうタイトルの論文でこんなことを言っているという例の口調で、議論を経済学、経済史の文脈に位置付け、どこでどんなフィールド・ワークをしたのか、実は知らないのだが、東南アジア、特にタイについて土地勘があった。そのため、原さんは自分の専門分野の文献をきちんとフォローし、フィールドで考え、自分の問いを見つけ、また自分の専門に戻って考える、そういうあたりまえの作業をするともに、アジアについて専門を大きく超えて広く読んでいた。それがかれの知的幅を広げ、専門外の研究者についても理解があった理由と思う。

原さんの思い

東京大学名誉教授

鈴木 董

原洋之介さんの突然の訃報に接し、呆然とするとともに、心からの哀悼の意を表したい。

原さんは、私より三才年上の昭和一九年のお生まれで、十千十二支では「さる年」であったと記憶している。しかし、一九八三年四月に助教授として着任した私にとって、東京大学東洋文化研究所のスタッフとしては、原さんは助手も経験しておられ、在任年数からいっても大先輩であった。

私の着任当時、所長であられ、「西アジア政治経済」運営単位を創設されてその初代教授となられ、私を自らの運営単位の初代助教授として招いてくださった大

野盛雄先生の御示唆もあり、私としても同僚となられる方々の圧倒的多数がこれまでで存じ上げない方で早くお近づきになりたいとの思いもあって、非公式の研究会として「若手の会」を始めたときには、原さんは何かと親身に助言して下さった。そして研究会では、いろいろと鋭い質疑を展開され、鋭い頭脳の方との強い印象をもった。

その後も、いくつかの研究会にお誘い下さり、現在は「書籍工房早山」を創業され出版事業にあたっておられ、当時は出版社リポーターにおられた早山隆邦さんを世話役とする「リプロ研」に誘って下さったのも原さんであった。

これらの研究会で知的刺激を受けること大であったが、原さんは、とりわけ「東文研」の「若手の会」に際しては、二次会、そして三次会も主導され、益々の談論風発ぶりを発揮されていた。

「東文研」そのものの運営についても常々尽力され、おおむねは円滑運営に努めておられたが、ときには驚

くような大胆な決断も下された。

原さんとは、「イスラムの都市性」プロジェクトに関連して中東出張に同行したことも思い出深い。まずは厳格なイスラム主義で知られるワッハーブ派を奉ずるサウディ・アラビアの首都リヤドに赴いたが、飲酒一切禁止のリヤドで、酒を愛される原さんは大丈夫かと心配だったが、驚くほどの適応力を示された。しかし、飲酒できるエジプトのカイロ、アレクサンドリアでは、すっかりくつろいだ気分であられたようであった。

この出張で思い出すのは、リヤドからカイロに飛ぼうとしたとき、イスラムの巡礼月前後であったため、カイロ便の航空券がなかなかとれず、クウエイトからならカイロ便がとれそうだといいことで、陸路クウエイトに赴かねばならぬかもしれないとの状況に陥った。しかし、幸いリヤドからカイロに飛ぶことを得た。もともと、我々がカイロに飛んでからいくばくもなく、イラクのフセイン大統領のクウエイト侵攻が始まり、

もしあの時、クウエイトに赴いていたら、イラク侵攻直前のクウエイトを体験できたのにと語りあったことであった。

原さんには、中東にも関心をもって頂けたようではあったが、やはり関心の中心は東南アジアにあったのであろう。東南アジアの政治経済について、多くの問題提起的論考を発表され、これからも得るところ少なからざるものがあつたのは確かである。ただ、原さんは、現地密着型の実証主義者というよりは、やはり元来のデイシプリンである経済学の知見をふまえた理論家であったのではなからうか。

世界情勢、ひいてはアジア情勢が激動する今日、東南アジアから、さらにアジア全体に視野を拡げ、アジア情勢を新たな視点から見直そうとされている。さ中に急逝されたことには、惜しんでも余りあるものがある。

ここに改めて、「東文研」すなわち東京大学東洋文化研究所における良き先輩、なつかしい同僚であった

原洋之介さんの急逝を心から悲しむとともに深甚なる哀悼の意を表したい。

原先生に感謝を込めて

アジア経済研究所

ケオラ・スックニラン

令和三年四月三日に原先生が永眠されました。心よりお悔やみ申し上げます。原先生との出会いは、二〇〇〇年から二〇〇五年にかけて国際協力機構（JICA）がラオス政府に対して実施した Macroeconomic Policy Support for Social-Economic Development in the Lao PDR (MAPS) 事業に通訳・研究員として参加した、二〇年ほど前のことです。それ以来、当事業

のラオス側カウンターパートであったトンルン現ラオス国家主席を始め、数多くの原先生とラオス政府要人との会談に通訳として参加する貴重な機会がありました。この間、学問だけではなく実践としての経済開発について、原先生の尊い教えを賜ることができました。門下生と名乗る資格はありませんが、ここでは、原先生とラオスとの関わりを最前列から拝見した一ラオス人として、感謝の気持ちを込めて振り返り、その上で、先生よりいただいたご教示を魂に刻み、ご高恩に応えていくことを固く心に誓う追悼の意を書かせていただきます。

原先生がMAPSの一環として、ラオスの要人との会談の際によく取り上げる昔話は、一九七〇年半ばに国際連合アジア太平洋経済社会委員会専門家としてラオスの隣国タイを訪問され、首都ビエンチャンをメコン河対岸から眺められたエピソードです。そしていつも、当時ほとんど真っ暗だったラオス側は二〇〇〇年代始めにはタイ側と変わらない明かりがあり、二五年

来て」とメールをいただく度にお伺いしたのは、原先生の研究室のほか、財団や企業の会議室、時には出版社もありました。今思えば、普段お目にかかれない著名な先生を紹介して下さったり、雑談をしながら研究テーマに関連するご著書やそれぞれの分野の名著を目にも留まらぬ速さで取り出され、持たせて下さったのは一人前の学者になれないでいる小生が心配だったことに違いありません。原先生の数々のご恩に報いることができぬままお別れとなったことは、痛恨の極みです。今後は更に一層の努力をする覚悟でございます。心から尊敬と感謝を捧げ、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

人民共和国の特命全権大使に就任しています。原先生は日・ラオスの知的交流に多大な貢献をされ、また先生のご遺志は今後も引き継がれていくことは疑いの余地がありません。

原先生は学問や進路について思い悩んだ小生に対しても、温かい目で見守り、直接または間接的に数多くのヒントを与えて下さいました。「ケオラ君、遊びに

知的冒険のために

政策研究大学院大学 准教授

高木佑輔

原洋之介先生のお仕事について、真っ先に思い浮かぶのは先生の編著『東南アジアからの知的冒険—シンボル・経済・歴史』（リポート、一九八六）である。大学院時代の私は、それまでのフィリピン国家論を批判した先の課題として、中央銀行設立をめぐる政治過程を博士論文のテーマとした。そう決めてはみたものの、政治学の知識だけで中央銀行が論じられるかと暗中模索していた。その中で、同書に収められた原先生の「東南アジアの高度経済成長」に強く感銘を受けた。他方で、政策研究大学院大学（GRIPS）に奉職後、折に触れて先生の最近の関心事についてのお

話を聞きながら、「なぜ原先生は今になって日本の歴史を深掘されているのだろうか」という疑問が頭から消えなかった。先生のご逝去の報に接し、改めて同書を読み返したところ、今更ながらその答えに気づいた気がする。追悼にあたり、まずは原先生との（本を通じた）出会いを与えてくれた同書を振り返ってみてい。

同書が私自身の研究の道しるべの一つとなった理由は、その視野の広さにある。同書における原先生は、「われわれ経済学徒」と自己規定されつつも、決して経済学のみに関ざされていない。同書の導入となる『商人国家アユタヤ王朝』仮説については、東南アジア史の泰斗である石井米雄先生の「商人国家」論を素材に、商業の発達と国家の統治形態との関係性について論じている。一九世紀、ボーリング条約締結を主な契機とする商業の発達に伴って、中央集権化を志向する王と、分権化を志向する家産官僚の対立が生じたとみる。そうすることで、チャクリ改革の経済的背

景を考察している。

経済活動の政治に対する影響という視角は、同書に収められた論文「東南アジアの高度経済成長」の中でも展開されていく。同論文では、サリット・タナラツト政権発足以降のタイの開発が考察されている。まず、サリット政権が世界銀行調査団の勧告を重視し、国家経済開発庁を設立、テクノクラートを重用して輸入代替工業化を実現したことなどが手際よくまとめられている。テクノクラートの中でも特に注目したのがタイ国立銀行総裁となるプオイ・ウンパコーンである。プオイは英国留学後、大蔵省、国立銀行の要職を歴任し、政府独占の廃止などの自由化改革を進めた。サリットによって国立銀行総裁に任命された後も、産業投資奨励法の制定と実施、さらに上述の国家経済開発庁の運営にも辣腕を発揮した。プオイは単に決まったことをこなす役人ではなく、自身の信念に従って行動した。例えば、まだ政権を取る前、当時すでに有力な軍人であったサリットの強引な要求を撥ねつけたこ

とや、サリットの後継者となったタノームの市中銀行との利益相反を公に批判し、タノームが銀行の役職を辞したことなどが紹介され、プオイが有力者との対立を辞さなかったことが強調されている。

さらに、同論文の考察は、経済問題を越えて広がっていく。一九六〇年代から一九八〇年代までのタイの工業化について、「徹底的にふるいタイプの政治的リーダーシップの下で『の』近代化」と評している。その際、官僚政体論として知られる議論を手掛かりにしつつ、政策路線などをめぐる対立ではなく、権力や富をめぐる対立をタイの伝統的な政治のかたちとする。ただし、より重要なのは、伝統的な政治を批判するプオイのようなテクノクラートの存在や、工業化の結果として新しく台頭した中間層に注目している点である。サリットやタノームに代表される家父長的政治エリートが、新興の政治経済エリートに挑戦を受けていることを読み取り、更なる変化の可能性を示すことで、ダイナミックなタイ理解の途を開いている。

同論文の後段では、一九八〇年代のタイが直面した問題への処方箋を出すために、新古典派と従属学派の立場を紹介し、さらには明治期日本の工業化の経験に言及している。ここで理論的な考察を紹介しつつも、日本の経験のような具体例に注目するあたり、アジアの現実から考えようとする原先生のこだわりを感じる。本書のタイトルが東南アジア「への」知的冒険ではなく、東南アジア「からの」知的冒険であることから、アジアの現実から出発することへの強い意志を感じ、大学院時代の自分は強く背中を押された思いであった。

凡庸な私は、本書を再読してようやく、原先生が日本の歴史を深堀されていた理由が分かったように思う。原先生は、本論文末尾で、日本の経験は、単なる成功物語ではなく、失敗を含めた冷静な分析を通じて初めて東南アジアの知識人の役に立つと指摘する。このように考えれば、先生の日本についてのお仕事は、日本からの知的冒険に東南アジアの人々を巻き込むた

めの仕掛けであったように思える。本書における原先生の文体には、東南アジアの友人たちに語り掛ける姿勢が貫かれている。今、ラオスやインドネシアをはじめとする東南アジア各地で活躍する原先生の教え子たちの存在を思い起すと、だれを讀者、あるいは仲間として仕事をするのか、自問する機会をいただいた気がしてならない。

もう一つ、本書を通じて学んだことは、幅の広い共同研究の大切さである。本書は、斎藤修先生や白石隆先生をはじめとする、私からすれば仰ぎ見るような先生方ばかりが参加し、それぞれに議論を展開している。「あとがき」によれば、同書執筆者はリプロ研究会と呼ばれる研究会を、名編集者である早山隆邦氏とともに組織して、本書出版に至る六年間、実に五二回にわたって開催したという。分野の異なる研究者と編集者が自由闊達に論じあう姿が目には浮かぶ。もちろん、研究会の間、実際にお会いして初めて知ることになる原先生のあの大らかな笑い声が響き渡っていた

あろうことも想像に難くない。

G R I P S に奉職後、何度も原先生とお話する機会をいただいたのは僥倖というよりほかない。また、私が初めて指導を担当した博士課程の学生がタイの中央銀行出身であったこと、その副指導を原先生にお願いできたこともまた、大変ありがたい思い出である。

原先生、先生のご見識とお人柄には遠く及びませんが、一学徒として、東南アジアからの知的冒険に連なるべく精進いたします。また、G R I P S に職を得たものとして、アジアの中の日本からの知的冒険の道を、新興国の人々と共に歩めるよう努力を重ねます。本当に、ありがとうございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

原洋之介先生のこと

政策研究大学院大学 学長

田中明彦

原洋之介先生の突然のご逝去には、ただただ驚くばかりでした。ほんの二、三日前にG R I P S の廊下ですれ違って、いつものように大きな声で話しかけていただいたので、連絡を受けたときには信じられませんでした。

原先生に初めてお目にかかったのは一九九〇年四月に私が東京大学東洋文化研究所に着任したときです。それから、もう三〇年以上もお付き合いをさせていただいております。原先生は、東大校内でも他部局の人とも付き合いが多く、東文研の所長をしているときにも、他部局の部局長といろいろな画策をなさり、情報学環

という新部局を作ることに貢献されました。

これは理学部や工学部などのコンピュータサイエンスをやっている人たちと社会科学・人文科学系で情報社会について関心をもっている人たちを結集して学際的な研究教育組織にしようとする試みでした。原先生が関与していたので、東文研からも人を出さなければいけないということになって、なぜだか知りませんが原先生は私に「田中くん行ってくれる？」と、あのいつもの調子のにこにこした顔で話しかけてきたのです。私は何がなんだかわかりませんが、陽気に頼まれると断るわけにもいかず、情報学環の設立時の一員となりました。

いつてみたら学際的組織の通例で結構面倒なことも多く、なんてところに押し込まれたのかと思いました。しかし、今から思い返してみると、原先生には感謝せざるをえません。その後情報学環と東文研をいつたり来たりしながら研究をしてきましたので、人文学からコンピュータサイエンスまでに結構親しむことが

できたからです。

原先生が東大を御退官になって、私も国際協力機構に勤めていたこともあってしばらくお目にかかれませんでした。二〇一七年に政策研究大学院に私が来ることになって久しぶりに再会したわけです。まったくお変わりなくお元気な原先生で、GRIPSのEconomic Planning and Public Policy Programのディレクターとしてインドネシア人の学生たちのよきmentorであることを楽しんでいらっしゃいました。今でも、廊下のむこうから「田中くん」と呼びかけてくれる原先生が現れるのではないかと時々思ったりします。ご冥福をお祈りします。

「それはゲームだよ」で始まった
おつきあい

京都大学名誉教授

田中耕司

突然の訃報に驚きつつ、あの笑い声がもう聞けなくなるか、という思いが頭をかすめた。研究会であれ会議であれ、原さんが出席する会合では、その笑い声が廊下まで聞こえてくるのが常だった。それを聞き、原さんがもう来ていると納得したことが何度もあった。

年かさでいえば、原さんより三つ年下になる。原さんが農業経営学や農業経済学、わたしが栽培学と専攻分野は違ったけれど、農学部卒業で、日本の農業や農業史に関心があり東南アジアも研究する後輩として

大事にしていた。物知りで、東南アジアの経済事情や農業発展にかかわる事柄だけでなく、その研究に携わってきた多くの先達の逸話など、実にさまざまなお話を教わった。原さんに何かを教えるなどということはなく、もっぱら教えられることばかりで、実際よりずっと年上の先輩という印象がいつもあった。それにしても、あまりに早いご逝去というほかない。

原さんとはじめて公の場で同席したのは熱帯農業にかかわる研究者や技術者が集まる研究会においてであった。一九八〇年代後半、わたしがインドネシアの調査に従事していたころである。ともに話題提供者として登壇し、原さんは後に『アジア・ダイナミズム』で提示されるようになる東南アジアの経済発展と農業開発について話された。わたしはインドネシアの開拓前線での農地開発の事例を紹介したが、その後の総合討論で、開拓前線の農地や林地をめぐるさまざまなアクターのやり取りについて「田中君、それはゲームだよ」と総括されたのをいまも鮮明に覚えている。いま

振り返ってみれば当たり前のことだが、それを「ゲーム」としてとらえる見方はまさに蒙を啓いていただく指摘であった。現地の事情にはよく通じているが、理屈を知らないところに伸びしろがあるとでも思ってしまったのか、それ以後、研究会などによく声をかけてくださった。「多くの先達の逸話」を拝聴したのはそんな研究会後に続いた飲み会の場であった。それも懐かしい思い出となってしまった。

その研究会の前から、『クリフォード・ギアツの経済学』や『東南アジアからの知的冒険』を通じて原さんのお仕事には接していた。当時の東南アジア研究センターでは、経済学者、とくに主流派経済学者に対しては社会や文化を理解しようとしただけでなく、肝心の経済の動向についてすら彼らの予測はあてにならないという評価があった。そのなかで、この二冊の本は「話がわかる」経済学者がいること、そして東京方面にも地域研究に関心のある人たちが大勢いることを教えてくれた。後に、東南アジア研究センターによ

る地域研究の大型共同研究プロジェクトが始まり、それに原さんやその仲間の研究者が参加するきっかけになったのがこの本ではなかったかと思うほど、『知的冒険』がわたしたちに与えたインパクトは大きかったように思う。

石井米雄さんの「歴史と稲作」（『タイ国―ひとつの稲作社会』所収）が、経済学も「ヒストリカル・ナラティブ」でなければならないという原さんの考えと共振したことは『知的冒険』ですでに紹介されている。石井さんだけでなく、原さんによると、『タイ国』の後に出版された『熱帯アジアの農業発展』の著者、高谷好一さんからも大きな刺激を受けたという。高谷さんが調査したチャオプラヤ・デルタの各地域をその本をガイドにリプロ研究会のメンバーとつぶさに訪ねたそうである。原さんは、経済理論を論じるのが好きだったが、その一方で地域を成立させている自然・生態環境を肌で感じながら歴史を紐解きつつ地域の個性を視野に入れた経済発展を論じようとする人でもあつ

た。現場感覚をもちながら理論と実際を接合するのに余念がなかったフィールドワーカーであったといつてよい。

そんな原さんだったからか、東南アジア研究センターが企画した大型研究プロジェクトに積極的に参画してくださった。重点領域研究「総合的・地域研究の手法確立―世界と地域の共存のパラダイムを求めて」（一九九三―九六年度）の計画研究班「地域発展の固有論理」のリーダーとして研究をけん引するだけでなくプロジェクト全体の運営にもずいぶんと協力してくださった。わたしはそのプロジェクト事務局を担当していたので期間中にはずいぶんとお世話になったが、原さんはやっぱり凄いなあ、とあらためて思ったのはそのプロジェクトの後、二〇〇一年に『アジア経済論』が出版されたときである。「グローバルイズムと地域性の経済学」といった視角に基づく「アジア経済史」のなかに、アジア経済の現代局面を位置づけてみようという筆者の試みを縮約して表現した」のがこの本であ

ると「はじめに」で紹介されているが、この大型研究プロジェクトで提起された研究枠組みや視点が原さんの経済発展論に実にうまく組み込まれて、学生向けの教科書ともいべきこの本が出来上がっていた。プロジェクトに参加して終わりではなく、その成果を換骨奪胎して自家薬籠中の物として取り込む努力を惜しまない人でもあった。凄いなあ、と思った所以である。

その後も原さんからいろいろな機会を与えていただいた。二〇〇〇年度と二〇〇一年度を実施された国際協力事業団（現国際協力機構）による「ラオス人民民主共和国経済政策支援」のリーダーを原さんが務められたとき、農業分野の協力者として参加することになった。このラオスでのプロジェクトを通じて、それまでのわたしには見えていなかった原さんの新たな側面を観察することができた。政府機関や関係省庁の高官を訪問して意見交換をする機会が多かったが、原さんはそういう場では実に堂々とふるまわれるというのが新しい発見であった。大きな体躯があつて押し出しが

強いという方ではなかったが、公式の場での振る舞いは実に堂々としていた。磊落な話しぶりや細部にも言及する話し口がよくバランスをとって、相手方を飽きさせることがなかった。親しみと敬意を抱かせる社交術を身につけておられるのを見たのは、わたしにとっての新しい発見でもあった。GRIPSに移られてからも、東南アジア各国からの留学生のゼミや学位審査の機会に招いていただいた。ラオスで見たのと同じ姿勢と熱意を留学生の教育の場でも発揮されているのを感じたのが昨日のように思い出される。

長きにわたって後輩として大事にしてもらったご恩を返すことができないまま逝ってしまわれたのが残念でならない。「田中君、それはこうだよ。」そんなアドバイスが降りてくる夢をいずれは見られるかもしれないという期待を込めて、ご冥福を祈ります。

顔写真を見つけれられる時代ではない。どの出席者が原先生かわからない。そこで、受付にいたロジ担当の友人に、会場に来た原先生の風貌を尋ねると、「間違って会場に入ってきたみたいなおじさん」という、雑で失礼な説明が返ってきた。

そんな説明でわかるわけがないと思いつつ会場に入ってから二秒でどの人が原先生かわかった。原先生は、顔をくしゃつとさせながら、大きな黒いカバンに手を差し込んでゴソゴソと何かを探していた。著作のなかでアジアを壮大に論じる私の勝手なイメージとのギャップがあつて、つい笑ってしまった。その後のシンポでは、登壇した原先生の発言を、ウォーラースタイン先生が熱心にメモしていたのが印象的だった。

じっくりお話を伺う機会をえたのは二〇〇九年。原先生が率いる少人数のラオス・ビエンチャンへの出張に同行させてもらったときだ。私にとってはじめてのラオスで、この国への思い入れが強い原先生から、移動の合間や食事の席で「講義」を受けた。贅沢な機会

原先生に言われたかった「バカ」

京都大学 東南アジア地域研究研究所 准教授

中西嘉宏

原洋之介先生をはじめ直に見たのは、世界システム論で知られるイマニエル・ウォーラースタイン先生が、京都大学のイベントで講演をしたときだった。二〇〇五年あたりだったかと思う。原先生は講演後のシンポジウムの登壇者として名を連ねていた。

ニューヨークから大物歴史家が来訪するということがワクワクしていたが、原先生の話聞くことも同じように楽しみだった。当時、私は東南アジア研究を学ぶ大学院生で、アジア研究を志す学生にとって原先生の仕事は必読だった。先生がどういった方なのかとずっと気になっていた。といっても、グーグルで検索し

だった。原先生はすぐに酔っ払うので、夕食時の正味の講義時間は短かったが、当時の私のような年少の研究者にも屈託無く話をしてくださって、幸せな気持ちになったのを覚えている。そういえば、ラオス国立大学での学生への講演では、「ラオスの経済発展のためになにをすればよいでしょうか」と学生に尋ねられて、「それは君たちが考えるんだよ」と言っていて、いつものようにガハハと笑っていたことを思い出した。

さて、時間は下って原先生と最後に言葉を交わしたのは二〇二一年三月一日のウェビナーである。二月一日にミャンマーでクーデターが起きて、私がクーデターについて報告したときだった。原先生はミャンマーの状況に胸を痛めながら、この国は東南アジアでも経済的に潜在力があると熱弁された。しばらくお目にかかっていなかったが、変わらない元気な姿をオンライン上で目にして、ラオスでいっしょにビアラオを飲んだときのようになんとか幸せな気持ちになつた。

それから一ヶ月もたたずに訃報に接したわけで、いまだに信じられない。

もう今さら叶う願いではないけれども、ずっと原先生から言われた言葉がある。「バカ」である。確か二〇〇七年あたりのことだったと思う。政策研究大学院大学で原先生と同僚だった相澤伸広くんの結婚式するとき。私は二次会幹事の一人だった。披露宴ですっかりできあがっていた原先生は、中京区のレストランで開かれた二次会にも参加した。

会がはじまる前に挨拶したが、「相澤の友達か、あのバカのか、がはは」と一方的に話を聞くだけで終わった。会がはじまると、イスに深く腰掛けながら終始笑顔で、壇上で友人たちに遊ばれる新郎に向かって、「相澤、バカ」と脈絡のないヤジを繰り返して飛ばしていた。あのとき、「バカ」以外の言葉を原先生が言っていた記憶がないほどだ。確か、新郎への祝いの言葉を司会に求められたときも、「バカ」くらいしか言わなかったはずだ。そのあとの三次会（フラフラで参

加）でも「バカ」を連発していた。

この原先生の「バカ」。その後も雑談や飲み会の席で何度か耳にしたが、まったく悪意を感じないものだった。今にいたるまで、原先生の「バカ」ほど親しみを感ずる「バカ」を私は聞いたことがない。言われてうれしくなるであろう「バカ」。いつか言われてみたいと思っていたが、職場をとにもすることはなく、近くにいなかった私は、ついに原先生から「バカ」と言われることはなかった。お願いしてでも言うてもらわべきだった。

四〇歳を過ぎて、どう死ぬかを少しばかり意識するようになったので、原先生の訃報を聞いて、寂しさとともに、その立派な生き様に感服してしまう。アジア経済の過去と現在についての壮大な構想力と筆の力、歴史や人物への造詣の深さ、屈託のない物言いや若い研究者を励ます姿勢、どれをとっても格が違う先生だなと感じる。学問にも教育にも熱心で、多くの方から尊敬され、ガハハと大きな声で笑って、好きなお酒を

しこたま飲んで、生涯現役。自分も原先生のように立派に生きたいと身が引き締まる。アジア研究の偉大な先達のご冥福を、心よりお祈りいたします。

原洋之介さんを偲ぶ

——一九八〇—一九〇年代の東洋文化研究所

東洋文庫研究部長

濱下武志

一九八〇年代後半の東洋文化研究所では、四人が原さんと同年度の生年をもち、私もそのうちの一人であったこともあって、定例の会議や研究会などの集まりの後など、いろいろな機会に話を交す機会があった。ただ、原さんの研究室は八階にあり私は四階であ

ったため、日常的に会う機会は限られていたように思う。この時期のことで思い出すことは、しばらくぶりに会うときでも、的確なアジア研究の現状評価があり、また予想していなかった歴史問題が議論の話題として取り上げられるなど、原さんはアジア研究の在り方を絶えず問い直すキーワードを持ち続け、いろいろな機会をとらえてそれらをタイムリーに投げかけたように思う。

また時には日本経済の検討のためにアジアを含む相当地に大きな研究構想などが出されることもあり、私たちの世代が経過した歴史やまた当時置かれていた同時代の課題を呼び醒ます背景があったからではないか、と強く感ずるときがあった。その意味では、一九八〇—一九〇年代は、研究所の内外の場でまた研究という枠の内外で、アジアや日本の変化が直面した課題を話す機会が多かった時期であったように思う。

当時、東洋文化研究所の研究分野の分け方は、全体としては日本を除くすべてのアジアを対象としてお

り、地域的には東アジアから西の中東から北アフリカまでに跨るイスラーム世界を対象としていた。そのアジアを、東アジア、東南アジアと南アジア、西アジアの四つの地域に分けた研究部門では、それらの地域を各々のディシプリンに基づいて調査研究しており、さらにそれらの地域研究部門に加えて、「汎アジア部門」として、ディシプリンを中心とするアジア研究部門が置かれ、全体として地域とディシプリンの双方を交差させる形をとっていた。

原さんはディシプリンに基づく「汎アジア部門」の経済学研究班であり、私は東アジア部門の中国社会経済史研究班に属していた。ただ、原さんの地域研究の対象は東南アジアを中心としており、私は福建省や広東省の中国華南から、また中国西南部の雲南省から東南アジアへの移民であるいわゆる華僑・華人の歴史を調査していたため、東南アジアをめぐることは関心が重なるところが少なからずあったように思う。

原さんは、早い時期にバンコクにあるESCAPにナン・バンコク・チェンマイなどの華僑送金・印僑送金のセンターで調査をしていた時期と重なっている。一九九〇年代当時、中国は改革開放政策の時代であり、華僑資金が広東省や福建省など中国の東南沿海部の郷鎮企業へと投資される動きが顕著になっていた時期であった。この時期には、一九八〇年代から顕著になった韓国・台湾・香港・シンガポールのいわゆる四匹の小龍の経済発展の背景や儒教と経済発展の関係に関する議論も韓国・台湾・シンガポール・オーストラリアなどで活発におこなわれた。

原さんが取り組んでいたアジア経済論の構想は、新古典派経済理論を組上に載せつつ、それをめぐって変動するアジア経済を地域の多様性においてどの様に捉えるか、という議論であった。ここでは、市場至上主義を批判し、危機をも含めたアジアのダイナミズムを、長期的なかつ社会文化的な広がりにおいて、また地域的な特徴に基づいて捉えることを提唱する。

原さんの著作の中で、私は特に「三つの時間軸」と

勤務していた経験をしばしば聞く機会があった。後に私がバンコクの華僑移民の中心地区であるヤワラートへ調査に行くことがあったことから、バンコクで話を聞く機会にもよくESCAPへの言及があったことを思い出す。ESCAPは国連の機関として、戦後のアジアの経済開発を担った機関であったこともあり、原さんのアジア経済研究の背景には、この、アジア現地における戦後の開発経済政策遂行の機関における体験がその後の原さんのアジア経済論に少なからず影響を持っていたのではないかと思う。また、その後も一貫してアジア現地における経済開発政策に関わってきた歴史を見ると、初期の『クリフォード・ギアツの経済学』（一九八五年）や『東南アジアからの知的冒険』（一九八六年）などに既に示されていた現地調査と経済理論に跨った視角から経済政策の領域を議論することが多いことも頷ける。私自身は、香港上海銀行の歴史を追いながら、東南アジアの華僑金融を知るために、シンガポール・マラッカ・クアラトレンガヌ・ペ

いう歴史過程に沿ったアジア論の重要性を指摘している点が大切な問題提起であると考えている。一九九九年二月にNTT出版から刊行された『グローバル化の終宴―アジア危機と再生を読み解く三つの時間軸―』にはその視点と視野が最もよく表現されていると思われる。東アジアのダイナミズムを読み解く三つの時間軸とは、一 通貨・金融・経済危機に現れた「出来事の時間軸」、二 世界経済の長期波動に見る「循環の時間軸」、三 同族ネットワーク型市場経済が示す「長期持続の時間軸」、以上の三つの時間軸である。これらの三つの時間軸の相互関係は、長短、広狭など長さや幅を異にする時間であると同時に、東アジアのダイナミズムに対して重層的に追跡する必要がある相互関係をもっていることを説いている。いわば新古典派経済学の市場至上主義に対して、アジアの各地域はそれぞれの歴史、社会、文化に対応する特徴をその背景にもっており、それらの特徴がアジアのダイナミズムを形作っているということである。この視野やアプ

ローチは、すでに経済学の範囲を超えており、アジアのダイナミズムに対して社会文化的に大きな時間的には長期の包摂力をもたせていると言えよう。

このように原さんは、一九九〇年代という二〇世紀の最後の時期において、「東アジアの多様性が再び姿を現すことになる時代にあつて、グローバルゼーションのなかで、アジア各地がそれぞれにもつ固有の歴史的なまた文化的な特徴を自らのアイデンティティとして確立していくことの重要性」を強調する。

翻つて、以上の視野に基づくアジア像の議論から二〇年を経過したアジアと世界に対して、とりわけ中国の新たなグローバルな動きに対して、原さんは注目しつつ一定の距離を置いている。「21世紀のアジア経済をどう捉えるか―アジア・ダイナミズム再考―長い歴史的パースペクティブの下に」(「政策研究院アジア研究報告 I」(二〇二一年)において、中国の動きがこれまでとは異なる役割を果たしていくことへの可能性を示唆しつつ、その動きは経済のみにはとどまらない

い要素が付随していることに注意を促している。

この二一世紀のアジアのダイナミズムに対して、原さんは、二〇世紀の三つの時間軸に加えて、ナショナル・グローバルとしての中国の動きという、アジアの一つの地域的特徴を捉える経済・歴史・文化の領域を超える新たな一つの時間軸を与えた「長い歴史的パースペクティブの下に」という視野を新たにたせ、長期の時間軸を改めて強調している。ここでは、現在の中国の動きを、四つの時間軸の重層的関係において中国とアジアの関係を見ていくことを示唆している。同論文の補論において「中国がアジアを変える時代へ？」と疑問符のなかに中国の新たな動きに注目しており、改めて中国を見る視点が問われていることを示唆している。グローバルゼーションが多様化し、アジアや中国の多様化が競合しているなかで、原さんの問題提起は二一世紀のアジアを見る出発点を与えている。

ご冥福をお祈り申し上げます。

リブロ研のこと

書籍工房早山 代表

早山隆邦

一九八〇年の七月一九日(土曜日)夕方、休日だったと思うが出社した私は、少し緊張していたかもしれない。

斎藤修先生に伴われて、恐ろしく短躯なかが(タ イの子供服を愛用しているとの噂をのちに聴いた)大きな笑い声を轟かせながら、事務所に入つてこられた。その先生は、私の机の上に隅々あつた、Max Weber の『アジア宗教の救済理論』の翻訳書(一九七四年池田昭訳)を積み上げると「もったいねえものがあるじゃないか」ともっていかれてしまった。編集屋ごときの机に意外なものがある、と原先生はおっし

やったのだろうか、私は、その一言で、「すっかり心を」掴まれてしまった。確かにマスコミ人間を中心に、「先ず怒鳴つて恐縮させ、徐々に心を掴む」という常套手段があることは、私も知らないではなかったが(後年深夜の新宿で、某大新聞の論説委員に、原先生ご自身が「やられた」のを目撃したことがある)、それとは質的に違う、スマートなやり方だったと私は思う。

あの日は、のちに「リブロ研」と呼ばれる第一回の日だった。

爾来四〇年以上が経った。「リブロ研」は、池袋山手ビルからスタートし、(事務所の移転で)サンシャイン五一階に移り、やがて、霞が関の地下一階のシーボニアメンズクラブレストラン(現東京新聞本社がある)でおこなわれた。二次会は、池袋にあつた限りは、剣道六段という噂のあるお嬢さんが経営する「津の家」に雪崩れ込む形であった。(二次会が面白かつたのに、シーボニアに行つてからはどうしたの

う、二次会はなかったと思う。

某誌に書かせてもらったが（「アジア研ワールドトレンド」二〇一二年四月号巻頭言）文字通り、体面重視の小ぶりの報告など一つもなく、その時々はその報告者が抱えている、最も野心的な「定説の覆し」や「流行の説に反した、忘れられた学説の再評価」が中心で、門前の小僧以下の知識の私でも「おおっ」と声を挙げたいような報告が多く、それをまた専攻の違う他のメンバーが、酒の酔いもあるだろうが、「完膚なきまでに」叩く。きつと報告者の中には、「悔しくて眠れない」方もいらしたと思う。原洋之介、斎藤修の両言い出しっぺを中心に、そのメンバーは、一回だけいらした方も含めると、白石隆、濱下武志、川勝平太、清水元、大西健夫、鈴木董、二宮宏之、土屋健治、今岡日出紀、大沼保昭、関本照夫、宮嶋博史、各先生に及んだ。

その副産物として一九八三年九月四日〜一日の「タイ浮イネ旅行」（と私は呼んでいる）がある。いつ

ンガをひとかけもって帰られた。そうとも知らぬ私は、川勝さんが目ざとく見つけた「タイの女子高生」の清楚さに目を奪われ、心ここにあらずだったので、目撃できていないが……。

この旅は、斎藤先生は、最初から、バンコクで帰国される、原先生は、古都チェンマイに行く前、にスリランカか何かの農業大臣（首相？）に「どうしてもいい」と呼ばれて移動されるという形で、不完全燃焼といえ、そうなるが、帰国後私の言い分を「立てる」目的で刊行した『東南アジアからの知的冒険』という題の書物は、十分私の「立場」を楽にしてくれたし、その後知的冒険という名のタイトルが多く出された、嚆矢でもあった。

言い出すときりが無い、原先生の「エピソード」については、これくらいにするが、この「リブロ研」の中心にあったのは原洋之介先生であった。もしかすると、三七歳から四七歳にかけて、いやその全生涯にかけて、「執筆」と並んで、「人を組織し、十分に各人の

も会の運営の中心にいらした原先生が「自らのフィールドを案内する」形をとったこの旅行は（それだけに、オンカラック村の長老が、「トモスギ」の名は覚えていたが、「あ、一緒にいたやつか」と原先生にさほど関心を示さなかったときの原先生の鼻白みも大きかった）刊行されたばかりの高谷好一先生著『熱帯デルタの農業発展―メナムデルタの研究』（いったんこの本を「紛失された」時の原先生の落胆ぶりは傍目にもわかった、数日後出てきたときの原先生の喜びようも）（一九八二年、創文社）を導きの糸とし、石井米雄先生の「農学的対応」と「工学的対応」を実証せんと出かけた旅だった。確かに、程なくして「農学的対応」の所産である、イネの「首」が二・三メートル伸びる浮き稲はなくなってしまった。別稿のように川勝平太先生は、チェンマイの城壁（レンガ造り）に塗り込んであるイネの種類がインディカか、ジャポニカかにとても興味をもたれ、ある日の午前、私を誘って男二人、「リキシヤ」で城壁に向かい、川勝先生自らレ

本領を發揮させる」原先生の才能が、もつとも「開花」されたのは、この「リブロ研」ではなかったのだろうか。

そして、その末端、最末端に私もいる（今頃になって私にはわかる）。

一九八〇年度 報告者 タイトルまたは内容

（文責早山）

No. 1 07・19 斎藤 修 徳川期の家族構造について

No. 2 09・20 原洋之介 東南アジア農家世帯の経済行動

No. 3 11・15 斎藤 修 労働供給曲線をめぐって

No. 4 12・20 原洋之介 タイ農村社会の原理を求めて

一九八一年度 報告者 タイトルまたは内容

No. 5 01・24 白石 隆 インドネシアの政治的シ

No. 32	No. 31	No. 30	No. 29	No. 28	一九八四年度	No. 27	No. 26	No. 25	No. 15	No. 14	No. 13	No. 12	一九八二年度	No. 11	No. 10	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6
07・30	07・07	05・07	03・27	02・27	報告者	12・10	10・29	帰国顔合わせ	04・17	03・27	02・13	01・23	報告者	12・12	10・03	07・18	06・13	04・11	02・21
川勝平太	大西健夫	原洋之介	川勝平太	清水 元		原洋之介	斎藤 修		白石 隆	今岡日出紀	原洋之介	川勝平太		関本照夫	斎藤 修	大西健夫	白石 隆	清水 元	大西健夫
物産複合の視座	ドイツとタイーオイレ ブルクを手掛かりに	東南アジアの近代化― イで考える	東南アジアを捉える視座 ―物産複合の視座から	日本からの移民進出パ ターンと東南アジア	タイトルまたは内容	クリフォード・ギアツの 経済学 東南アジア経済 論のための方法	歴史のアナロジ― 日本中世農業史とタイー	(於 サンシャインビル 52階摩天楼大飯店)	マルコの二つの小説 運 革について	中国の経済発展と制度改 革について	経済発展の考え方	世界史の中の日本	タイトルまたは内容	ジャワ人の体的相互行 為	商品経済化と労働力商品 化との関係	西ドイツ病について	インドネシア 政治分析	アジア主義と南進論	デンベルグの改革を中心 に
No. 42	No. 41	No. 40	No. 39	No. 38	No. 37	No. 36	No. 35	No. 34	No. 24	No. 23	No. 22	No. 21	No. 20	No. 19	No. 18	No. 17	No. 16	No. 16	No. 16
07・15	06・28	05・31	04・22	03・26	02・26	01・29	12・20	11・20	09・04	07・09	06・04	03・02	01・22	12・18	雑談	07・03	05・22	05・22	05・22
斎藤 修	今岡日出紀	川勝平太	原洋之介	宮嶋博史	宮嶋博史	白石 隆	原洋之介	今岡日出紀	09・04	大西健夫	原洋之介	清水 元	川勝平太	原洋之介		二宮宏之・斎藤修	斎藤 修	斎藤 修	斎藤 修
農民層分解？	経営	木綿の世界史	戦後アジア発展史への試 み	方法としての東アジア	農業発展と国家―斎藤論 文を読んで	原理	東南アジアの高度成長― タイ国を事例として	経済システム	タイ国浮イネ旅	国家組織論―東ドイツを 例に	国際会議報告	南進論	タイトルまたは内容	地域研究と経済理論―ポ プキン・スコットをめぐ って		望	発展の原動力は何か	作家と旅	作家と旅

No. 43	09・02	白石 隆	アヘン請負業者、サトウ 王チユコニー華僑財閥は インドネシアにおいてい かにしてその政治的・経 済的安定を確保してきた か	No. 48	04・14	斎藤 修	宿泊 岩波書店定宿 深更迄討論 一五四〇	No. 43	09・02	白石 隆	午後 蝟金(〇七五)(二二二)
No. 44	11・07	原洋之介	パキスタン報告	No. 49	06・08	原洋之介	都市の二つの顔	No. 44	11・07	原洋之介	パキスタン報告
No. 45	12・16	今岡日出紀	パキスタン経済のイスラ ム化	No. 50	06・30	関本照夫	ジャワ神祕主義の民族誌	No. 45	12・16	今岡日出紀	パキスタン経済のイスラ ム化
No. 46	02・18	原洋之介	ビルマ報告	No. 51	07・22	白石 隆	インドネシアの産軍複合 体形成	No. 46	02・18	原洋之介	ビルマ報告
No. 47	03・14	京都大学東南アジア研究センター(石 井米雄先生) 訪問	井米雄先生	No. 52	09・29	大西健夫	日独における産業政策論 争	No. 47	03・14	京都大学東南アジア研究センター(石 井米雄先生) 訪問	井米雄先生
No. 48	03・16	延期		No. 53	10・03	斎藤 修	商品経済化と労働力商品 化との関係	No. 48	03・16	延期	
No. 49	03・31	川勝平太	鎖国・開港・外圧	No. 54	11・17	清水 元	東南アジア概念について	No. 49	03・31	川勝平太	鎖国・開港・外圧
No. 50	09・04	鈴木 董	オスマン帝国における伝 統主義的革命	No. 55	12・08	白石 隆	フィリピン情勢について	No. 50	09・04	鈴木 董	オスマン帝国における伝 統主義的革命
No. 51	09・26	原洋之介	アジア最貧国ネパール・ バングラデッシュ・ビル マ	No. 56	01・26	濱下武志	銀信滙兌(かいだ)と銀会 多民族国家日本の憂鬱	No. 51	09・26	原洋之介	アジア最貧国ネパール・ バングラデッシュ・ビル マ
No. 52	10・31	関本照夫	マレー半島スランゴール 州のジャワ人移民社会	No. 57	02・16	大沼保昭		No. 52	10・31	関本照夫	マレー半島スランゴール 州のジャワ人移民社会
No. 53	11・13	宮嶋博史	朝鮮土地調査事業関係年 表及び資料をめぐって	No. 58	12・03	白石 隆	ビルマ情勢をめぐって	No. 53	11・13	宮嶋博史	朝鮮土地調査事業関係年 表及び資料をめぐって
No. 54	12・16	今岡日出紀	東南アジアにおける中心 性と移動性	No. 59	01・30	大沼保昭	国家の権利と人間の権利	No. 54	12・16	今岡日出紀	東南アジアにおける中心 性と移動性
No. 55	01・26	斎藤 修	一九九〇年度	No. 60	03・15	大西健夫	バンコクのオイレンブル ク	No. 55	01・26	斎藤 修	一九九〇年度
No. 56	03・12	鈴木 董	ドイツ国家とドイツ民族 イスラム世界における自 意識と他意識	No. 61	05・29	斎藤 修	熟練・訓練・労働市場― 工業化の展望との関連で Cultureとしての経済	No. 56	03・12	鈴木 董	ドイツ国家とドイツ民族 イスラム世界における自 意識と他意識
No. 57	03・20	大西健夫先生ご自宅 で雑		No. 62	06・19	川勝平太	Cultureとしての経済	No. 57	03・20	大西健夫先生ご自宅 で雑	
No. 58	03・28	斎藤 修	この間不明	No. 63	07・17	原洋之介	スリランカにおける経済 自由化とその問題点	No. 58	03・28	斎藤 修	この間不明
No. 59	04・16	関本照夫		No. 64	11・13	宮嶋博史	北朝鮮見聞録	No. 59	04・16	関本照夫	
No. 60	09・26	原洋之介		No. 65	03・12	白石 隆		No. 60	09・26	原洋之介	
No. 61	09・31	川勝平太		No. 66	06・19	川勝平太		No. 61	09・31	川勝平太	
No. 62	10・31	関本照夫		No. 67	03・15	大西健夫		No. 62	10・31	関本照夫	
No. 63	01・26	宮嶋博史		No. 68	05・29	斎藤 修		No. 63	01・26	宮嶋博史	
No. 64	04・16	関本照夫		No. 69	06・19	川勝平太		No. 64	04・16	関本照夫	
No. 65	09・26	原洋之介		No. 70	07・17	原洋之介		No. 65	09・26	原洋之介	
No. 66	10・31	関本照夫		No. 71	11・13	宮嶋博史		No. 66	10・31	関本照夫	
No. 67	11・13	宮嶋博史		No. 72	1・26	大西健夫		No. 67	11・13	宮嶋博史	
No. 68	12・16	今岡日出紀		No. 73	03・12	鈴木 董		No. 68	12・16	今岡日出紀	
No. 69	01・26	宮嶋博史		No. 74	03・20	大西健夫先生ご自宅 で雑		No. 69	01・26	宮嶋博史	
No. 70	04・16	関本照夫						No. 70	04・16	関本照夫	
No. 71	09・26	原洋之介						No. 71	09・26	原洋之介	
No. 72	10・31	関本照夫						No. 72	10・31	関本照夫	
No. 73	11・13	宮嶋博史						No. 73	11・13	宮嶋博史	
No. 74	12・16	今岡日出紀						No. 74	12・16	今岡日出紀	

不確かな個人の記憶だが、総計八七回と記憶している。計一三回分が記録に漏れていると思われる。

原先生に触れて

政策研究大学院大学 政策研究院

平野統三

先生に私が初めてお会いしたのは、私の大学赴任（令和二年八月）直後でした。原先生の御高名は、かねてからお聞きしていたものの、御本人に直接お会いできる機会はそれまでありませんでした。先生の研究室をご挨拶に訪ねると、にこにこしながら「おお、新

しく農林省から来たのは君か」と大変快活にお声がけ下さいました。過去の農業関係の研究報告書などを示しながら、（私が現在手掛けている）農村地域の土地制度に関わる研究会をしようかとアドバイスいただいたのも原先生です。

研究会立上げ後は、毎週のように研究室をお訪ねし、短時間ではありましたがご相談・ご指導をいただきました。自分にとっては、無理やり精一杯の背伸びをし、先生のアカデミックなご議論を何とか飲み込もうと必死でしたが、まさに碩学の徒そのものと言うべき先生の問題意識の高さ、学問の広さ・深さに圧倒されることしばしばで、ほんの数十分の指導で頭がオーバードローし、研究室を出るときはいつも頭の中がパンパンになっていたように記憶しております。

アジア研究がご専門の原先生ではありましたが、「最近では少し復農してね」とおっしゃっては、アジア各国の農業制度の相異や我が国戦後の農地改革に関わった先人達の問題意識など、楽しそうに語り出すと止

まりませんでした。また昔話として、豪快に笑いながら「若い頃は、酒ばっかりよく飲んだよ」といった話もよくされていたので、コロナ禍のため全くお酒などをご一緒できなかったことが大変残念です。

原先生の問題意識は、偉大な先人・農業経済学の大家である東畑精一氏らの問題意識を発展させたもので、西洋から導入した経済学や農業論だけでは解ききれない日本やアジアの農業問題を解くための農業経済学を構築するだけでなく、更に、世界の貿易自由化を進める中で多様な地域間経済圏の連合を主導しようとする日本が「世界農業の望ましい姿」を明示的に示すべく、「世界の多様な農業の共存」という哲学を理論化できる農業論を構築すべきである（「農」をどう捉えるか―市場原理主義と農業経済原論（原洋之介）―から）ということだったと知られています。

このような前人未踏の難題を前にし、我が国農業経済学のあるべき道筋の示唆を提示できる人は「原先生をおいて他にいない」と言われ、多くの研究者が原先

生の御逝去についてご自身のブログなどで触れ「本当に大事な人を失った」「残念でなりません」との声を挙げられるなど、原先生の御逝去は農業経済学にとつてあまりに大きな損失であり、全国に数多おられる御同輩・後輩や関係者へ与えた衝撃と悲しみはいかばかりだったか、今更ながら大きすぎる原先生の存在とそれを失った喪失感は想像に難くありません。

私が先生に直接ご指導いただけたのは約八ヶ月ですがありませんでしたが、当大学でお世話になり短い期間ながらも先生の温厚で快活なお人柄と深く鋭いご洞察に触れることができましたのは、私にとってまさに僥倖の至りでした。ご指導内容を十分理解できていたとは到底思えません。私に大きな恩恵を与えていただきました。先生のご逝去、あまりにも悲しく、誠に残念でなりません。生前に受けました御恩に改めて深く感謝の意を申し上げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈りする次第です。

原洋之介先生を偲んで

日本貿易振興機構アジア経済研究所長

一橋大学経済研究所特任教授

深尾京司

私が原先生に初めてお会いしたのは、二五年くらい前、おそらく東京大学東洋文化研究所でのアジアの経済発展に関する研究会で座長をされていた際だと思います。その頃から私は、二〇世紀初頭からのアジア諸国の経済発展についてGDP長期推計を中心に据えて研究するという『アジア長期経済統計プロジェクト』（リーダーは尾高煌之助一橋大学名誉教授）に参加し、経済発展の研究を始めていました。

研究会における原先生は、会議で議論が錯綜すると何が経済発展で肝要かに焦点を絞って論点を整理され

る鮮やかな議事進行、広範な知見、そして私のような初学者にも親切にしてくださる温かさが、印象的でした。

原先生とはその後も様々なご縁がありました。私が当時所長を務めていた一橋大学経済研究所の石川滋名誉教授が逝去された二〇一四年には、八重桜の咲く頃、一橋大学の佐野書院で石川先生を偲ぶ会を開催したのですが、石川開発経済学に強く影響を受けられたという原先生にもご出席頂けました。

また、現在私が所長を務める日本貿易振興機構アジア経済研究所（アジア研）は、原先生に様々な形でお世話になって来ました。多数の研究会に外部委員としての参加をお願いし研究双書等にご執筆頂いた他、御著書『クリフォード・ギアツの経済学 アジア研究と経済理論の間で』（リポート、一九八五年）で一九八六年にアジア研の発展途上国研究奨励賞を受賞された翌年から、二一年にわたって同賞の選考委員を務めて頂きました。また原先生編の『新版 アジア経済論』

（N T T出版、二〇〇一年）には実に六人のアジア研究者（当時）が執筆させて頂いています。

最近では、原先生のご関心は、特に日本の経済発展史にも向かっていました。二〇一三年九月には、アジア研の分析情報誌『ワールド・トレンド』（二〇一三年九月号、『特集 外国を研究すること』）の巻頭言で、「若い研究者には、学問の蓄積まで含めて我が国を自分なりによく知る営為を続けながら、対象地域を研究してほしいと考えている。外国を知ること、我が国のあり方を改めて問い直す大切な契機となるはずである。日本研究をも刺激しうるような研究であつてこそ、各国に育ってきた一流の研究者にも、その価値を認めてもらえるのではなからうか」と書いて頂きました。日本経済史研究と途上国研究を同時並行させるといふ先生の方針は、私を含め多くの経済発展研究者に影響を与えていると思います。

おそらく先生のこのような方針から、数年前には私を、多くの中央官庁若手官僚が学ぶ政策研究大学院大

学（GRIPS）の夜学プログラム『外交アカデミー』に日本経済史の講師として招いて下さりました。夜の講義前に面談して頂いたことも良い思い出です。

また原先生が最近執筆された御論文「日本経済の一五〇年―成長局面移行に伴う成長政策と政策理念の変遷に焦点をあてて―」（政策研究院アジア研究報告Ⅱ、政策研究大学院大学、二〇二一年）では、私が東京大学の中村尚史教授、中林真幸教授と共編した『岩波講座 日本経済の歴史』全六巻に収録した、明治初年以來の日本のGDPや産業構造、産業別労働生産性などに関する一橋推計を引用して頂きました。この御論文では、日本の経済発展に経済制度や産業政策が果たした役割が目の覚めるような明快さで分析されています。産業政策研究が苦手な私にとっては、原先生に、今後励むべき研究への道標と重い宿題を残して頂いた気がしています。

原洋之介先生への追悼文

京都大学東南アジア地域研究研究所・教授

藤田幸一

東京大学大学院生時代の恩師であり、奥様とともに仲人もしていただいた原洋之介先生が急逝されたとの一報は、全くの青天の霹靂であり、お通夜に参列し、ようやく、受け入れなければならぬ現実だと悟りました。

原先生は、物事に対する感覚が異常なほど鋭く、大学院ゼミではあまりの凄さにあっけにとられることが多かったにもかかわらず、気取るような気配が全くなく、いつも学生が気軽に接することのできる雰囲気、大先生に對しからかって冗談をいうことも自然な形でお許しくださるような雰囲気醸し出されておられま

した。

お通夜の様子について、私の指導学生の世代で、原先生にも大変にお世話になった仲間たちとメールで交信する機会がありました。ひとしきり話が終わった後、コロナ禍になってからも、きつと原先生のことだから、口角泡を飛ばしながら、周囲の人たちの迷惑を顧みず、大声で話をされていたに違いないと私がいうと、皆大笑いをし、笑っているうちに涙が目にあふれてきました。たぶん、そのメールを共有していた人は皆、同じ状況だったに違いありません。

学問的な恩義のことは短い文面のなかでは到底言い尽くすことができませんので、短い思い出を二つだけご紹介させていただきます。

一つは、私が大学院修士課程（ちなみに私は修士でやめ、その後農水省の農業総合研究所に就職しました）の学生の頃のことです。その頃の私は、アジア開発途上国の農村土地なしの貧困世帯のことを研究していたという気だけがやはり、いつまでたっても焦点が定

まらず、焦りばかりが募っておりました。修士二年の夏休み前になっても、やっとバングラデシユをやるということだけを決め、しかし農村土地なし世帯をどういう視点からどう分析するか、当時は現地に行くことはほとんど考えられず、また特に統計データが非常に不足するなかで、全く見通しが立たず、憂鬱きわまらない毎日を過ごしていました（その後やっときつかけをつかむことができ、何とかなつたのですが、本当に薄氷を踏む思いでした）。

その間、いろいろとありました。原先生はインドネシアとタイの研究をされていましたので、たとえば農村土地なし世帯が分厚く存在するインドネシアも考えたのですが、そのことを原先生にご相談すると、「オレと同じ地域をやるな」の一言。それでさらに悩んで、結局、東南アジアではなく、南アジアのバングラデシユにしたわけです。バングラデシユに決めたことをお伝えすると、「面白い！」とびっくりくださいました。

上記の通り、その後やっとバングラデシユをテーマに何とか修士論文を仕上げることができましたが、修士論文を仕上げ、その統計分析の結果を「確かめるため」と称し、現地にやっといくことができたのですが、一九八六年当時のバングラデシユの「暗い」現実にすっかりまいってしまい、帰りにタイのバンコクで原先生と先生の日本人仲間の方々とお会いし、シンハ・ビールをついでもらいながら（バングラデシユにはビールなど当然ありません）、「どや、バングラは？」と原先生に聞かれ、「なかなか大変でした」とやっという、「正直でよろしい」と同情（？）とされたことをいまでも鮮明に覚えております。（ちなみに日本人仲間のなかに奥様がおられたような気がしてならないのですが、よくわかりません）

後日譚は次の通りです。その後一〇年以上経過して、原先生にやや久しぶりにお会いしてビールで乾杯した際、「ところでお前は、東南アジアをやらず、なんでバングラなんかやってるんや」といわれ、ひっく

り返りそうになりました。

しかし、今思うと、偶然が重なって、私はその後、東南アジアのミャンマーやラオスなども研究することになり、おかげさまで、バングラデシュなど南アジアとあわせて両方の地域を研究できるという幸運をえきました。

もう一つの「事件」は次のようなものでした。

原先生は、ある頃から歯を弱くされ（あるいは失われ）、固いものが食べられないばかりか、特にお酒が入ると何を言っておられるのか、聞き取れないことが増えました（晩年の頃はよく知りませんが）。

あるとき、大勢で呑んだ後、二人とも酔っぱらって帰りの電車のなかで横に座りながら、私は原先生のお話を聞いておりました。最初はある程度はわかっていたのですが、途中からよくわからなくなり（何か話をさしては、一人で大笑いをされていました）、適当に聞き流し、途中でお別れしました。

その後何日か経過して、お会いした際、「お前、あ

のことはどうなったんや？」と言われ、何のことかさっぱりわからずにきょとんとしている、「あの晩、いうたやろ」といわれるわけです。あんなに酔っぱらって、ほとんど話が聞き取れなかったにもかかわらず、ご本人は大真面目で、しかもよく覚えておられ、私が「対応」しないことに腹立っておられたわけです。

あの頃、原先生は毎晩のように酔いつぶれるといった生活をされていたにもかかわらず、経済学の専門書の新刊本の内容など、よくフォローされておられ、いったいいつ読んでおられるのだろうと、皆でいぶかっていたわけですが、そういうことだったのだろうと感慨深く思っただけでした。

ちなみに、原先生は兵庫県のご出身、私は大阪出身で、二人とも関西人です。私は学問的には原先生の足元にも及ばず、しかもユーモアのセンスもありませんが、いま思えば、いい「組み合わせ」だったのかも知れないとも思います。

原先生は、「新古典派経済学」には批判的でした。しかし、よくわれわれ学生にいわれたことは、事実認識は間違っているが、政策論では正しいということでした。そのことの含蓄は深く、私にはいまだにどう解釈しているのか、本当のところはわからずにあります。

しかし、私自身も、新古典派経済学の思考法にはあまり馴染めず、違和感もち続けていますが、にもかかわらず、政策論では、人間、「不自然な」ことはやってはいけないという感覚だけはもち続けています。ひよっとしたら、全く申し合わせたわけでは当然ありませんが、私のなかに原先生の思想が脈々と生き続けているのだとしたら、それを終生、大切にしていきたいと思えます。

原洋之介先生との思い出

株式会社国際リゾート研究所 専務

藤原昌樹

原洋之介先生と初めてお会いしたのは、いまから三〇年近く前のことです。東京農業大学に在学中で大学院への進学を希望していた私は、指導教官の紙谷貢先生に薦められた『クリフォード・ギアツの経済学』を読んで「原先生の指導の下で学びたい」との決意を固めて東京大学の東洋文化研究所の研究室に原先生をお訪ねしました。かなり緊張して何を話したのかほとんど思い出せないので、ノックして研究室のドアを開けた瞬間に、デスクやテーブル、椅子にまで、いまにも崩れ落ちそうに乱雑に積み上げられた本や資料の山に驚いたことが強烈な印象として残っています。

私が大学院に進学した一九九〇年代前半は、原先生が非常に忙しくされている時期でゼミも休講になることが多く、原ゼミ所属の学生であるにもかかわらず、先生とお会いする機会が少なく、たまにお会いすると緊張してしまうような関係が続いていました。博士課程に進学した後、駒場キャンパスと東京外国語大学で原先生が担当されていた学部生向けの講義を聴きに行くことにした私は、その講義が終わった後に本郷までの移動や食事をご一緒するようになり、時間がある時には二人で飲みに行くことなどもあり、ゼミや講義以外の場で話をする機会が増え、論文や研究についてのみならず、他愛もない雑談を含め、その時々で原先生や私が各々興味をもっていることやお互いのプライベートのことも含めた様々なことについて話をするようになっていきました。

当時の原先生は何冊かの著書に加えて『発言者』（のちに『表現者』）や『北の発言』[JAPAN CURRENTS]等の雑誌連載など驚異的な勢いで数多の原

稿を執筆されていて、一九九八年に東洋文化研究所の所長に就任されてからは海外出張の機会が減ったこともあり、更に執筆のスピードに拍車がかかりました。この時期に原先生が執筆された著作は、主なものだけでも『グローバリズムの終宴』（一九九九）、『エリア・エコノミックス』（一九九九）、『アジア型経済システム』（二〇〇〇）、『現代アジア経済論』（二〇〇一）、『新東亜論』（二〇〇二）、『開発経済論 第二版』（二〇〇二）、『石波講座 開発と文化』シリーズ（共編著、一九九七）、『ヴィエトナムの市場経済化』（共編著、一九九九）、『地域発展の固有論理』（編著、二〇〇〇）などが挙げられます。

この頃の私は、原・池本ゼミの後輩数人とともに、原先生が東文研の所長として学内外の多くの会議に出席し、所長室で執務をされている間、留守番という名目で研究室を自由に使わせていただいていたのです。ほぼ毎日朝から夕方まで研究室に入り浸っていたのですが、原先生の原稿の入力作業や校正、管理などのお手

伝いをするようになりました。当時、原先生は手書きで原稿を執筆されていて、所長としての執務や会議の合間に原先生が研究室に飛び込んできて「これ頼む」と手書きの原稿やプリントされた原稿に朱を入れたものを私に手渡し、それを私が入力してプリントアウトしたものを原先生にお返しして、更に原先生が手を加えるということが何度か繰り返され、ある程度できあがった初校を編集部にメールするという形で多くの著作やエッセイが書き上げられました。「会議に行ってくる」と言って研究室を出られた先生が、数時間後にかんりの枚数の手書き原稿をもって戻ってこられることが多々あり、「会議中に内職されていたのだな」と思いつつ、原先生の原稿を書く早さに驚かされたものです。

二〇〇一年以降、私は個人的な事情で生活の拠点を東京から沖縄に移すことになったのですが、この頃から原先生が頻繁に沖縄を訪れるようになり、沖縄で開催される研究会やシンポジウムへの参加、琉球大学や

沖縄国際大学での集中講義、ラオスの沖縄訪問団との同行など原先生の沖縄訪問は二〇回近くを数えました。観光地のみならず沖縄農業の生産現場、泡盛や伝統工芸（織物や紅型などの染物、陶芸など）の工場、夜の飲み屋街などを含めて様々な場所にご案内したのに加えて、沖縄の研究者はもちろんのこと、経済界や行政官、政治家の方々まで様々な分野の方達にも会っていただきました。かしこまった形でオフィスや役所を訪問することもありましたが、原先生のご希望で、日中は県内のいろいろな地を觀てまわることや、書店や図書館で文献や資料を探すことに時間を充てて、夕方以降に沖縄料理を食べて泡盛を酌み交わしながら楽しく懇談することの方が多く、原先生に会われた人達の中には、その気さくな人柄や楽しく興味深い話に魅了され、私に会うと「原先生が次に沖縄に来られるときには是非またお会いしたい」とおっしゃる方が多くいらっしやいました。

恐らく、既に少なからず関心をもたれていたところ

に、沖縄出身で沖縄を研究課題とする私が教え子になったことを一つの契機として、繰り返し沖縄を訪れるようになり、沖縄に関する本や資料を読み込み、県内外の沖縄研究者を含む沢山の沖縄に関わる人達と交流することによって、「沖縄」が原先生の研究テーマの一つとして具体化してくことになったのだと思います。原先生による沖縄研究の成果は、原洋之介農業経済原論三部作の一つである『北の大地・南の列島の「農」』（二〇〇七）として結実しました。私は、私と同じく沖縄出身の上地一郎氏とともにコラムを書かせていただきました。原先生のご著書に自分の拙文を掲載していただいたことを身に余る光栄に思います。恥ずかしながら、私自身は沖縄研究者として未だにきちんとした研究成果をあげることが出来ていないのですが、原洋之介先生に沖縄を研究するきっかけを与えたことによって、沖縄研究に一つ貢献することができたと自負しています。

その後も私が東京を訪れる際には原先生に時間を作

原先生の思い出

―タイ、ラオス、そして沖縄

松島陽子

原洋之介先生には東大大学院農学生命科学研究科に在学中、指導教官として大変お世話になりました。また、原先生が委員長を務められた、ラオス経済政策支援（JICA）に二年間現地で携わる機会を得ました。その後大学院を退学しラオスに長く滞在しましたが、先生はラオスを訪問する度に声をかけてくださり、最後にビエンチャンでお会いしたのは新型コロナウィルスの影響でラオスが国境を閉鎖する直前、二〇二〇年の一月でした。

ご一緒した時間の中でも特にタイと沖縄への旅が心に残っています。タイ旅行は二〇〇〇年に東洋文化研

っていたでき、できる限りお会いする機会を作るようにしていたのですが、最近はコロナ禍の影響でお会いすることが叶わず、今年（二〇二一年）のお正月に新年のご挨拶の電話をしたのが原先生と言葉を交わした最後となってしまいました。

原先生は、長年にわたってご指導していただきながらも博士論文を書き上げることが出来ずにいる不肖の弟子である私に対して、折にふれて「もう博士論文にこだわらなくても良いから、とにかく沖縄のことを書き続けなさい。書き溜めておいて、いつか本にまとめるといい」と励まして下さいました。

いつの日か、私なりの「沖縄論」を書き上げて、原先生の御霊前にお届けしたいと思います。

究所に移られて間もない池本幸生先生が中心となって企画されたゼミ旅行でした。一台のバンで陸路を旅しましたが、のんびりとした車での旅行は普段お忙しい原先生にとっても久しぶりのことだったと思います。毎晩どんなに遅くまで学生とお酒を酌み交わしても（お酒は確かタイウイスキーのメコンでした）、翌朝の出発時にはしゃきつとして、バンの一番奥の席で高谷好一先生の『東南アジアの自然と土地利用』を片手に、ときどき頷きながら車窓を眺めておられました。風景を眺めながら、原先生がESCAPの専門家としてタイに滞在されていた当時と比べて語って下さった思い出話の数々は、旅行の大きな収穫でした。沖縄旅行の方はゼミの先輩である藤原昌樹さんご家族が歓迎してくださり、沖縄の名所の他に紅型の工房や泡盛の蒸溜所を見学しました。泡盛は原先生が大変好まれたお酒ですが、蒸溜所では先生にタイ米と泡盛の歴史、さらにはラオスの蒸溜酒ラオ・カーオについて教えていただき、沖縄と東南アジアの結びつきを強く感

じる旅となりました。

原先生はいつもの確なタイミングできつかけやアドバイスをくださいました。中でも修士論文をご指導いただいた際に、フィールド調査には修士論文を書き終えてから行くことを奨める、というご助言は後になってラオスで諸先生の農村調査に同行してやっとその意味を理解しました。ラオスに留まりコーヒーショップを営みながら、コーヒー豆を介して続いた産地と農家との関係、店の経営、子育てを通じてラオスのさまざまな側面に触れ、フィールドワークの技法を持たない私も長い時間をかけてようやくラオスを見る視点を得たように感じ、一区切りつけてこれからの計画を立てていた矢先、原先生がビエンチャンの店にお見えになりました。小さな庭でアイスコーヒーを飲み、ピースに火をつけながら先生は唐突に「松島さんは沖繩に行ったら」と仰いました。実は近い将来沖繩に移ることを考えていたので本当に驚きました。その三ヶ月後には視察旅行に行く予定であることをお伝えすると、

「よっしゃ、おれも行く！藤原くんも一緒にみんな沖繩で会おう。」と元氣な笑い声でお別れしたのが最後になってしまいました。

賑やかにお酒を飲み、同じ食卓を囲んで食事を楽しむ時間を大切にするラオスの人々にとって、原先生は魅力溢れるアチャーン（師）でした。それは、役所でも、農村に出かけた先でも変わりません。プロジェクトの委員長として多くのプロトコールに忙殺されても必ず気軽な飲み会の時間を取り、仕事で一緒にいる機会がなかったラオスの若者も、原先生のお話を食いつくように熱心に聞き、みんな笑っていたことを思い出します。当時原先生とお会いする機会があった多くのラオス人がアチャーン原の訃報に接して悲しみ、そして楽しかった時間を懐かしく思い出していました。

コロナ禍で延期していましたが、八月下旬に日本に帰国し、不確実な状況に不安を感じていた隔離期間中に追悼文集のお話をいただきました。そのことをきっかけに一気に日本と現実に取り戻され、亡くなられた

後も先生にはご心配ばかりおかけしているような気がします。原先生、本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

た、という人が多いのではないだろうか。

記憶を辿ると、私自身は三〇代だった二〇〇〇年頃に国際協力銀行の委員会でお目にかかったのが、初めだったかもしれない。でも、そのときにはすでに古い知り合いのように声をかけられたような気もするもので、それ以前からやりとりがあったのか、あるいはそれが先生の常なる体だったのか。

原洋之介先生と出会って

京都大学 東南アジア地域研究研究所 教授

三重野文晴

原洋之介先生の奥深い教養に裏打ちされた闊達饒舌な喋り口、誰とでも隔意なく接する人柄、驚くほど幅広い交友関係、そしてアジア経済研究とその応用への独自で鋭い視点には、誰もが魅了されてきた。先生は人をどんどん呼び込む磁力に満ちていた。私の同世代でも、どういうわけかいつのまにか親しくなってい

最初の頃の先生との思い出は、どちらかといえば、研究それ自体というよりも、アジア経済研究の政策応用の場で一緒にしたこと、そしてそのスピノフでの煙草の煙とアルコールの酩酊の混じる楽しい会話で彩られている。経産省でのいくつかの研究會、対ミャンマー支援事業、アジア政策関係での国会議員との意見交換などなど、実にいろいろなお誘いがあった。その一環で東南アジアへの調査も何度か一緒にさせていただいた。

私自身は、大学院から一貫して主流の経済学の訓練のもとで、経済発展論と金融論の研究者として育ち、

その対象として東南アジアの焦点を徐々に獲得する経緯を経てきた。デイスプリンの切り口とアジア研究の接点を模索する初学者にとって、ギアツとニュー・ケインジアンを軽々と統合して論じる先生の一九八〇—九〇年代の著作には、驚くような感銘を受けるとともに、「そんな簡単に整理していいの？」という軽い反発もあった。それで先生の名前を意識するようになった。

ここ数年、GRIPSで過ごされる先生とは、それまでの政策応用での協同を学問交流に昇華させていく過程にあったように思う。GRIPSで博士論文審査のお手伝いや研究報告をするようになり、私からも京大の研究会にお招きしたり、市村真一京大名誉教授の近著の書評で日本の戦前の経済発展論の潮流からの論評をいただいたりしていた。先生の視点の守備範囲が、単にアジア経済論、農業経済論にだけあるのではなく、政治、産業、行政、市民社会を踏まえた日本のアジア政策そのものに及ぶものであることを知るようにな

注

(1) 先生この方面の著作としては、『クリフォード・ギアツの経済学…アジア研究と経済理論の間で』(一九八五)が有名だが、当時興味深く読んだのは、文科省補助金重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」プロジェクトの研究報告書の『地域研究と経済学』(一九九五)などの、その後の試論の展開である。

原洋之介先生の思い出

政策研究大学院大学 アカデミックフェロー

森地 茂

原洋之介先生は、東大から政策研究大学院大学への移籍が筆者より二年遅かったものの、特別教授、アカ

なった。虎ノ門・新橋界限でご一緒した正体がいまひとつわからなかった研究会での雑談、「三重野君、いや、戦後の日本のアジア主義は、右だけじゃない、左だけじゃない、渾然一体で見分けがつかないんだよ」、そういう言葉に凄味を感じることがあった。

私自身が経済発展論や金融論から、東南アジア経済に焦点をシフトさせつつある中で、最近の先生との会話は、方向が見えなくなりがちな大海原での羅針盤の安心感を与えてくれていた。新型コロナウイルスの猖獗がはじまる直前の二〇一九年一月に六本木で痛飲して、すぐ翌年の正月明けにラオスにご一緒した楽しい旅が、最後にお目にかかる機会になってしまった。

アジアの大海が時化の気配で船が大揺れのこのときに先生が去ってしまったことは、とても心細く寂しいけれど、アジア経済研究者として、なにがしかを引き継ぐ努力をしていかなければいけないのだろう、と感じている。

デミックフロー、名誉教授には同時に任命された言わば同期生で、年齢も東大の卒業年次もほとんど同じである。

先生はアジア経済、政治の専門家であり、筆者もアジア諸国のインフラ整備に長く関与してきたので、多くの話題に花が咲いた。また、先生が推進されてきたインドネシア六大学との連携プロジェクトの後継者としてGRIPSに赴任された工藤年博教授とは、SPRIプログラム (Strategic Policy Research and Innovation Program、ASEAN諸国の政策課題について政府中堅幹部の調査研究を支援するJICAとGRIPSの連携プログラム)で、フィリピン、ベトナム、タイ、ミャンマーの政府幹部職員の研究指導を共同で実施してきた。両先生のアジアに関する情報と見識は、専門分野の異なる筆者にとって大変興味深く、アジア交通学会での活動や、各種プロジェクトで各国の政府関係者や専門家と交流する際に、極めて貴重なものであった。

原先生との共通の知人も驚くほど多かった。筆者の恩師で農学部林学科造園研究室（当時）の助手を長く務められた故鈴木忠義教授、東工大社会学科時代上司であった故華山讓（元助教、筆者がM I T時代に係った自動車貿易摩擦に関する国際プロジェクトの日本代表であった政治学者 故佐藤誠三郎教授、メコン地域開発の関係では河川工学者 故高橋裕教授、先生のG R I P S赴任前に亡くなった西野文雄教授、前姫路市長石見利勝氏（元東工大社会学科の助手仲間）、先生の高校の後輩榊正剛氏（元国土交通省住宅局長、総合政策局長、N E X C O東副社長）等々である。それぞれ何かのプロジェクトや出来事に関する先生との会話の中で、これらの方々の名前が出てきて共通の知人であったことが分かり、その方々の思い出などで話が弾んだ。先生の長年のご経歴とその人脈の広さは、明るく、おらかで、話好きで、かつ研究熱心なお人柄によるものと実感できた。

先生との会話はほとんどが喫煙室であり、先生はい

つも分厚い洋書を持参しておられた。

喫煙者は極めて少数であり、原教授、粗信仁教授、荒井洋一助教授、日比野直彦助教授、岩渕信亨財務マネジメント課長、山岸由尚財務マネジメント課主査（すべて当時の役職）とは、時々近くの居酒屋に集まったりもした。そんな会話の中で、原先生からは明治時代の日本のインフラ整備についての情報を求められたり、元スリランカ大使である粗先生に複数の企業の方々の相談に乗って頂くきっかけになったり、荒井先生から数学的手法の助言や、経済学分野の世界の動向を教えて頂いたり、大成建設からG R I P SのE S D G s関連施設の提供が実現したりと、極めて有意義な時間であった。そんな時間、ニコニコと、でも興味深げに、時々質問などしておられた先生の表情が今も目に浮かぶ。

あまりに急なご逝去を悼み、ご冥福を祈るばかりである。

合掌

笑顔、笑い声から学ばせていただいた、人としての在り方

政策研究大学院大学 教育支援課

プログラムコーディネーター

谷田部みき

二〇一七年～二〇一八年の一年間、原先生がディレクターを務められたプログラムで、私はコーディネーターとして一緒にさせていただいておりました。それまでは、業務でほとんどお話しすることがありませんでしたが、先生がオフィスにいらつしゃると、いつも満面の笑顔と大きな笑い声で、私を含むそこにいたスタッフもみんな、つられて笑ってしまっって、楽しく幸せな気持ちにさせていただいておりました。

いざ、一年間密にお仕事で一緒にさせていただくと、その明るいお人柄と同時に、学生や関わる人全

に対しての心からの思いやりや優しさ、研究者・指導者としての凛としたかっこいいお姿、そしてとても気さくでいつも話題が絶えずチャイミングな一面も拝見させていただいておりました。私はなんて素敵な先生のもとで一緒に働かせていただいているのだろうと、ありがたく感じておりました。私の任期が終わり、一旦大学を離れ、またご縁があつて退職一年後に別の担当で復帰した際も、学内でお会いすると声をかけていただき、お酒の場も一緒にさせていただき、心から嬉しく思っておりました。

コロナ禍で、学内でお目にかかる機会も減ってしまつた中で、原先生との突然のお別れは、まだ信じられずにおりますが、インドネシア出張をはじめ、一年間先生と一緒にさせていただいた経験や想い出は、ずっと鮮明に残り続け、私の人生の糧にもなつていくと確信しております。先生ともうお会いできないのは、火が消えてしまったように寂しいですが、明るく大きな先生の笑い声や楽しいエピソードを思い出しながら、

先生のように愛溢れた素敵な人間になる、という目標を掲げ、精進してまいります。

原先生とのご縁、親身なご指導とかけがえのない思い出に感謝いたします。

そちらでも大好きなお酒を楽しみながら、穏やかにお過ごしください。ご冥福をお祈りいたします。またお互いどこかで生まれ変わって、再会できることを楽しみにしております。

原先生とGRIPSの「21世紀アジア研究」について

政策研究院長

渡辺 修

原先生のアジア経済研究者としての御高名は古くから存知あげていたが、お目にかかったのは意外と新しく、私が二〇一六年に政策研究院に来てからである。通産省在勤中は日米関係に携わる機会が多く、アジア地域を直接担当する機会が少なかったことに依るためかと思う。

初対面の原先生は、人懐っこい笑顔でひょうひょうとしておられたが、アジア経済についてのお話しは、長年に亘る数々のフィールドワークに裏打ちされた懐の深さを感じるものだった。そして会合を重ねる毎

に、その存在感は確かなものとなり、加えて内外に多くの人脈を持ち、とりわけ国内には四〇代、五〇代の若い研究者を中心とする沢山のお弟子さんがおられることも頼もしい限りだった。

何回かの会合の後、「現代版アジア研究」を政策研究院の一つの柱とすることで一致し、二〇一八年にスタートした。「現代版」の意味は、従来の「日本としてのアジア研究」ではなく、「アジアの中の日本」として、我々日本自身も対象とした「21世紀のアジア研究」を進めようというものである。

人口減少の進む日本経済は、アジアのサプライチェーンに見られるように、アジアの若い人達を雇用しながら、アジアと一体となって成長する姿を既に構築しており、今後の日本の成長はアジアの経済統合の中にある。そして、そのアジアの経済統合は、米中対立、気候変動問題等世界的な政策課題と密接不可分である。「現代版アジア研究」の奥行きはとてつもなく広く深い。爾来この研究は、原先生の御指導の下、着々

と進展してきており、原先生御自身もいくつかの論文を記されたと聞いている。原先生の亡きあとも次々と若手研究会メンバーによって、その研究成果が公けになることを期待している。

政策研究院のアジア研究については、もう一つの柱として、シンガポール、インドネシア等東南アジア諸国の有名な研究機関とGRIPSがネットワークを構築し、その時々のごくつかの課題（例えば宗教的過激主義、大国関係と海洋秩序、持続的経済成長等）につき共同研究をおこなうプロジェクトを同時期に立ち上げており、コロナ禍ではあるが、着実な研究成果が発表されつつある。

これら二つのアジア研究は、いずれも世界的な関心と広がりをもつものであり、研究成果が今後GRIPSから発信されることにより、二一世紀の成長センターであるアジアとその中核となる日本の動きを知る上で、世界が常にGRIPSのアジア研究を注視し続けるという時期がやがて訪れるものと確信している。

Guiding into Economics' Pandora Box

Wahyu Prasetyawan

Syarif Hidayatullah Islamic State University, Jakarta, Indonesia

I met Hara Sensei for the first time when I was a graduate student at Kyoto University at around 2004. There was a seminar at the Center for Southeast Asian Studies where he was one of the presenters. I attended his presentation, and I was very impressed with his knowledge which combined both economics and social science such as sociology and politics. It was a demonstration of his interest and vast knowledge. The second meeting, if I remember correctly, was instead in Jakarta in 2007 after I graduated from Kyoto University. At that time Shiraiishi Sensei invit-

ed me to lunch and he said that he came with a close friend. It was Hara Sensei who walked along with Shiraiishi Sensei and we ate lunch at a famous Padang restaurant in Jalan Sabang, Jakarta.

The ensuing meetings with Hara Sensei took place both in Jakarta and Tokyo when I assisted him at GRIPS in a program by the name Economic Policy Planning. Since 2007 I have visited GRIPS, most of the time in spring, to work under Hara Sensei supervision. In fact, those meetings were avenues where I could learn development economics, especially in the Southeast Asian countries, directly from him. The kind of lessons I received from Hara Sensei were very different from the one I had when I did my master of development economics at Leeds University, UK. While Hara Sensei informed me about the book I should read, he also reveals the social and po-

litical situation of the countries and their limitations to achieve economic growth. Therefore, the lessons I received were not merely knowledge from books, but also first-hand experiences and perspectives.

The experiences to directly learn economics from Hara Sensei were memorable and could not be forgotten. Those learning helped not only to broaden my perspective to understand a society, but also to offer much wider knowledge. Macro and micro economics perspectives in fact could be employed to sharpen political economic analysis. By doing so, therefore, there have been new perspectives, that one had never thought to understand social and political phenomena. Particularly, Hara Sensei invited me to discuss the latest Indonesian economic conditions or any topics related to the students under the EPP program in GRIPS. The topics could be varied

which range from his favorite subject of agricultural economics to education and human capital. In addition to that, Hara Sensei suggested me to read deeply in microeconomics, especially the one that discuss institutions because he known that I am interested in reading institutional economics. But it seems that he thought that the books I read on the subject were mostly at the macro level.

Allow me on this occasion to express my sincere gratitude to Hara Sensei for his supports to me. I will never forget to his kindness and open heart. You are always be remembered.

3 略歴

【略歴】

- 一九四四年 兵庫県に生まれる（生年月日…昭和一九年二月七日）
- 一九六三年 淳心学院中学校・高等学校卒業
- 一九六七年 東京大学農学部農業経済学科卒
- 一九六九年 東京大学大学院農学研究科農業経済学修士号取得
- 一九七二年 東京大学大学院農学系研究科農業経済学専門課程博士課程 単位修得退学
- 一九七二年 東京大学東洋文化研究所助手
- 一九七五年 国際連合アジア太平洋経済社会委員会専門家（タイ・バンコク、任期一九七七年まで）
- 一九七六年 農学博士号取得（東京大学）
- 一九七七年 タイから帰国
- 一九七八年 東京大学農学部非常勤講師
- 一九七八年 財団法人国際開発センターにおいて研究調査に従事
- 一九七八年 アジア経済研究所において国際合同研究プロジェクト委員の業務に従事

- 一九七九年 東京大学東洋文化研究所助教授
- 一九八六年 東京大学東洋文化研究所教授
- 一九九五年 財政金融研究所特別研究官を受託する
- 一九九七年 京都大学教授東南アジア研究センターに併任される
- 一九九八年 東洋文化研究所長
- 二〇〇二年 東京大学情報学環・東洋文化研究所教授
- 二〇〇二年 国立民族学博物館運営協議員に任命される（任期二〇〇四年まで）
- 二〇〇六年 東京大学定年退職（同年六月東京大学名誉教授の称号を授与される）
- 二〇〇六年 政策研究大学院大学教授
- 二〇〇九年 政策研究大学院大学定年退職
- 二〇〇九年 政策研究大学院大学教授特別教授
- 二〇一四年 政策研究大学院大学アカデミックフェロ
- 二〇一七年 政策研究大学院大学 政策研究院シニア・フェロー／参与
- 二〇一九年 政策研究大学院大学客員教授
- 二〇一九年 政策研究大学院大学名誉教授
- 二〇二一年 四月三日死去
- 叙正四位、瑞宝中綬章を授与される

【社会的貢献】

- （公職）
- 一九九〇年 農林水産省農林水産政策研究所機関評価委員（一九九七年）
- 一九九三年 国家公務員採用I種試験（農業経済）試験専門委員（一九九五年）
- 二〇〇六年 農林水産政策研究所機関評価委員会委員（一九二〇一五年）
- 二〇一五年 農林水産政策研究所委託研究評価委員会委員長

- 二〇一七年 政策研究大学院大学 政策研究院シニア・フェロー／参与

(法人歴)

- 二〇〇六年 特定非営利活動法人アジア科学教育経済 発展機構理事長 (一〇〇七年)
- 二〇〇九年 財団法人貿易研修センター アジア経済 研究会委員長
- 二〇〇九年 財団法人海外技術者研修協会 理事
- 二〇〇九年 笹川平和財団 笹川汎アジア基金運営委 員会委員長 (二〇一〇年)
- 二〇〇九年 財団法人アジア人口開発協会 評議員 (二〇一六年)
- 二〇一一年 大同生命文化財団地域研究賞選考委員会 委員長 (二〇一二年)
- 一九九七年 第一回国際開発研究大来賞『開発経済 論』(国際開発機構)
- 二〇〇一年 第一八回大同生命地域研究奨励賞(大同 生命国際文化基金)
- 二〇〇五年 ラオス政府国際協力貢献賞(ラオス政 府)
- 二〇一一年 叙正四位、瑞宝中綬章

【受賞】

- 一九八六年 アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞 『クリフォード・ギアツの経済学』(アジ ア経済研究所)
- 一九九六年 第一二回大平正芳記念賞『東南アジア諸

4 著作・論文・寄稿文 目録

年	書籍タイトル(シリーズ名他)	発行者/出版社
一九八五	クリフォード・ギアツの経済学―アジア研究と経済理論の間で(社会科学の冒険四)	リプロポート
一九九二	アジア経済論の構図―新古典派開発経済学をこえて(社会科学の冒険一三)	リプロポート
一九九四	東南アジア諸国の経済発展―開発主義的政策体系と社会の反応	東京大学東洋文化研究所
一九九六	開発経済論	岩波書店
一九九六	アジア・ダイナミズム―資本主義のネットワークと発展の地域性	NTT出版
一九九九	グローバルイズムの終宴―アジア危機と再生を読み解く三つの時間軸	NTT出版
一九九九	エリア・エコノミックス―アジア経済のトポロジー	NTT出版
二〇〇〇	アジア型経済システム―グローバルイズムに抗して(中公新書)	中央公論新社
二〇〇一	現代アジア経済論	岩波書店

書籍(単著)

二〇〇二	開発経済論(第二版)		岩波書店
二〇〇二	新東亜論		N T T 出版
二〇〇五	東アジア経済戦略―文明の中の経済という視点から		N T T 出版
二〇〇六	「農」をどう捉えるか―市場原理主義と農業経済原論(社会科学の冒険Ⅱ期一)		書籍工房早山
二〇〇七	北の大地・南の列島の「農」―地域分権化と農政改革(社会科学の冒険Ⅱ期三)		書籍工房早山
二〇一三	アジアの「農」日本の「農」―グローバル資本主義と比較農業論(社会科学の冒険Ⅱ期八)		書籍工房早山

書籍(共著・編著)

年	書籍タイトル(シリーズ名他)	共著者/編者	発行者/出版社
一九八六	中部タイ稲作農村の経済変容	山田三郎他共著	東京大学東洋文化研究所
一九八六	東南アジアからの知的冒険:シンボル・経済・歴史(社会科学の冒険五)		リプロポート
一九九七)	岩波講座「開発と文化」全七巻	川田順造他と共編	岩波書店
一九九九	アジア経済論		N T T 出版
一九九九	ヴェトナムの市場経済化	石川滋と共編	東洋経済新報社
二〇〇〇	地域発展の固有論理		京都大学学術出版会
二〇〇一	アジア経済論新版		N T T 出版
二〇〇一	Study on the Economic Development Policy in the Transition toward a Market-oriented Economy, in The Socialist Republic of Viet Nam. 3 Volumes	Shigeru Ishikawa	Ministry of Planning and Investment, Japan International Cooperation Agency

年	書籍タイトル(シリーズ名他)	共著者/編者	発行者/出版社
二〇〇一	Alternative Way of Development in the Lao PDR	Thongloun Sisoulith	Committee for Planning and Cooperation, Lao People's Democratic Republic, Japan International Cooperation Agency
二〇〇五	Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR 2 Volumes		Committee for the Planning and Investment, Lao People's Democratic Republic—Japan International Cooperation Agency

論文・研究報告等

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
一九六八年六月	比較生産費説の現代的意義―後進国経済問題と国際分業論との関係について		農業経済研究
一九七二年三月	地域経済学ノート	熊倉修	『国民経済』No.一二五・一二六合併号
一九七二年六月	総供給関数と総需要関数 ―『一般理論』理解上の一論点―	荏開津典生	東京大学農学部農業経済学教科編『農業経済論集』
一九七四年一月	新しい経済史について―アジア研究との関連		『アジア研究』第二〇巻第四号

一九七四年二月	インドネシアのインフレーションと経済成長一九六〇―一九六九：経済発展の機構と実証分析（その一）		『東洋文化研究所紀要』No.六二
一九七四年六月	村落構造の経済理論―共同行動の経済学的説明の方向について		『アジア研究』第二一卷第二号
一九七五年三月	インドネシアにおける政治的リーダーシップと経済政策―経済発展の機構と実証分析（その序）		『東洋文化研究所紀要』No.六七
一九七五年八月	インドネシアの米穀経済と技術移転―技術定着と村落構造		斎藤一夫編『発展途上国への農業協力』アジア経済研究所
一九七五年九月	教育経済学の展開―経済的不平等化のメカニズムの研究を中心にして		『アジア経済』
一九七六年三月	ジャワ米穀経済への高収量品種の移転・普及・定着：経済発展の機構と実証分析（その二）		『東洋文化研究所紀要』No.六九
一九七七年	アジアにおける食糧需要の諸問題	石田正昭	長谷山崇彦編『アジアの食糧需給と国際協力』アジア経済研究所
一九七七年三月	アジアにおける米備蓄戦略		長谷山崇彦編『アジアの食糧需給と国際協力』アジア経済研究所
一九七八年三月	過渡的経済成長の類型化：東南アジア経済発展の比較研究（その一）		『東洋文化研究所紀要』No.七四
一九七九年七月	アジアの稲作技術革新と農村社会の変容―経済学的理論仮説の定立		長谷山崇彦編『アジアの稲作技術革新と米穀需給展望』アジア経済研究所
一九八〇年七月	ASEAN諸国の一次産品輸出と経済成長		今岡日出紀編『ASEAN諸国輸出一次産品の需給構造』アジア経済研究所

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
一九八一年二月	経済成長の加速度化：マレーシアと韓国との比較		『東洋文化研究所紀要』No.八五
一九八一年	二者関係経済における労働市場の構造：タイ国工業化論争説		『東洋文化研究所紀要』No.八七
一九八一年	Institutional Change in A Central Thai Village		The Development Economies, Vol.19, No.4
一九八一年八月	マレーシアの労働事情		日本労働協会編『マレーシアの労働事情：新経済政策と労働・社会の実態』
一九八二年一月	日本農業の国際競争力を論じる視点		『農業と経済』
一九八二年	移転技術の定着と伝統的社会秩序		川野重任編『技術移転と文化摩擦』大明堂
一九八二年	技術移転と文化摩擦―要約と政策提案		川野重任編『技術移転と文化摩擦』大明堂
一九八二年	もうひとつの経済摩擦―東南アジアと日本		『季刊現代経済』SUMMER一九八二
一九八二年一〇月	人口高成長下の経済開発		『経済セミナー』
一九八二年一二月	タイ農村における労働雇用契約の形態		『東洋文化研究所紀要』No.九〇
一九八三年一月	アジア諸国の農業・食糧政策の展開		山田三郎編『食糧需給の将来と農業政策』アジア経済研究所

一九八三年一月	食糧需給分析のモデル	舘齊一郎	
一九八三年一月	米の供給分析	本台進	
一九八三年一月	一九九〇、二〇〇〇年における米の需給展望	本台進・清水昂一・舘齊一郎	
一九八五年	タイ国における工業化戦略と労働市場―新古典派開発戦略の批判的検討		渡辺利夫編『アジア諸国経済発展の機構と構造』アジア経済研究所
一九八五年十一月	基本法農政下の農産物輸入		逸見謙三・加藤讓共編『基本法農政の経済分析』明文書房
一九八六年十二月	タイにおける農業機械産業の展開		山田三郎編『アジアの農村工業』アジア経済研究所
一九八七年三月	東南アジア農村社会論 地域研究と経済理論		東南アジア研究会編『社会科学と東南アジア』勁草書房
一九八七年三月	経済ナショナリズム論―タイ国の日本批判を事例として		『東洋文化研究所紀要』No.104
一九八七年十一月	タイにおける就業構造		
一九八七年十二月	Agricultural Development and Policy in Modern Japan: Lessons for Asian Developing Countries Population and Agricultural Development in Japan		The Asian Population and Development Association
一九八八年一月	アジアの経済発展と経済理論		『経済セミナー』
一九八八年十二月	近代日本農業発展と現代アジア諸国への関連性		『日本の人口と農業発展』アジア人口開発協会
一九九〇年一月	アジア地域における国際労働移動		『日本労働研究雑誌』

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
一九九〇年二月	Institutional Economics Approach to Economic Development: Implication from the Studies of Japan's Modern Economic Growth		『東洋文化研究所紀要』No.111
一九九〇年	Agricultural Development and Policy in Modern Japan		The Economic Development of Japan and Korea: A Parallel with Lessons. Chung H. Lee and Ipppei Yamazawa. Praeger
一九九〇年三月	発展途上国をとりまく国際経済システムの構図		IDC Forum No.7
一九九一年四月	近現代史からの日本型市場経済の構図		『経済研究』第四二巻第二号
一九九一年	農地改革下における農村開発政策の方向―フィリピン の事例より―	福井清一・清水展	『九大農学芸誌』第四五巻第三・四号
一九九二年一月	アジア地域の発展途上国における経済開発と環境保護 の接点		『資源環境対策』二八(一)
一九九二年三月	東南アジア比較経済論の構図		『東洋文化研究所紀要』No.116
一九九二年八月	イスラーム経済論(シリーズ・イスラームの都市性)		『学術月報』四五(八)
一九九三年	An Economic Analysis of Rural Informal Credit Market with Reciprocity	Seichi Fukui	Journal of the Faculty of Agriculture, Kyusyu University. 38 (1・2)
一九九三年一月	東アジア型市場経済のシステムの特徴(特集アジア NIES労働問題の諸相)		『大原社会問題研究所雑誌』(四一〇)

一九九三年六月	イスラーム経済論		板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』日本学術振興会 『創文』三四六号
一九九三年八月	市場経済発展の普遍性と固有性		猪木武徳・高木保興編著『アジアの経済発展—ASEAN・NIES・日本』同文館
一九九三年	マレーシアのプミプトラ政策		
一九九四年九月	市場経済は中国に根づくか		『経済セミナー』
一九九五年三月	農業発展論の反新古典学派的視座を求めて		米倉等編『不完全市場下のアジア農村—農業発展における制度適応の事例』アジア経済研究所研究双書No.四五二
一九九六年	市場経済をどうとらえるか		荏開津先生退官記念出版会編『変わる食料・農業政策—市場の機能と政府の役割』大明堂
一九九六年九月	経済システムの進化と東アジア		『経済セミナー』
一九九七年一〇月	現代の開発思想「いまなぜ」開発と文化なのか」		岩波講座『開発と文化一』岩波書店
一九九七年一〇月	グローバルリズムとナショナリズム・東南アジア		川田順造・上村忠男編『文化の未来—開発と地球化のなかで考える』未来社
一九九八年二月	タイにおける経済成長・所得分配・民主主義—「東アジアの奇跡」論再考		南亮進他編『デモクラシーの崩壊と再生—学際的接近』日本経済評論社

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
一九九八年三月	経済・社会・生態力学の構築にむけて		『農村研究』第八六号
一九九八年三月	開発と環境—東南アジアを中心に—「地球の環境と開発」		岩波講座『開発と文化五』岩波書店
一九九八年四月	多相的自由主義ルールの構図「人類の未来と開発」		岩波講座『開発と文化七』岩波書店
一九九八年一〇月	東アジア経済危機の読み方		『国際協力研究』
一九九八年一月	ASEAN4の経済成長と通貨・金融危機		大蔵省財政金融研究所編『ASEAN4の金融と財政の歩み—経済発展と通貨危機』
一九九九年二月	経済発展の地域性の解明にむけて—タイ経済社会の強さと弱さの考察から		坪内良博編著『総合的地域研究』を求めて—東南アジア像を手がかりに—京都大学学術出版会
一九九九年三月	「商人と国家」の経済学—経済史の地域性		『商人と市場—ネットワークの中の国家』（岩波講座世界歴史一五）、岩波書店
一九九九年七月	農業・農村開発—米を中心に—		石川滋・原洋之介編『ヴェトナムの市場経済化』東洋経済新報社
二〇〇〇年三月	経済システム進化の多様性—「自由主義プロジェクト」の運命		原洋之介編著『地域発展の固有論理』京都大学学術出版会
二〇〇〇年一〇月	我が国の政府開発援助と世界銀行		大野泉著『世界銀行—開発援助戦略の変革』序文、NTT出版

二〇〇一年四月	世界史の中のアジア経済―グローバルイズムと地域性の経済学		成城大学経済研究所『経済研究所年報一四号』
二〇〇一年七月	今なぜギアーツの「インポリューション」か？		クリフォード・ギアーツ著（池本幸生訳）『インポリューション…内に向かう発展』解説、N T T 出版
二〇〇一年十二月	アジアから世界の成り立ちを見る―経済の領域で		東京大学東洋文化研究所編『アジアを知らば世界が見える』小学館
二〇〇二年八月	開発経済学と「日本の経験」		社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣
二〇〇三年一月	講演 開発経済学からみた日本経済史の個性		『経済史研究』大阪経済大学日本経済史研究所
二〇〇三年三月	序 アジア学の方法とその可能性―ひとつの覚え書き		東京大学東洋文化研究所編『アジア学の将来像』東京大学出版会
二〇〇四年三月	世界のなかのアジア経済グローバルイズムと地域性の経済学		村本孜編著『グローバルゼーションと地域経済統合』蒼天社出版
二〇〇四年四月	東アジアにおける経済統合を考える		『東亜』
二〇〇四年四月	Convergence of Economic Systems is the Key		Japan Echo
二〇〇四年	Convergence of Diverse Economic System-Institutions in East Asia		Annals of Japan Association for Middle East Studies No.20-1
二〇〇五年二月	監訳者解題 本書の知的魅力		『ジョン・トワイ 開発のダイレンマ』同文館出版

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
二〇〇五年三月	ラオスの経済政策「地域経済アプローチを踏まえた政策の一貫性分析」		国際協力銀行開発金融研究所
二〇〇五年五月	途上国と開発支援		日本経済新聞社編『歴史から読む現代経済』日本経済新聞社
二〇〇五年七月	日本農業経済学の「旧くて新しい」課題		泉田洋一編『近代経済学的農業・農村分析の五〇年』農林統計協会
二〇〇五年六月	リーディング・ガイド 私の選んだ五冊 東南アジア地域研究		『地域研究』七巻一号
二〇〇五年七月	「21世紀の開発」論に向けて		新崎盛暉ほか編『地域の自立とシマの力上』コモンズ
二〇〇八年三月	東アジアの中での日本の食料安全保障とは…流通革命・環境悪化・国際協力の視点から		『ERINA REPORT』（環日本海経済研究所）VOL.80
二〇一一年三月	グローバル化時代におけるメゾ・エコノミックスの課題		『農業問題研究』地域農林経済学会、第一八一号、第四六巻・第四号
二〇一一年三月	一橋大学のアジア学 赤松要のアジア経済論を軸にして 日本のアジア地域研究シリーズ No.8 アジアの中の中東―経済と法を中心に		一橋大学大学院経済学研究科 編集・プロジェクト事務局
二〇一三年三月	開発経済学の視点―過剰就業論を題材として		牛島利明・斎藤修編『数量経済史の原点―近代移行期の長州経済』慶応義塾大学出版会

二〇一五年三月	「開発の罫」をどう捉えるかーアジア・ダイナミズム再考		政策研究大学院大学 原研究室
二〇一五年九月	石川開発経済学から何を引き継ぐべきかーベトナム農業・農村研究の展望を踏まえて		『アジア経済』第五六巻第三号
二〇一七年二月	戦前期日本の近代経済成長再考ー農商務省の政策理念の変遷に焦点をあてて		政策研究大学院大学原研究室
二〇一七年二月	東南アジアの政治と経済ー多様な地域の歴史を歩く		政策研究大学院大学原研究室
二〇一八年二月	アダム・スミスの「豊かさへの自然な道筋」論をどう読むかー「資本主義と農業」論再考		政策研究大学院大学原研究室
二〇一八年二月	ペザンティズム農政ー近現代日本農政思想をどう継承するのか		政策研究大学院大学原研究室
二〇一八年二月	比較アジア経済論を求めてー「農業経済学からアジア研究へ」の研究遍歴を振り返って		政策研究大学院大学原研究室
二〇一八年二月	ヒックス「経済史の理論」再考ー比較市場経済論の理論的基盤を求めて		政策研究大学院大学原研究室
二〇二一年一月	二一世紀のアジア経済をどう捉えるかーアジア・ダイナミズム再考ー長い歴史的パースペクティブの下に（政策研究院アジア研究報告Ⅰ）		政策研究大学院大学政策研究院
二〇二一年一月	日本経済の一五〇年ー成長局面移行に伴う成長政策と政策理念の変遷に焦点をあてて（政策研究院アジア研究報告Ⅱ）		政策研究大学院大学政策研究院

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
二〇二一年一月	東南アジア経済の五〇年ー成長局面の移行と開発政策の変遷（政策研究院アジア研究報告Ⅲ）		政策研究大学院大学政策研究院
二〇二一年一月	中国経済の五〇年（政策研究院アジア研究報告Ⅳ）		政策研究大学院大学政策研究院
二〇二一年一月	インド経済の七〇年（政策研究院アジア研究報告Ⅴ）		政策研究大学院大学政策研究院

科研費報告書

年月	タイトル・シリーズ名	共著者	誌名・編者
一九八九年一〇月	イスラーム経済論の方法		重点領域研究・イスラームの都市性研究報告第三一号
一九九〇年三月	東アジア経済論の構図		重点領域研究・東アジア比較研究『儒教文化圏の経済と社会』
一九九三年三月	地域研究と経済学ー経済発展の地域性の解明をめざしてー「地域発展の固有論理」班研究報告		重点領域研究・総合的地域研究成果報告
一九九四年三月	フィリピン農地改革の研究ー地域開発論的接近ー		日本学術振興会・国際共同研究成果報告
一九九五年三月	「地域発展の固有論理」班研究成果 ○経済自由主義ルールの新たる構図を求めて ○経済・社会・生態力学の構築にむけて		重点領域研究・総合的地域研究成果報告

年	タイトル	編者・出版社
一九六八年三月	大内力「農業経済論」	『農業経済研究』第三九卷第四号
一九七三年五月	A.C.ケリー、J.G.ウイリアムソン 構造と成長：日本経済進歩に関する簡単な寓話	大川一司・速水祐次郎編『日本経済の長期分析：成長・構造・波動』日本経済新聞社
一九七五年一〇月	川野重任編「アジアの近代化」	『史学雑誌』第八四編第一〇号
一九七七年九月	日本農業成長分析のアジア農業研究への移転可能性―書評：Hayami A Century of Agricultural Growth in Modern Japan	『アジア研究』
一九七九年二月	鳥居泰彦著「経済発展論」	『アジア経済』第二〇卷第二号
一九八〇年二月	村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎「文明としてのイエ社会」	『日本経済研究センター会報』
一九八〇年四月	Takashi Tomosugi, A Structural Analysis of Thai Economic History : Case Study of Northern Chao Phraya Delta Village	『アジア研究』第二七卷第一号
一九八一年	世界の食糧・栄養研究：研究の潜在的寄与	National Academy of Sciences (U.S.) 農政調査委員会
一九八三年七月	新谷正彦著「日本農業の生産慣習分析」	『エコノミスト』
一九八四年	近代経済学へのアジアからの挑戦	中央公論 新年号
一九八五年二月	Y. Hayami and M. Kikuchi, Asian Village Economy at the Crossroads	『季刊理論経済学』
一九九〇年七月	ハリー・T・オーシマ著「モンスーン・アジアの経済発展」	『経済セミナー』
一九九二年九月	沢田収二郎「日本農業における技術進歩の計測」	『農業経済研究』第六四卷第二号

年	タイトル	編者・出版社
一九九六年一二月	テイク・オフからソフト・ランディングへ	『農業と経済』
一九九七年三月	脱植民地化経済	京都大学東南アジア研究センター編
一九九七年三月	世界システムの開発思想	『事典東南アジア・風土・生態・環境』 弘文堂
一九九七年三月	都市文明	
一九九七年三月	国境をこえる経済活動	
一九九七年三月	海外出稼ぎ	
一九九七年八月	服部民夫・佐藤幸人編「韓国・台湾の発展メカニズム」	『アジア経済』第三八卷第八号
一九九七年	アジアを普遍主義で律する危険―多様な地域・文明の共存しかなかった道はない	文藝春秋編「日本の論点一九九七年版」
一九九八年八月	絵所秀紀著「開発の政治経済学」	『アジア経済』第三九卷第八号
一九九八年	東アジア通貨危機は安易にグローバリズムを受け入れた結果の象徴である	文藝春秋編「日本の論点一九九八年版」
一九九九年	経済	石井米雄他編「新訂増補東南アジアを知る事典」平凡社
一九九九年九月	アジア、普遍主義に対抗を―経済地域性を重視してグローバル市場化は幻想	日本経済新聞、経済教室
一九九九年一〇月	二十世紀末の韓国経済	『大航海』No.三〇
一九九九年十二月	アマルティア・セン著「不平等の再検討」	『経済セミナー』No.五三九
二〇〇〇年	モラル・エコノミー／ポリティカル・エコノミー	猪口孝他編『政治学辞典』弘文堂

二〇〇〇年	地域独自の市場性を無視したグローバル化はアジア経済を回復させない	文藝春秋編『日本の論点二〇〇〇年版』
二〇〇二年一〇月	岡崎哲二編「取引制度の経済史」	『経済学論集』第六八巻第三号
二〇〇二年一二月	新しい視点からの開発と環境	沖縄タイムス 朝刊
二〇〇三年一月	シンポジウム「開発・援助を考える」に寄せて	琉球新報 朝刊
二〇〇三年三月	米国流一極グローバルイズムに対抗する東アジアコミュニティ設計の戦略ノート	『SAPIO』三月一二日号
二〇〇四年三月	安場保吉「東南アジアの経済発展」	『社会経済史学』第六九巻第六号
二〇〇四年八月	ウィリアム・イースタリー著、小浜他訳「エコノミスト南の貧困と闘う」	『エコノミスト』
二〇〇四年八月	東西南北FTAと農業に関するふたつの論点	『農業と経済』
二〇〇五年一月	経済制度の調和こそが鍵	『日本経済新聞』一月六日

雑誌寄稿文

【JAPAN CURRENTS】

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
一九九七年一月	How Should Asian Economic Dynamism be Interpreted?	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.1	日本国民文化研究所
一九九七年二月	The Vietnamese Economy : Facing a Dangerous Trade-off	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.2	日本国民文化研究所

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
一九九七年三月	The Chinese Economic Cycle of "Rand" and "Shou"	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.3	日本国民文化研究所
一九九七年四月	ASEAN Emerging in Shadow of Globalization	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.4	日本国民文化研究所
一九九七年五月	South Korea Chases the Illusion of Globalization	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.5	日本国民文化研究所
一九九七年六月	Hong Kong as China's Gateway ^①	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.6	日本国民文化研究所
一九九七年七月	Hong Kong - The Core of China's Network Economy	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.7	日本国民文化研究所
一九九七年八月	Reading Asia After the Reversion of Hong Kong	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.8	日本国民文化研究所
一九九七年十一月	Currency Crisis and Economic Growth in East Asia	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.11	日本国民文化研究所
一九九七年十二月	The Illusion Imparted to East Asia by the Domino Effect of Liberalization	JAPAN CURRENTS Vol.1 No.12	日本国民文化研究所

【発言者】

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
一九九五年十二月	現代アジアをどう捉えるかー開発経済学的アジア論をこえて	発言者 第一九号	秀明出版会

一九九六年九月	アメリカニズムにのつとられたアジア論をこえて	発言者	第二九号	秀明出版会
一九九七年一月	経済のグローバルイゼーションのなかで崩壊をはじめた都市バンコク	発言者	第三三号	秀明出版会
一九九七年八月	東アジア新興市場経済という物語の終わり	発言者	第四〇号	秀明出版会
一九九九年一月	IMF主催の宴は終わった	発言者	第五七号	秀明出版会
二〇〇〇年一月	地域を括り出す旅	発言者	第六九号	秀明出版会
二〇〇〇年二月	地域を括り出す旅 (二) 赤米と独立の志士	発言者	第七〇号	秀明出版会
二〇〇〇年三月	地域を括り出す旅 (三) パッタナーとワッタナタム	発言者	第七一号	秀明出版会
二〇〇〇年四月	地域を括り出す旅 (四) パンチャシラとイスラーム	発言者	第七二号	秀明出版会
二〇〇〇年五月	地域を括り出す旅 (五) ドイ・モイと紅河デルタ	発言者	第七三号	秀明出版会
二〇〇〇年六月	地域を括り出す旅 (六) 内陸国ラオスの経済とパテト・ラオ將軍	発言者	第七四号	秀明出版会
二〇〇〇年七月	地域を括り出す旅 (七) オアシス都市とバザール・マハラ	発言者	第七五号	秀明出版会
二〇〇〇年八月	地域を括り出す旅 (八) 中華なる世界単位	発言者	第七六号	秀明出版会
二〇〇〇年九月	地域を括り出す旅 (九) 世紀末大改革と両班	発言者	第七七号	秀明出版会
二〇〇〇年一〇月	地域を括り出す旅 (一〇) 砂漠、海と野	発言者	第七八号	秀明出版会
二〇〇〇年十一月	地域を括り出す旅 (一一) 利子のない銀行	発言者	第七九号	秀明出版会
二〇〇〇年十二月	地域を括り出す旅 (一二) ヒンドゥー文明と社会進化論	発言者	第八〇号	秀明出版会
二〇〇一年一月	地域を括り出す旅 (一三) 地域柄を確認する時代	発言者	第八一号	秀明出版会
二〇〇一年二月	地域を括り出す旅 (一四) 東南アジア流の地域共同体	発言者	第八二号	秀明出版会
二〇〇一年三月	地域を括り出す旅 (一五) 古典文明と近代文明	発言者	第八三号	秀明出版会
二〇〇一年四月	地域を括り出す旅 (一六) フィリピン・パラドックス	発言者	第八四号	秀明出版会

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社	
二〇〇一年五月	地域を括り出す旅 (一七) マレー・ディレンマ	発言者	第八五号	秀明出版会
二〇〇一年六月	地域を括り出す旅 (一八) ラオスの経済政策への知的支援	発言者	第八六号	秀明出版会
二〇〇一年七月	地域を括り出す旅 (一九) 中華帝国の内と外	発言者	第八七号	秀明出版会
二〇〇一年八月	地域を括り出す旅 (二〇) 構造改革とは何か (特集 公心なき公選のゆくえ)	発言者	第八八号	秀明出版会
二〇〇一年九月	地域を括り出す旅 (二一) 経済の解釈学	発言者	第八九号	秀明出版会
二〇〇一年一〇月	地域を括り出す旅 (二二) 覇権的グローバルイズムに抗する (特集 資本「主義」のダッチロール)	発言者	第九〇号	秀明出版会
二〇〇一年十一月	地域を括り出す旅 (二三) 国柄・地域柄を守る思想を求めて	発言者	第九一号	秀明出版会
二〇〇一年十二月	地域を括り出す旅 (二四) ユーラシア・バルカンとイスラーム (特集 国家なきところに原理と暴力が栄える)	発言者	第九二号	秀明出版会
二〇〇二年一月	地域を括り出す旅 (二五) 二一世紀世界秩序の基盤を求めて	発言者	第九三号	秀明出版会
二〇〇二年二月	地域を括り出す旅 (二六) 東アジア共同体なるものは可能か	発言者	第九四号	秀明出版会
二〇〇二年三月	地域を括り出す旅 (二七) 日本文明の来歴と経済システム	発言者	第九五号	秀明出版会
二〇〇二年四月	地域を括り出す旅 (二八) アジア学の可能性―「生活世界」の構想	発言者	第九六号	秀明出版会
二〇〇二年五月	地域を括り出す旅 (二九) 「沖縄地域学」入門の旅 (特集「地域」―「保守」の命運を左右するもの)	発言者	第九七号	秀明出版会
二〇〇二年六月	地域を括り出す旅 (三〇) 新東亜論	発言者	第九八号	秀明出版会
二〇〇二年七月	地域を括り出す旅 (三一) メコン中流のほとり	発言者	第九九号	秀明出版会
二〇〇二年八月	地域を括り出す旅 (三二) 主流派経済学とは	発言者	第一〇〇号	秀明出版会

二〇〇二年九月	地域を括り出す旅 (三三三) オリエンタル・オリエンタリズム	発言者 第一〇一号	秀明出版会
二〇〇二年一〇月	地域を括り出す旅 (三四四) 帝国主義イデオロギーと地域開発 (特集『帝国主義論』が甦るのか)	発言者 第一〇二号	秀明出版会
二〇〇二年十一月	地域を括り出す旅 (三五五) バリで「国家」を想う	発言者 第一〇三号	秀明出版会
二〇〇二年十二月	地域を括り出す旅 (三六六) 農業問題を考える	発言者 第一〇四号	秀明出版会
二〇〇三年一月	地域を括り出す旅 (三七七) 国民経済論の復権をー東アジア経済統合を前に (特集 独立自尊の欣求ー世界が危機に溺れる中で)	発言者 第一〇五号	秀明出版会
二〇〇三年二月	地域を括り出す旅 (三八八) 「開発の時代」が終わった沖縄と北海道	発言者 第一〇六号	秀明出版会
二〇〇三年三月	地域を括り出す旅 (三九九) 「単純化の罟」から抜け出せない経済学	発言者 第一〇七号	秀明出版会
二〇〇三年四月	地域を括り出す旅 (四〇〇) 歴史圏に呪縛され続けるカンボジア	発言者 第一〇八号	秀明出版会
二〇〇三年五月	地域を括り出す旅 (四一一) 二十一世紀はじめの東南アジア	発言者 第一〇九号	秀明出版会
二〇〇三年六月	地域を括り出す旅 (四二二) 「世界のアメリカ化」プロジェクトに抗する (特集 迷走する国際秩序ー協調と覇権の平衡をめざせ)	発言者 第一一〇号	秀明出版会
二〇〇三年七月	地域を括り出す旅 (四三三) 内村鑑三の「日本の天職」論	発言者 第一一一号	秀明出版会
二〇〇三年八月	地域を括り出す旅 (四四四) 「二十一世紀の今、保守的である」とは (特集 ネオコンー新世紀の新病理)	発言者 第一一二号	秀明出版会
二〇〇三年九月	地域を括り出す旅 (四五五) 柳田国男の「転向」	発言者 第一一三号	秀明出版会
二〇〇三年一〇月	地域を括り出す旅 (四六六) ジャール平原でベトナム戦争を想う	発言者 第一一四号	秀明出版会
二〇〇三年十一月	地域を括り出す旅 (四七七) ムラユ社会とイスラム	発言者 第一一五号	秀明出版会
二〇〇三年十二月	地域を括り出す旅 (四八八) 東アジア地域主義を巡る言説の危うさ	発言者 第一一六号	秀明出版会
二〇〇四年一月	地域を括り出す旅 (四九九) 東アジア経済共同体論再考	発言者 第一一七号	秀明出版会

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇〇四年二月	地域を括り出す旅 (五〇〇) 平成一五年十二月第二週 (特集 名誉と恥辱ー自衛隊派遣の政治学)	発言者 第一一八号	秀明出版会
二〇〇四年三月	地域を括り出す旅 (五一二) 世界政治経済の文明地図を描く (その一) (特集 擬似帝国どものパワーゲームーその十字砲火にどう耐えるか)	発言者 第一一九号	秀明出版会
二〇〇四年四月	地域を括り出す旅 (五二二) 世界政治経済の文明地図を描く (その二) (特集 世界破壊の跡始末)	発言者 第一二〇号	秀明出版会
二〇〇四年五月	地域を括り出す旅 (五三三) 北朝鮮・台湾を巡る米中合意	発言者 第一二一号	秀明出版会
二〇〇四年七月	地域を括り出す旅 (五四四) 世界政治経済の文明地図を描く (その三)	発言者 第一二三号	秀明出版会
二〇〇四年八月	地域を括り出す旅 (五五五) 世界政治経済の文明地図を描く (その四)	発言者 第一二四号	秀明出版会
二〇〇四年九月	地域を括り出す旅 (五六六) 世界政治経済の文明地図を描く (その五)	発言者 第一二五号	秀明出版会
二〇〇四年一〇月	地域を括り出す旅 (五七七) フィリピンとスペイン、アメリカ	発言者 第一二六号	秀明出版会
二〇〇四年十一月	地域を括り出す旅 (五八八) 世界政治経済の文明地図を描く (六) 西ヨーロッパ世界の多様性 (特集 破られた文明地図)	発言者 第一二七号	秀明出版会
二〇〇四年十二月	地域を括り出す旅 (五九九) 世界政治経済の文明地図を描く (その七) アメリカ文明の例外性	発言者 第一二八号	秀明出版会
二〇〇五年一月	地域を括り出す旅 (六〇〇) 久し振りの旅でミャンマーの民主化を考える	発言者 第一二九号	秀明出版会

二〇〇五年二月	地域を括り出す旅(六一) 世界政治経済の文明地図を描く(最終章) 中国社秩序の特異性	発言者 第一三〇号	秀明出版会
---------	--	-----------	-------

【北の発言】

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇〇三年六月	「北の農」をたずねて(一) 新渡戸稲造の貴農論	北の発言 第一号	西部邁事務所
二〇〇三年八月	「北の農」をたずねて(二) アメリカ型を克服する農の空間を	北の発言 第二号	西部邁事務所
二〇〇三年一〇月	「北の農」をたずねて(三) 北海道農業発達史―明治から昭和前期	北の発言 第三号	西部邁事務所
二〇〇三年一二月	「北の農」をたずねて(四) 農政の基本理念を再考せよ	北の発言 第四号	西部邁事務所
二〇〇四年二月	「北の農」をたずねて(五) 甘蔗糖と甜菜糖	北の発言 第五号	西部邁事務所
二〇〇四年四月	「北の農」をたずねて(六) 農政の転換と農村の再建	北の発言 第六号	西部邁事務所
二〇〇四年六月	「北の農」をたずねて(七) 揺さぶられる「食の安全」	北の発言 第七号	西部邁事務所
二〇〇四年八月	「北の農」をたずねて(八) 市場原理への農政転換に異議あり	北の発言 第八号	西部邁事務所
二〇〇四年一〇月	「北の農」をたずねて(九) 国柄の基盤としての農	北の発言 第九号	西部邁事務所
二〇〇四年一二月	「北の農」をたずねて(一〇) ヨーロッパから学ぶ「農」のあり方	北の発言 第一〇号	西部邁事務所
二〇〇五年一月	「北の農」をたずねて(一一) 新渡戸稲造と明治の農政学者たち(一) 高岡熊雄	北の発言 第一一号	西部邁事務所
二〇〇五年三月	「北の農」をたずねて(一二) 新渡戸稲造と明治の農政学者たち(二) 横井時敬	北の発言 第一二号	西部邁事務所

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇〇五年五月	「北の農」をたずねて(二三) 新渡戸稲造と明治の農政学者たち(三) 柳田國男	北の発言 第一三号	西部邁事務所
二〇〇五年七月	「北の農」をたずねて(二四) 新渡戸稲造と明治の農政学者たち(四) 保守的農政論の原型	北の発言 第一四号	西部邁事務所
二〇〇五年九月	北の大地と南の列島の農(一) 非稲作社会であった北海道と沖縄	北の発言 第一五号	西部邁事務所
二〇〇五年一二月	北の大地と南の列島の農(二) 南北で異なった経済近代化のかたち	北の発言 第一六号	西部邁事務所
二〇〇六年一月	北の大地と南の列島の農(三) 北と南の「農の近代化」	北の発言 第一七号	西部邁事務所
二〇〇六年三月	北の大地と南の列島の農(四) 「開発の時代」の後に	北の発言 第一八号	西部邁事務所
二〇〇六年五月	北の大地と南の列島の農(五) 「アメリカ世」の沖縄農業	北の発言 第一九号	西部邁事務所
二〇〇六年七月	北の大地と南の列島の農(六) 北海道農業の危機と再生の道	北の発言 第二〇号	西部邁事務所
二〇〇六年九月	北の大地と南の列島の農(七) 本土復帰以降の沖縄農業	北の発言 第二一号	西部邁事務所
二〇〇六年一二月	北の大地と南の列島の農(八) 「内国植民地性」を脱しえない北海道農業	北の発言 第二二号	西部邁事務所
二〇〇七年一月	北の大地と南の列島の農(九) 「自由貿易」という名の不公平な世界貿易体制	北の発言 第二三号	西部邁事務所
二〇〇七年三月	北の大地と南の列島の農(一〇) 北海道農業の「近代化」とは何であったか	北の発言 第二四号	西部邁事務所
二〇〇七年五月	北の大地と南の列島の農(一一) 農業貿易自由化へ向けての農政改革	北の発言 第二五号	西部邁事務所

二〇〇七年七月	北の大地と南の列島の農（二二） 農政改革と北海道・沖縄農業の行方	北の発言 第二六号	西部邁事務所
二〇〇七年九月	北の大地と南の列島の農（二三） 北海道・沖縄の地域としての再生とは	北の発言 第二七号	西部邁事務所
二〇〇七年十一月	世界の多様な地域を訪ねて（二）「地域」の再発見を	北の発言 第二八号	西部邁事務所
二〇〇八年一月	世界の多様な地域を訪ねて（二） 世界市場に開かれたタイ・デルタの稲作農村	北の発言 第二九号	西部邁事務所
二〇〇八年三月	世界の多様な地域を訪ねて（三） ラオス山地の焼畑農耕社会	北の発言 第三〇号	西部邁事務所
二〇〇八年五月	世界の多様な地域を訪ねて（四） 西日本と似ているジャワ農村	北の発言 第三一号	西部邁事務所
二〇〇八年七月	世界の多様な地域を訪ねて（五） 台湾農業への歴史紀行	北の発言 第三二号	西部邁事務所
二〇〇八年九月	世界の多様な地域を訪ねて（六） 朝鮮農業の歴史的個性	北の発言 第三三号	西部邁事務所
二〇〇八年十一月	世界の多様な地域を訪ねて（七） 農業資本主義の地域―中国	北の発言 第三四号	西部邁事務所
二〇〇九年一月	世界の多様な地域を訪ねて（八） 中国の台頭に苦悩する内陸国ラオス	北の発言 第三五号	西部邁事務所
二〇〇九年三月	世界の多様な地域を訪ねて（九） 昭和恐慌期の北海道農業	北の発言 第三六号	西部邁事務所
二〇〇九年五月	世界の多様な地域を訪ねて（一〇） 北の大地から農業の構造改革論を考える	北の発言 第三七号	西部邁事務所
二〇〇九年七月	世界の多様な地域を訪ねて（一一） 割替田を持っていた紅河デルタ農村	北の発言 第三八号	西部邁事務所
二〇〇九年九月	世界の多様な地域を訪ねて（一二）「商の空間」メコン・デルタの農村	北の発言 第三九号	西部邁事務所

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇〇九年十一月	世界の多様な地域を訪ねて（最終回） 政権交代と北海道農業・農村の行方	北の発言 第四〇号	西部邁事務所
二〇一〇年一月	座談会「文明の荒廃の中で、いかに『覚悟』を決めるか」富岡幸一郎・東谷暁・原洋之介・西部邁	北の発言 終刊号	西部邁事務所

【表現者】

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇〇五年七月	アジアとの交わりを顧みて（一）／ビルマの独立と自立を求めたナシヨナリスト	表現者 第一号	イプシロン出版企画
二〇〇五年九月	アジアとの交わりを顧みて（二）／沖縄の求めるアイデンティティ	表現者 第二号	イプシロン出版企画
二〇〇五年十一月	アジアとの交わりを顧みて（三）／幻想の「東アジア共同体」	表現者 第三号	イプシロン出版企画
二〇〇六年一月	アジアとの交わりを顧みて（四）／アメリカ経済学の誤謬	表現者 第四号	イプシロン出版企画
二〇〇六年三月	アジアとの交わりを顧みて（五）／日本保守思想のカタチ―柳田國男の民俗学	表現者 第五号	イプシロン出版企画
二〇〇六年五月	アジアとの交わりを顧みて（六）／経済の国柄を再確認する（一）（特集 現代資本主義の荒廃 マモンは不法を好む）	表現者 第六号	イプシロン出版企画

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇〇八年一月	アジアとの交わりを顧みて（一六）日本を拘束し続ける「永遠の課題」	表現者 第一六号	ジョルダン
二〇〇八年三月	アジアとの交わりを顧みて（一七）東南アジアへの旅で学んだ「世界史の構図」	表現者 第一七号	ジョルダン
二〇〇八年五月	アジアとの交わりを顧みて（一八）「白人の責務」なる世界革命論	表現者 第一八号	ジョルダン
二〇〇八年七月	アジアとの交わりを顧みて（一九）日本型国民経済論の再構築を（特集グローバルマネーの末路）	表現者 第一九号	ジョルダン
二〇〇八年九月	アジアとの交わりを顧みて（二〇）我が孫たちに食料安全保障を	表現者 第二〇号	ジョルダン
二〇〇八年十一月	アジアとの交わりを顧みて（二二）我が孫たちに食料安全保障を（二二）	表現者 第二一号	ジョルダン
二〇〇九年一月	アジアとの交わりを顧みて（二二）再び世界大恐慌の時代を迎えて	表現者 第二二号	ジョルダン
二〇〇九年三月	アジアとの交わりを顧みて（二三）改めて雇用問題を考える	表現者 第二三号	ジョルダン
二〇〇九年五月	アジアとの交わりを顧みて（二四）我が国経済危機の淵源を読み解く	表現者 第二四号	ジョルダン
二〇〇九年七月	アジアとの交わりを顧みて（二五）環境問題をどう捉えるのか	表現者 第二五号	ジョルダン
二〇〇九年九月	アジアとの交わりを顧みて（二六）柳田國男の天皇論	表現者 第二六号	ジョルダン

二〇〇六年七月	アジアとの交わりを顧みて（七）／経済の国柄を再確認する（二）	表現者 第七号	イブシロン出版企画
二〇〇六年九月	アジアとの交わりを顧みて（八）オンリー・イエスタデイ	表現者 第八号	イブシロン出版企画
二〇〇六年十一月	アジアとの交わりを顧みて（九）沖縄とラオスとの連携	表現者 第九号	イブシロン出版企画
二〇〇七年一月	アジアとの交わりを顧みて（一〇）北京にて「中国」を考える（特集 中国とどう向き合うか）	表現者 第一〇号	イブシロン出版企画
二〇〇七年三月	アジアとの交わりを顧みて（一一）ブッシュ政権の正体を知る二冊の書物「フランシス・フクヤマ『岐路にたつアメリカ』、ジョセフ・E・ステイグリッツ『グローバルライゼーションを機能させる』」	表現者 第一一号	イブシロン出版企画
二〇〇七年五月	アジアとの交わりを顧みて（一二）見えはじめた西太平洋の地域秩序	表現者 第一二号	イブシロン出版企画
二〇〇七年七月	アジアとの交わりを顧みて（一三）部分的思考の罠に陥っている「エコノミスト」たち（特集 資本主義の行方―株主から会社をどう守るのか）	表現者 第一三号	イブシロン出版企画
二〇〇七年九月	アジアとの交わりを顧みて（一四）農政における保守的改革の道筋（特集 保守の政治は生き残れるか）	表現者 第一四号	イブシロン出版企画
二〇〇七年十一月	アジアとの交わりを顧みて（一五）カリフォルニアで垣間見たアメリカニズム（特集 アメリカは敵か味方か）	表現者 第一五号	イブシロン出版企画

二〇〇九年十一月	アジアとの交わりを顧みて（二七）「国体保持」を巡って揺れるタイ政治の教訓	表現者 第二七号	ジョルダン
二〇一〇年一月	アジアとの交わりを顧みて（二八）改めて保守思想の原型を求めて―柳田國男再読	表現者 第二八号	ジョルダン
二〇一〇年五月	アジアとの交わりを顧みて（二九）市場・民主「主義」という双子の虚構（特集 断末魔の民主主義）	表現者 第三〇号	ジョルダン
二〇一〇年七月	アジアとの交わりを顧みて（三〇）知性の離米と帰日を（特集 日米同盟を問い直せ）	表現者 第三一号	ジョルダン
二〇一〇年九月	アジアとの交わりを顧みて（三一）「操持」あふれる思想の復権を（特集 民主党よ、いつまで「革命ごっこ」をやるのか）	表現者 第三二号	ジョルダン
二〇一〇年十一月	「富国強兵論」の新たな構築を（特集 徴兵なき国家は滅びる）	表現者 第三三号	ジョルダン
二〇一一年一月	「尖閣」で露呈した国家統治の危機（特集「尖閣」を忘れるな―国家百年の計を立てよ）	表現者 第三四号	ジョルダン
二〇一一年三月	日本経済防衛に向けての保護の体系（特集 TPPは亡国への道）	表現者 第三五号	ジョルダン
二〇一一年五月	わが孫のためにも家族観の復権を（特集「自由」主義の落とし穴）	表現者 第三六号	ジョルダン
二〇一一年七月	特集座談会 文明内部の危機―制御不能な「破壊的創造」（特集 原発、文明、復興―近代の危機にどう向き合うか）	表現者 第三七号	ジョルダン

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇一一年七月	復興戦略の構想に際して忘れてはならないこと（特集 原発、文明、復興―近代の危機にどう向き合うか）	表現者 第三七号	ジョルダン
二〇一一年九月	沖繩で震災後の日本のあり方を考える（特集 戦後六六年目の大転換）	表現者 第三八号	ジョルダン
二〇一一年十一月	ドル基軸通貨体制の終焉に備えて（特集「地域」をいかに復興するか）	表現者 第三九号	ジョルダン
二〇一二年一月	再び「自由放任の終わり」を迎えて（特集 資本主義と文明…その絶望と希望）	表現者 第四〇号	ジョルダン
二〇一二年三月	「脱官僚」日本改造論の罨（特集「大阪都」の反乱を許すな）	表現者 第四一号	ジョルダン
二〇一二年五月	レジーム変革に動き出したミャンマーと大国の関与	表現者 第四二号	ジョルダン
二〇一二年七月	国土・地域を軸にした「保守事業」のための政策集団を（自民党に物申せば…日本再生のために）	表現者 第四三号	ジョルダン
二〇一二年九月	「退廃的なグローバル資本主義」に抗する「思想の前進」（特集 EUの没落…その致命的欠陥）	表現者 第四四号	ジョルダン
二〇一二年十一月	エリート「驕り」と「畏」（特集 文明の自殺…世界に広がる失政、失業そして失語）	表現者 第四五号	ジョルダン
二〇一三年一月	「台頭する中国」の読み方	表現者 第四六号	ジョルダン
二〇一三年三月	我が孫たちのために強靱な経済システムの再構築を	表現者 第四七号	ジョルダン
二〇一三年五月	タイ旅行で改めて我が国の来歴を思う	表現者 第四八号	ジョルダン

二〇一三年七月	アベノミクスを支える経済学の問題点	表現者	第四九号	ジョルダン
二〇一三年九月	戦死者が問いかけた家族の保持という難題	表現者	第五〇号	ジョルダン
二〇一三年十一月	国土保護の原点の再確認を	表現者	第五一号	ジョルダン
二〇一四年一月	新しい「脱亜論」の罫	表現者	第五二号	ジョルダン
二〇一四年三月	国内統治制度の正統性危機に揺らぐアジア	表現者	第五三号	ジョルダン
二〇一四年五月	高度情報化の破壊力	表現者	第五四号	ジョルダン
二〇一四年七月	タイ政治の混迷を見聞しながら「国家のゆくえ」を想う（特集 保守思想が再建する「国家と人間」）	表現者	第五五号	ジョルダン
二〇一四年九月	孫たちの世代の「文明の可能性」（特集 滅びを覚悟で戦う―国防の意志を高めよ）	表現者	第五六号	ジョルダン
二〇一四年十一月	改めて「自主外交」の基盤を考える（特集 米口対決―「大戦」の足音がする）	表現者	第五七号	ジョルダン
二〇一五年一月	シンポジウム 瀬戸際の日本外交―米中韓そしてロシアと如何にわたり合うか（特集「ポツダム」を超えて）	表現者	第五八号	ジョルダン
二〇一五年三月	「国民の盲動」による政治の危うさ（特集 プラトンに倣い、民主主義を疑え）	表現者	第五九号	ジョルダン
二〇一五年五月	ピケティ「U字型曲線」論（特集 資本主義の砂漠…ピケティ現象もその一角）	表現者	第六〇号	ジョルダン

発行年月	シリーズ名・タイトル	雑誌名	出版社
二〇一五年七月	鼎談 ついに臨界に達した沖縄問題（特集 沖縄…戦後ニッポンの鏡）	表現者 第六一号	ジョルダン
二〇一五年七月	ヤマトンチュウと「沖縄」（特集 沖縄―戦後ニッポンの鏡）	表現者 第六一号	ジョルダン
二〇一五年九月	安保関連法案審議で欠落しているもの（特集「戦争」のできない国民―見猿聞か猿言わ猿の七〇年）	表現者 第六二号	ジョルダン
二〇一五年十一月	戦後七十年を迎えて改めて確認すべきこと（特集 保守は「左翼」をいかに排すべきか）	表現者 第六三号	MXエンターテインメント
二〇一六年一月	明治維新百五十周年を前に改めて我が国のナショナリティを論じよう（特集 憲法改正は如何になすべきか）	表現者 第六四号	MXエンターテインメント
二〇一六年三月	原理主義ムスリムのテロを眼前にして（特集 テロの元凶は資本主義と民主主義）	表現者 第六五号	MXエンターテインメント
二〇一六年五月	非常事態に耐えうる強靱な国家のあり方を求めて（特集 保守思想による非常事態条項の提言）	表現者 第六六号	MXエンターテインメント
二〇一六年七月	民主主義革命と天皇制（特集 日本共産党とは何ものか）	表現者 第六七号	MXエンターテインメント
二〇一六年九月	大統領選挙戦に垣間見られるアメリカ社会の大変貌（特集 アメリカ…その覇権と孤立）	表現者 第六八号	MXエンターテインメント
二〇一六年十一月	継承されるべき天皇の「行為」とは…（特集 象徴天皇と日本の行方）	表現者 第六九号	MXエンターテインメント

二〇一七年一月	明治維新一五〇年を前に国土保全策の早急な構築を (特集 日本国の命運―立憲・核武装・保護主義・国民 主権をめぐる)	表現者 第七〇号	MXエンターテインメント
二〇一七年三月	現在のアメリカ経済は模範になりうるのか(特集 国 民主義なくして国際社会もない)	表現者 第七一号	MXエンターテインメント
二〇一七年五月	中国とアセアン、そして我が国(特集 世界破壊に乗 り出した米中露)	表現者 第七二号	MXエンターテインメント
二〇一七年七月	北朝鮮核武装を巡る国際政治と日本…その歴史的パー スパクティブ(特集 テクノマネーマニアックの時代 に…反乱は可能か)	表現者 第七三号	MXエンターテインメント
二〇一七年九月	イエ社会文明の終焉か?(特集 今、日本人論を)	表現者 第七四号	MXエンターテインメント
二〇一七年十一月	長年のアジア紀行を振り返って(特集 日本よ、何処 へ行くのか)	表現者 第七五号	MXエンターテインメント
二〇一八年五月	「Japan Currents」と「北の発言」(西部邁 永訣の 歌)	表現者 第七八号	MXエンターテインメント
二〇一八年十一月	農における新自由主義の脅威(リレー連載「農は国の 本なり」)	表現者 第八一号	MXエンターテインメント

御礼 思い出(視線 これから)

原洋之介妻・昭子

二〇二一年四月三日 夫・原洋之介は「急性心不全」で「午前二時頃」に急逝したと「推定され」ました。全くいつもと同じ平凡な日常の中で、頭痛で早めに就寝し、いつもとは違って翌朝六時過ぎ迄起床しなかつた妻を残して一人で旅立ちました。何故? どうして? と悩みました。

それでも夫の最後の仕事が政策研究大学院大学での授業であったことと、苦しんだのか等を全く感じさせない穏やかな表情をしていたことは大変大きな救いでした。原が心豊かにその人生を生きて静かに最後を迎

えられましたのは、政策研究大学院大学、東京大学、同大・東洋文化研究所、同大・情報学環その他の大
学、研究機関、行政や民間の経済・農業・福祉に関する組織等の皆様、そして例えばタイ・ラオス・ミャン
マー・インドネシア・フィリピン・ベトナム等諸外国
の方々(行政・大学関係、諸分野の専門家、留学生)、
親戚やお知り合いの皆様とのご厚誼を頂いた賜物と存
じております。厚く御礼申し上げます。

自覚しながらも止められなかったお酒と煙草、そして大きな声での議論が好き・笑い声は生涯変わりませ

んでした。喫煙スペースでの会話も大変楽しんだ様です。お仲間の方々に御礼申し上げます。

研究会では勿論、お酒の席で、日常の場面で思いついたことを辛辣な言葉や歯に衣着せぬ表現で申しあげていたことも本人から聞いています。ご迷惑やご心配をおかけしてしまった皆様はこの場をお借りしてお詫び申し上げます。お許しくださいませ。

本の読み方についてお話しします。家を購入する際「二応大学教授なのだから先ずは書齋を決めない」と。との私の言葉を遮って「書齋は要らん。本はどこでも読める。字もどこでも書ける。」と。口癖でした。確かに電車の中でもタクシーの車内でも全く平気で読んでいました。片方の手の指でまだ読んでいない頁の隅をパラパラ動かしながら。横の座席に座った私は、ただただチカチカするだけで少しも集中できずでした。周囲の騒がしい音にも良い意味で鈍感でした。

最近では夜中にがばつと起き上がり、「メモをして

おく。明日朝になったらきつと忘れているからネ」と言って再度パソコンや机に向かう事が増えていました。

子供が好きで、我が子や親せきの子供は勿論、余所様のお子さんにも、いとも優しい笑顔を見せていました。育児経験や（嬉しい）苦労をまるで自分が実践・体験したように話をして皆の笑いを誘ったり、茶々を入れられたりしたことも少なくないほどでした。何しろ、話好き、だったと思います。『人生で大事はみなみなゴソラから教わった』（山極寿一著、家の光教会刊）は孫が生まれてからの共通の愛読書です。いろいろな分野のことに興味・関心を持ち深めたと思う人でした。

視線と、これから、

皆様、遺影の写真ではそれを見つめるすべての角度から故人と視線を合わせられることをご存じでした

か？私は遺影を家に連れ帰って、いざお線香に点火して、。となって初めて「ン？」と気づきました。右に移って見る、左に移って見る、背伸びをして見る、しやがんで見る、常に目線が合います。見られています。見てくれています。涙が出てきました。

後日息子の妻が教えてくれました。「お義母さん、遺影ってどの角度からの会葬者の目線とも合うように加工されているんだそうですよ。」知りませんでした。意識していませんでした。なんと素敵な配慮！

起床後すぐから、夜の就寝迄に、楽しい・困った・驚いた・不思議！何故？等々これを、あれを話したいと思つて部屋のドアを開けて思い出します。「そうか。もうあなたは居ないのね。」有名な先人の言葉を拝借して思います。また涙が滲んできます。もう一人なのだ、と痛感させられます。

一九七七年初夏、私は初めて原の実家を訪ねました。通された部屋で私の視線は或る物に釘付けになり

ました。「創元社」の「世界少年・少女文学全集（全五〇巻）」、そしてその五〇巻完結後の「続・少年・少女世界文学全集第二部（全十八巻）」が本棚の一角を大きく占めていました。

その瞬間、何だかひどく嬉しくなりました。子供の頃に好きな物語を繰り返し読んでいたのを思い出させてくれた「全集」、中学生になるかならないかの早い時期から眼鏡が必要となる原因にもなった第二部に所蔵の「ジャックとジル」のお母さんに憧れ、こんな人・母になりたい、と思つたものでした。結婚を承諾して良かった、と勝手に思い込んだ一瞬でした。

義父はいわゆる「寮歌」が大好きでした。結婚の前後数年、暫くの間は晩酌の後で寮歌を合唱しながら皆と一緒に家のすぐそばの千種川の川縁りを歩いて上機嫌になっていました。私には大いに幸せを感じられるひと時でもありました。

一九七七年夏、家族全員での旅行のほかに娘とだけ

出かけることも数回ありました。例えば仙台・松島。原の出張仕事の終わった頃に娘が一人旅をして合流。進路の相談をしたらしいのです。大学卒業の前年にも、その後の進み方について相談をした模様です。頭の硬いお母さんと違って「人生は自分のもの。やりたいうことをやれば良い。応援するよ。その為の準備をしっかり。」と言われたとの事。二人の視線の先には何が見えて・見ていたのでしょうか。

三・一の大震災で甚大な被害を受けた東北地方には岩手県から仙台・松島を経て福島地方の各所を息子の運転で見て回りました。駆け足旅ではありませんが、いろいろ感慨深いものがありました。

二〇〇七年、当時米国に住んでいた息子を訪ねて夫婦で訪米。グランドキャニオンに、と私達としては随分大きな目標を立てて息子の運転でホテルを出発しました。サンフランシスコで朝食を、と入ったデニーズの駐車場。食べ終わって車を少し移動させたその時！

最後に原洋之介の旅立ちに際し、本集に温かで親身な、貴重なご文章をお寄せ下さいました皆様に、原洋之介に替わりまして、また私達遺族といたしまして衷心より御礼申し上げます。

お目にかかりましてご挨拶御礼を申し上げべきところ、略儀ながら本稿をもちまして替えさせていただきます。何卒お許しくださいませ。

今後私達は頂きました皆様のお気持ちを有り難く心に保ってこれからを生きて参りたいと改めて決心いたしております。特に私は不甲斐なくも未だに涙にくれる日・時もあります。もう暫く遺影と目線が合う間、頑張ってみたいと思っております。親子ともども今後ともよろしくお願い申し上げます。

二〇二二年二月二八日 感謝を込めまして。

原 昭子・遺族一同

乗り込まず待機していた原と私、二人の視線は道路の
一か所に釘付けになりました。まさかのオイル漏れ。
急いで修理屋に飛び込みました。メジャーリーガーの
ダルビッシュ投手に似たイラン出身という修理工のオ
ジサンが一人、昼飯時間も削って頑張ってくれました
が、夕刻まで十分にかかってその日は終了。思いがけ
ない大きな計画変更。世界有数の自然遺産、その偉大
さを体験することは諦めざるを得ませんでした。しか
しもし駐車場であの小さな染みに気づかなかつたら、
もし中途半端な修理のまま出発していたら、。広大な
グランドキャニオンの茶色の世界（到達どころか出発
までにも至ることなく終わったので「たぶん」としか
言えませんが。）の中で三人取り残されたら、。（もし
かしたらピューマの餌食になってしまったかも。あり
得ませんね。）と思うと、想像するだに恐ろしいこと
に、と「あの早朝の三人の視線はとても大事なものだ
った」と、最近でも時々話題に出るウソのようなホン
トの話です。

故原洋之介先生追悼文集
アジアと日本の発展に心を寄せて

2022年3月30日 初版印刷

編者 故原洋之介先生追悼企画発起人一同
発行者 早山隆邦
発行所 有限会社 書籍工房早山
〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2の3
秋葉原井上ビル602号
TEL 090-8323-8564
FAX 03-3722-3693

©Hara Younosuke 2022 Printed in Japan (検印省略)

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

ISBN 978-4-904701-61-4 C0033

乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

正誤表改訂

追悼文の目次（一部）等に誤植を出しました。お詫びし訂正致します（書籍工房
早山編集部）

P16 下段 12～13 行目 一八九三年末に → 一九八三年末に

P196 下段 11～12 行目 「人生で大事なことはみんなゴソラから教わった」
（山極寿一著、家の光教会刊）→「人生で大事なことはみんなゴリラから教わった」
（山極寿一著、家の光協会刊）

追悼文（順序、タイトルには間違い無し）

浅岡浩章氏～大山達雄氏 + 1 頁

尾高煌之助氏 間違い無し

鬼丸武士氏→ 69 頁

株田文博氏～佐藤仁氏 + 1 頁

椎野幸平氏 + 2 頁

篠田邦彦氏～下村恭民氏 + 1 頁

白石隆氏～深尾京司氏 + 2 頁

藤田幸一氏 147 → 142 頁

（藤原昌樹氏以降はノンブル正しい）